

# 大 森 新 田 古 墳 群

大森新田宅地造成事業に伴う  
埋蔵文化財の発掘調査報告書

2001

岐阜県 可児市教育委員会

## はじめに

古墳時代の可見市は、長塚古墳を始めとする前波の三ツ塚の存在に示されるように、前期の段階から周辺地域を治める首長が本拠地とした所であり、美濃の中でも先駆的な役割を果たしてきたと考えられます。古墳時代の後期には、市内のあちこちに古墳群が形成され、かつては 300基を優に超えていたとも、聞き及んでいます。

この度の調査は、開発に伴う緊急発掘調査であり、やむなく記録保存の措置を採ることになりましたが、大森新田地区においては初めての古墳の発掘調査であり、その過程においていくつかの新知見を得ることができました。一例を挙げますと、10基を超える古墳で群が形成されており、群集墳形成の始まりは他地区と同様、後期初頭にまで遡り、石室の構造には両袖式を採用すること等、この地区の特色があること、などであります。

調査から得られた資料は、当時の農民層の他地域との交流や文化、生活のレベルを知る恰好の材料となり、当時を考える上での重要な成果が得られました。ここにご報告申し上げます。

末筆ながら、本調査に当たりましては、事業者の方や工事関係者の皆様、地元自治会の皆様に、深いご理解とご支援を賜りました。心より厚くお礼上げます。

平成13年3月

可見市教育委員会  
教育長 渡邊 春光

## 例 言

1. 本報告書は、岐阜県可児市大森字笹洞1723番地の1他（地区名を大森新田という）に所在した大森新田古墳群中の6基についての緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、大森新田宅地造成事業に係る記録保存措置に伴うもので、開発事業者である内田橋住宅㈱から可児市が委託を受け、市教委が調査主体となって実施した。発掘調査に係る経費は、13,459,759円であり、全て事業者からの委託金で賄った。
3. 調査に当たりましては、事業主体者の内田橋住宅㈱様、工事主体者の三井建設㈱名古屋支店様、地元の皆様を始め、多くの方々にお話をいただきました。厚くお礼申し上げます。
4. 発掘調査の体制は次のとおりである。

		臨時職員	
・ 教育長	渡邊 春光		
・ 教育部長	吉田利世子（11年度）	飯田美代子	飯田 韶子
・ 教育部長	武藤 隆典（12年度）	伊佐治 誠	岩名 孝代
・ 社教課長	長谷川 強	上野 晃司	可児 定夫
・ 文化財係長	長瀬 治義（主任調査員）	北西 幸彦	香田 公夫
・ 同係主任	松本 茂生（調査員）	酒向 清美	本田 博志
・ 臨時職員	水野テツ子（調査補助員）	水野 良雄	
・ 臨時職員	成尾 孝子（調査補助員）		

5. 本書の編集は長瀬が行い、執筆は第1・2章、第3章第4節、第4章第4節、第5章第2節、第6章第4節、第7章第4節、第8章第4節、第9章を長瀬が、第3章第1～3節、第4章第1～3節、第5章第1節、第6章第1～3節、第7章第1～3節、第8章第1～3節を松本が行った。

遺物の実測は松本、成尾、本田、長瀬が、トレースは左記の者の他、水野テツ子が、現場写真は主に松本、遺物写真は主に本田が担当した。写真図版のレイアウトは長瀬による。

6. 現場での実測は、現況図は1/100で、その他は1/10を基本とし、手作業で行ったが、全体平面図や石室平面図等は、同様の縮尺で空撮、業者委託とした。
7. 本調査に当たり、次の方々にご教示頂きました。記してお礼申し上げます。  
田口 昭二 成瀬 正勝 吉田 英敏 渡辺 博人（敬称略）
8. 発掘調査に係る図面類と遺物は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）が保管する。

## 凡 例

1. 石室の袖は着物に習い、正式には玄室の内部から見て右袖とか左袖と呼称するが、勘違いされることが多く、本書では羨道からみた方向をもって左右の袖や壁と呼称する。
2. 方位は座標北を示しており、真北は0度2分45秒、磁北は6度40分0秒、共に東へずれる。

# 目 次

＊はじめに 例言 凡例 目次 .....	1
第1章 発掘調査の経過 .....	4
第1節 調査に至る経過 .....	4
第2節 調査の経過 .....	5
第2章 古墳群の立地と環境 .....	6
第1節 自然的・歴史的環境 .....	6
第2節 大森新田古墳群の立地条件 .....	6
第3章 大森新田5号墳 .....	9
第1節 墳 丘 .....	9
第2節 埋葬施設 .....	13
第3節 遺物の出土状態 .....	17
第4節 出土遺物 .....	19
第4章 大森新田6号墳 .....	21
第1節 墳 丘 .....	21
第2節 埋葬施設 .....	21
第3節 遺物の出土状態 .....	31
第4節 出土遺物 .....	32
第5章 大森新田7号墳 .....	35
第1節 墳丘と埋葬施設 .....	35
第2節 後世の埋葬と出土遺物 .....	37
第6章 大森新田8号墳 .....	39
第1節 墳 丘 .....	39
第2節 埋葬施設 .....	43
第3節 遺物の出土状態 .....	52
第4節 出土遺物 .....	54
第7章 大森新田9号墳 .....	56
第1節 墳 丘 .....	56
第2節 埋葬施設 .....	58
第3節 遺物の出土状態 .....	70
第4節 出土遺物 .....	72
第8章 大森新田10号墳 .....	74
第1節 墳 丘 .....	74
第2節 埋葬施設 .....	76
第3節 遺物の出土状態 .....	80
第4節 出土遺物 .....	87
＊出土遺物実測図と遺物観察表 .....	88
第9章 まとめと考察 .....	99
＊写真図版 .....	105



## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

平成7年1月、内田橋住宅㈱から大森新田宅地造成事業についての、土地開発事業事前協議の届出書が提出された。同年2月1日の総合開発調整会議をふまえ、市教育委員会は開発予定地内の埋蔵文化財の現地分布調査を実施し、同地内に周知の古墳2基（立石1・2号墳）を確認するとともに、新たに3基の古墳を発見した。

市教委はこの結果を事業者へ回答し、直ちに位置確認を行うと共に、遺跡保存について協議に入った。事業の計画は宅地造成であり、公園等のスペースはあるものの、それを古墳の保存のために充てることは、位置的にも事業の存続上不可能な状況であった。ここに至り、現状保存をあきらめ、原因者負担による記録保存の措置を採ることとなった。

古墳の基数は、その後の発掘調査着手の早い段階でもう1基増え、合計6基の緊急調査となった。各古墳の対応関係は次のとおりである。尚、立石1・2号墳については、他の古墳と同一の古墳群に属することが明白であり、今後の混乱を避けるために、立地する地区の名称を統一的に採用して、本書では次のように呼称する。

- ・大森新田5号墳 現地踏査により確認
- ・大森新田6号墳 現地踏査により確認
- ・大森新田7号墳 現地踏査により確認
- ・大森新田8号墳 周知の遺跡（立石2号墳）21214-04839
- ・大森新田9号墳 周知の遺跡（立石1号墳）21214-04838
- ・大森新田10号墳 調査途中で確認

開発の諸手続きが進んで平成11年11月22日に開発許可が下り、事業が確定していく中、以下のように文化財保護法の手続き、及び事業者との協議をおこなった。

発掘調査の期間は、平成12年1月5日から同年6月30日までの6ヶ月間を要した。

#### \*事業者との協議

- ・委託申込（受理） 平成10年3月4日付 内田橋住宅㈱より
- ・協定書の締結 平成11年8月2日付 内田橋住宅㈱と可児市長（11・12年度）
- ・委託契約書の締結 平成11年11月22日付 内田橋住宅㈱と可児市長（11年度）
- ・変更契約書の締結 平成12年3月31日付 内田橋住宅㈱と可児市長（11年度）
- ・委託契約書の締結 平成12年4月1日付 内田橋住宅㈱と可児市長（12年度）
- ・変更契約書の締結 平成13年3月30日付 内田橋住宅㈱と可児市長（12年度）

#### \*文化財保護法の手続き

- ・57条の2第1項（発掘届出書の進達）教社第106号 平成11年7月14日付 県教委宛
- ・98条の2第1項（発掘調査の報告）教社第211号 平成12年2月3日付 県教委宛  
（通知書の受理）教文第35号の14 平成12年2月17日付 市教委宛

## 第2節 調査の経過

調査は、事業者による樹木の伐採、片付けの後、大森川の下流から上流へ向かって、9号墳→8号墳→10号墳→6号墳→7号墳→5号墳の順に着手し、それぞれの地点においては、現況測量の後、重機による表土剥ぎを委託するとともに、埋葬主体部と墳丘、周囲の調査を実施した。現況測量は1/100にて実施し、3級基準点からの標高を表示している。

横穴式石室を埋葬主体部とすることは容易に推定できたが、とりかかりの9号墳では、通常の開口方向とは逆の北入口であったため、当初は墳丘断ち割り用のトレンチの設定に迷いがあった。以後は、ほとんどがこの方向を入口としていたため、石室奥壁へのトレンチ設定は容易となる。

保存状態が1/3程度であった7号墳以外は、思ったよりも保存状態は良く、天井石の崩落や側壁の崩落、破壊が一部にみられた程度である。人力では手に負えない石材は、重機の力を借りることとなった。石室内は無論のこと乱掘を受けており、天井石を外し、或いは奥壁側を破壊しての侵入が認められた。この結果、7号墳以外においては、最後の埋葬に伴う閉塞石がほぼそのままの状態を保つこととなり、良い調査が得られることとなった。おそらく、乱掘者は手慣れており、それがために一般的な開口方向を当てはめ、より労力を要する奥壁を倒し、或いは除去しての侵入となったのではないかと推察される。

調査は、石室上面が検出され、主軸のおおよそが判明した段階で主軸をM列とし、2mマスでの杭打ちを行った。と同時に、奥壁へのトレンチと主軸に直交する形で側壁への2本のトレンチを、墳丘の土層観察用に設定した。石室内部は、原位置を保たない石材を慎重に見極めながら掘り下げたが、床面に至る10cmの間は排土を土嚢袋に詰めて保管し、後にフルイにかけた。

また、墳丘や石室床面の断ち割り、精査は地山までとし、解体調査まではできないものの、墳丘や石室の構築過程の把握に努めた。

平面や立面、断面に係る石室や閉塞石、葺石、墳丘土層、遺物の取り上げ等の実測図は、1/10の縮尺を原則とし手書きにて行った。但し、石室の平面図(1/10)と一部の葺石の平面図(1/10)、調査終了間際の全体平面図(1/100)については、空中写真と共に業者委託とし、ラジコンヘリによる写真測量で対応している。また、手書きによる1/10の原図は、整理段階で1/20に縮小コピーしてから、トレースを実施した。

調査終了後における法手続きは次の通りである。

### \*文化財保護法等の手続き

- ・65条、遺失物法1条第1項(文化財保管証、埋蔵物発見届)

教社第96号 平成12年7月12日付 県教委宛、可児警察署宛

- ・発掘調査終了の報告 教社第97号 平成12年7月17日付 県教委宛

- ・57条の6第1項(遺跡発見の通知) 教社第126号 平成12年9月5日付 県教委宛

## 第2章 古墳群の立地と環境

### 第1節 自然的・歴史的環境

可見市は岐阜県の南部に位置し、市域の北辺は木曾川が蛇行する。木曾川以北の美濃加茂市も含め現在は盆地状を呈しているが、第三紀中新世に可見湖であった名残りである。

基盤の中古生層は東・西辺部で露頭し、標高 300m を超える丘陵の最高所を形成する。標高 110～180m 付近に露頭する平牧層は、可見湖の堆積物で主に凝灰質砂岩から成り、市域の中央部付近に認められ低丘陵を形成するが、横穴墓造営集団と石棺製作工人の関係を推定する上で重要である。横穴墓は、平牧層が露頭する久々利川水系のみで 100基以上が確認されており、高塚の古墳とも相まっていくつかの古墳群を構成するなど、特異な地区である。木曾川流域に分布する家形石棺の一部は、この地において切り出し、製作されたものであり、横穴墓造営集団や木曾川中流域地区の川原石積石室造営集団と、密接な関係の中で供給されていったに違いない。

南部一帯は、第三紀鮮新世の古木曾川の氾濫による堆積物である、土岐砂礫層が覆う。この地層には団塊的に白色粘土が含まれ、平安時代以降の美濃窯の大発展を促す必要条件となり、その窯操業の舞台となる。

北部一帯の平坦地は、主に第四紀に属する木曾川の段丘堆積物から成り、川に沿って低・中・高位の三段が認められる。古墳時代の集落は、川合宮之脇遺跡（低位）や欠ノ上遺跡（中位）など、この段丘上の各所で見受けられる。古墳の造営もいたる所で見られ、前期の前波古墳群（中位）や後期の川合古墳群（低位）、土田渡古墳群（低位）が名高い。

### 第2節 大森新田古墳群の立地条件（第1図）

本古墳群は、先の久々利川の支流、大森川が北西へ向かって流れ、開折した細長い沖積地の最奥部（その後大森川は、久々利川→可見川→木曾川の順で合流する）、右岸・低丘陵上に点々と立地する。この地区の沖積平野はかなり狭く、古墳の立地する丘陵との比高差は、数m程度である。周辺も含めた現地踏査によって合計12基を数えた時には、少なからずの驚きであった。それは、①まとまった集落や生産基盤の立地条件を備えていないこと。②市域においてもかなり辺鄙な場所であること、などに起因している。

微視的にみた各古墳の選地状況は、概ね3つの小群に分けられる。最奥部の1～4号墳（一部に不確実性もある）と本開発区の5～10号墳、最下流部・丘陵支脈の尾根上の11・12号墳がそれであるが、5号墳の選地（占地）は群形成の初期段階であることにも起因するのか、単独的であり示唆的である。

本調査区は、巨視的には前節の土岐砂礫層の堆積・露頭範囲ではあるが、大森川の河床には平牧層がみられ、崖面とその近くでは中古生層のチャートが所々に露頭する。土岐砂礫層の露頭範囲は、この大森川に近い崖面近くと丘陵の奥まった所であり、特に平坦な部分には、赤土のローム層が乗り、露頭するなど、複雑な地質構造が認められる。

石室の石材には、このチャートの岩盤から採取された石が多用され、大きな石の間隙や閉塞石、礫床などには土岐砂礫層中の大小円礫も使われていた。また、チャートや土岐砂礫層の露頭範囲は限られているため、各々の古墳の立地に従った石材の用途にも違いが、

特に葺石に認められた。丘陵支脈の先端に選地する5号墳と丘陵の崖面に近い8号墳では、土岐砂礫層中の大きな円礫が、チャートの露頭に近い9号墳では、その礫がそれぞれ用いられている。少し奥まった所に選地した6号墳と10号墳は、赤土の露頭部分にあるためか、葺石を備えてはいない。

古墳群の立地する丘陵の西側、現在は笹洞溜池となっている小谷は、土岐砂礫層地帯特有の窯焚きの条件（粘土、水、松林、傾斜、風）を備えており、少なくとも8基の古窯址が確認できる。そのほとんどは谷の西側であり、古代～中世に属するものである。奈良時代の須恵器窯が1基、平安時代の白瓷窯が2基以上、平安時代末の山茶碗窯が4基、鎌倉時代末の山茶碗窯が1基、がその内訳であるが、その多くは攪乱、削平の著しい溜池の岸辺での表採状況・資料を基にしており、不確定要素を含んではいらる。

二野東段遺跡でも確認されたように、土岐砂礫層に多く含まれるチャートの円礫は、縄文時代に小型石器を製作する際に、多用された石材である。出土した小型石器と剝片、石核に占める各石材ごとの割合は、次のようであった。①木曾川の低位段丘上に立地する北裏遺跡では、木曾川の川原から採取した安山岩（下呂石）が多用され（下呂石約77%、チャート約16%）、②中位段丘上の徳野遺跡ではその割合が少し減り（下呂石約74%、チャート約19%）、③土岐砂礫層地帯にほど近い丘陵上の二野東段遺跡では、チャートの割合が圧倒的となる（下呂石約8%、チャート約89%）。

ここ大森新田古墳群の立地する低丘陵上でも、盛土や周囲の攪乱土から、バラバラと剝片が散見され、縄文人の活動を裏付けたが、そのほとんどは地山中のチャートを利用していた。遺構や土器片は認められなかったが、下呂石も数片目止まり、石器製作の場を推定するだけで良いのかどうか。

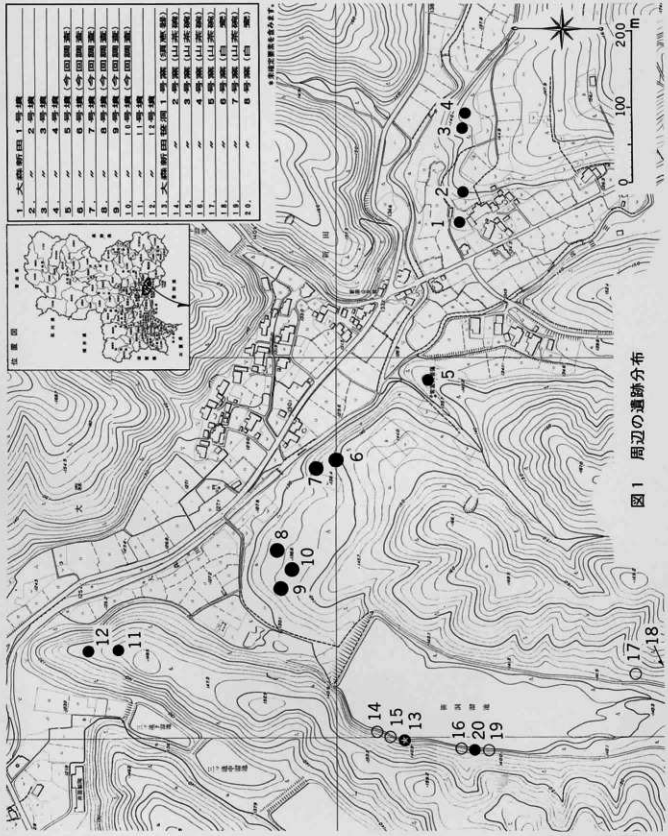
#### \*参考文献

- ・可見市教育委員会『羽崎古墳群』 1985
- ・可見市教育委員会『久々利西山横穴墓』 1994
- ・可見市教育委員会『川合遺跡群』 1994
- ・可見市教育委員会『徳野遺跡A地点』 1998
- ・可見市教育委員会『二野東段遺跡・横穴墓』 1999



調査参加者（6号墳にて）

1.	大森新田 1号墳
2.	2号墳
3.	3号墳
4.	4号墳
5.	5号墳 (今田岡家)
6.	6号墳 (今田岡家)
7.	7号墳 (今田岡家)
8.	8号墳 (今田岡家)
9.	9号墳 (今田岡家)
10.	10号墳 (今田岡家)
11.	11号墳
12.	12号墳
13.	大森新田新田 1号墳 (須賀家)
14.	2号墳 (山本家)
15.	3号墳 (山本家)
16.	4号墳 (山本家)
17.	5号墳 (山本家)
18.	6号墳 (山本家)
19.	7号墳 (山本家)
20.	8号墳 (山本家)



※ 調査記録を各号に添付

図1 周辺の遺跡分布

### 第3章 大森新田5号墳

#### 第1節 墳丘(図2・3・6、図版1)

5号墳は他の5つの古墳と地理的に離れているだけでなく、古墳が造られている地形が大きく異なる。元々ある丘の突端を利用して造られており、周囲は南側を除いて急な斜面である。

またこの古墳は、後世の時代の稲荷様の御社として利用されている為に、墳丘全体が平坦に加工されており、発掘調査前にその形状や規模を正確に知ることは困難であった。

墳丘上には、御社の基底石であった岩が1個残っていた。これはかつて天井石として使われていたと考えられるが、御社を作った時点で原位置から動いていると思われたので、表土剥ぎの際に重機で取り除いた。

攪乱土を取り除き墳丘を検出した結果、直径約1.2mの円墳であることが確認された。また墳丘全体を円形に縁取るように円礫による葺石が検出され、これが墳丘の裾の部分であると断定した。

なお葺石と思われる石組みは墳端以外の部分でも多く検出されており、特に顕著なのが東西のトレンチとその周辺部分で、墳丘の表面及び盛土の中から多くの円礫が検出された。

墳丘の盛土の状況を調べるために、石室の主軸に直交する形で東西に1本づつと、主軸の延長線上の石室の北側に1本の計3本のトレンチを幅1mで設定し、墳丘を断ち割った。

トレンチの断面を観察した結果、断ち割りを行った3本のトレンチの全てから地山と旧地表のカット面が検出された。これは地山及び旧地表を長方形プランに掘り込んで墓壇を造り、古墳の主体部である石室を造り、石室周辺を盛土で埋めるという手法が使われたことを表している。

盛土の積み方については、石を積み上げた部分の周辺1~2mの範囲は厚くしっかりとした層の盛土が盛られ、そこから外側は旧地表面を削り、地山の直上から薄くならかな層の盛土を積み上げている。

墳丘の盛土は、旧地表・地山を含めて北トレンチで9層、東トレンチ9層、西トレンチ11層に分層可能で、基本的に褐色(明褐色)と赤褐色の層から成り、部分的に黄褐色と灰褐色の層が混じっている。地山(暗褐色)と旧地表(黒褐色)をそのまま盛土として利用した部分は見受けられなかった。全体的に土のしまりはよく、墳丘を造る際に積み上げた土をよくたたきしめたものと思われる。

東西のトレンチ内の①及び②の層からは、多くの埋め殺しの円礫が検出された。

東トレンチの①の層では特に顕著で、盛土の強度を補完するためなのか、積み石塚の如く多くの礫が埋め込まれている。

墳丘の周辺については、古墳の南側以外は全て急な斜面になっており、そのほとんどの部分が地山の面であり、周溝と思われる遺構等は検出されなかった。

なお墳丘西側にある溝は、近年まで使われていた山水の取水用のものであり、古墳と直接的な関係はない。

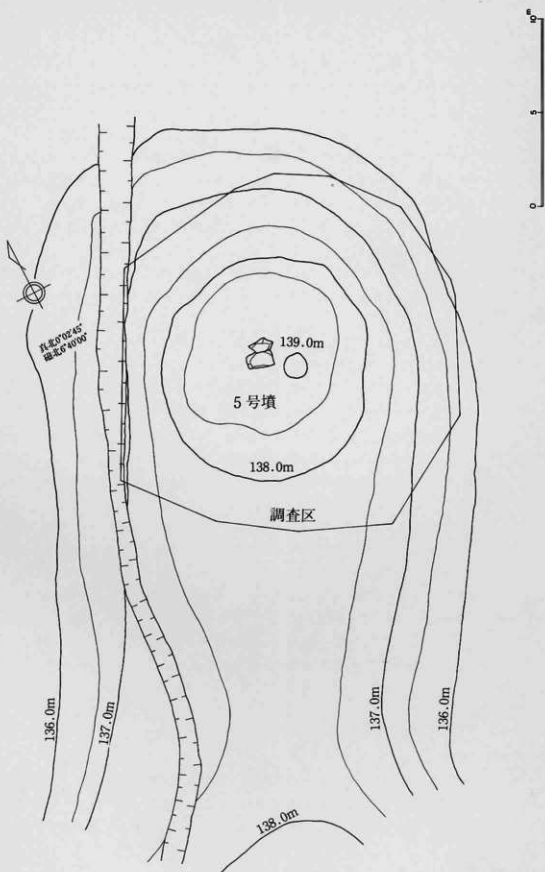


図2 5号墳の現況





## 第2節 埋葬施設(図4・5、図版1～3)

### (1) 石室の概要

主体部である石室は墳丘のほぼ中央に位置し、南西の方向に開口している。

形状は単室構造片袖式の堅穴系横口式類似石室と思われ、玄室奥壁から羨道の端部までの石室全長は約8mを測り、今回発掘した古墳の中では最も規模の小さいものである。

石室の残存状況として、まず天井石は残っておらず、発掘前の状態で既に墳丘の上部がかなりの削平を受けていた。

墳丘上に残存していた御社の基底石は、元は天井石であった可能性が高いが、築造された時点の位置からは動いていると思われたので、墳丘の表土を剥ぐ際に重機で取り除いた。

また石室内に幾つかの大きめの石が落ち込んでいたが、これは崩落した天井石ないしは側壁の礫であると思われる。

石室は玄室・羨道に分けることができ、玄室の東側と羨道は共に側壁の残りがよく、閉塞石の石積みもきれいに残っていた。

また奥壁に関しては、基底石3つとその上の1段が残っていたが、築造当時はより高い位置まで礫が積まれていたと思われる。

玄室の床面からは礫床が検出された。礫床は床面全体を覆っており、奥壁の手前部分が一部無くなっていたが、それ以外は非常に残りがよい。また棺台と思われる礫も玄室中央付近から出土している。

使用されている石材は、古墳群周辺に存在するチャートの岩盤から採取されたもので、礫床と閉塞石以外は全て角礫である。礫床・閉塞に使用されているのは土岐砂礫層に含まれる円礫で、古墳の周辺、或いは隣接する大森川周辺より採取されたと思われる。

石室の平面形は、玄門から羨道のラインは南北方向に直線的に延びており、玄室は奥壁に向かって西寄りに微妙な曲線を描き、傾いている。

立面形は、羨道・玄室共に残存している部分では、ほぼ垂直に立ち上がっているが、天井石に掛けての状況については現状では不明である。

仮に設定したM列の主軸方位は、 $N-20.5^{\circ}-E$ である。

### (2) 玄室

玄室内は発掘開始当初、完全に流土によって埋まっていた。その上墳丘の上部は削平され、天井石は原位置を保っておらず、側壁・奥壁の一部が欠落していた。

墳丘の表土剥ぎを行い、石室の輪郭が確認できるようになった段階で南北方向に主軸を設定し、玄室内の攪乱土と崩落した石を取り除いた。玄室内に崩落した石には天井石と思われる石も含まれていた。

玄室の平面形は両側壁中央部分が微妙に張る長方形プランを呈する。その最大幅は1.8mを計り、奥壁から玄門までの玄室長は約4mである。東側壁は玄門内側より約3.6m東に基底石が設置された片袖式となる。両側壁はほぼ平行に位置しているが、平面的には奥壁の方向に向かって西に傾いている。奥壁の幅は1.6mである。側壁は、東側の壁の方が全体的に残りがよく、西側の壁は奥壁に向かって残存している段数が少なくなる。

側壁の基底石は、高さ20～40cmの板状の礫を主軸方向に横長に1段配し、隙間に小さく打ち割った礫を詰め込みながら、その上に大きめの角礫を積み上げている。





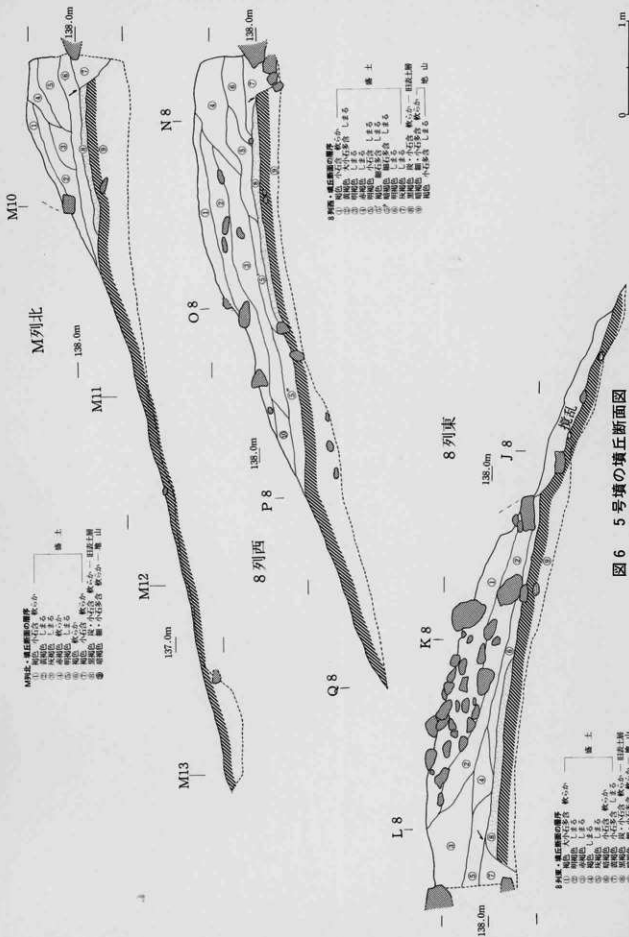


図 6 5号墳の墳丘断面図

現存する側壁は、残りのよい部分で基底石から最大で5段で、高さが約1.3 m。それから上の部分に関しては、天井石を含めて不明である。

奥壁については、60～80 cmの方形の石が4つほど基底石として配置されているが、玄門部のレベルから見て、あと数段は高い位置まで礫が積まれていたと推測される。

玄室内床面上からは礫床が検出された。地山を平坦に数10 cm掘り下げた上に数cmの敷土を敷き、直径10 cm前後の円礫が敷きつめてあった。礫床は玄室内全体に残存していたが、奥壁の手前40 cmぐらいの範囲では検出されなかった。

床面はほぼ水平で、側壁の基底石は地山直上より置かれている。

礫床の図面作成後、玄室内の西半面の礫床を取り除き、敷土を地山面まで掘り下げて断ち割った。玄室内の敷土は1層で、固くたたきしめられていた。

玄室中央付近には棺台と思われる偏平な角礫が数個残っていたが、棺そのものの痕跡については確認できなかった。

### (3) 羨道

羨道部分も当初は攪乱土によって覆われていた。しかし墳丘の発掘が進むにつれて、約1 m幅で玄門部から墳端部まで直線的に積み重ねられた円礫が検出され、その大半が閉塞石であることがわかった。

玄室と羨道の境である玄門部は、両壁とも60～80 cmの方形の角礫を数段積み重ねて造られている。西側の壁は羨道の側壁と続くように横長の礫を5段に積み上げてあり、東側は高さ30～50 cmの正方形の石を一端積み上げ、さらに東へ36 cmほどいった位置から玄室の壁が始まっている。

羨道の平面形は玄門から墳端まで直線的に伸びており、その全長は4 m、最大幅は1.1 m、玄門部の幅は約1 mである。立面形は両側壁ともほぼ垂直に立ち上がっている。

羨道の両側壁は共にきれいに残っていたが、玄室と違って比較的小さな礫を乱雑に積んである。側壁は玄門から外側へ1 m位しかなく、そこから外の部分については盛土の上の方に礫を埋め込んであるだけで、壁状にはなっていない。

5号墳の羨道は今回調査した他の古墳と違って造りが特殊である。

それは、羨道が玄室の床面より一段高い位置にあり、竪穴式の玄室に横方向から通路を付けたような構造となっている点で、羨道部分の地山を玄室の床面と同じレベルまで緩やかな傾斜で掘り下げ、その上に客土を敷き、さらに大きめの角礫を敷きつめて段状に加工してある。

この羨道内の床は、玄門部では高さが40 cmほどあり、墳端に向かうにしたがって床面の厚みが徐々に薄くなっている。

床面の端の部分には、大きさ20 cm程度の角礫を直線的に配して仕切りを作っており、この仕切り石から墳端までの間は、地山を掘りくぼめたままの床面になっている。

なお閉塞石については羨道内全体を塞ぐように円礫が乱積されており、玄門部では高さが約80 cmあり、これが墳丘の傾斜に合わせて墳端部まで続いている。

人頭大内外の大きさの閉塞石は、約320個を数えた。

## 第3節 遺物の出土状態(図5、図版4)

5号墳の石室内の副葬品と思われる遺物は、玄室内の出土位置から、おおむね2つに分

けられる。

1つは玄門東側の袖部分に置かれていた多数の須恵器群で、もう1つは奥壁手前の西側部分に集中している鉄器類である。これらは共に礎床面より検出されており、最後の埋葬が行われた当時の位置をほぼ保っていると思われる。

まず玄門東側の袖部分の須恵器については、坏・高坏・短頸壺など計37点が一括遺物として出土した。

これは出土の状況から見て、副葬品として埋葬された物を、後の追葬の際に片づけたあとではないかと思われる。また出土した遺物を整理して年代ごとに分類したところ、少なくとも3つの年代に分けることが出来た事からも何度か追葬が行われ、その際にこの位置に置かれたものであると断定できる。

土器については、この他に閉塞石の中や墳丘の攪乱土の中からも出土しているが、いずれも盗掘などの持ち出しによって、外へ運ばれたものと考えられる。

また玄室内の流入土の中から山茶碗と小皿が出土している。これは後の時代に、ここを埋葬地として利用していた頃のものと思われる。

鉄器類に関しては、5号墳の玄室内から出土したほとんどの鉄器が奥壁の手前の部分に集中している。鉄鎌・刀子・金具類の破片などが主であるが、礎床面より出土したこれらの遺物は後世の攪乱をあまり受けていないものと思われる。

なお玄室内の床面に関しては、主軸の直交する線を玄室中央に引き、玄室内を4つのブロックに分けて、礎床から上10cm程度の土を簡にかけて調査したが、他の古墳のように玉類は検出されなかった。

#### 第4節 出土遺物 (図37~39・44、図版4~8)

出土遺物の個体数は次の通りである。詳細は出土遺物観察表に譲る。

出土位置	縄文		古墳後期 / 須恵器				金属器				山茶碗類		
	石器	埴片	坏蓋	坏身	高坏	短頸壺	鉄鏃	刀子	止金具	真金具	鋸	碗	小皿
玄室・羨道			12	17	5	3	7↑	3↑	7↑	1	1	4	1
前庭部													
墳丘・周回					1								
調査区前域	4	12											
合計	4	12	12	17	6	3	7↑	3↑	7↑	1	1	4	1

##### (1) 須恵器類 (1~31)

坏蓋が12個体と坏身が17個体、高坏5個体、短頸壺が3個体、全て玄室の床面から出土している。そのほとんどは追葬時の片付けによるものと考えられるが、1と2の坏類や図示できなかった坏身片等に片付け残しも少数みられ、高坏片等は閉塞石中から出土した。また、持ち出されたと考えられる別の高坏片が、墳丘攪乱層からも出土している。

##### ・坏類

坏類は悉く尾張系のもつとみられ、大きく3型式に分類できる。1と2はセットとみられ、その口径や立ち上がり具合、端部の処理具合から、渡辺氏編年(以下略す)尾張3型式・斎藤氏編年(以下略す)東山61号窯期後半(TK10併行)に属するものと考えられる。玄門袖部に片付けられた坏類は、その法量からは、坏蓋の口径が13.2~13.0cmを測るもの(6~8・10)と12.5~12.2cmを測るもの(3~5・9・11)、坏身の口径が11.9~11.7cmを測るもの(12・14・17・20・24)と11.4~10.4cmを測るもの(13・15・16・18・19・21~23・25)に分けられる。これらのそれぞれ2区分は、ある程度の目安としては時期差を含んではいるが、受部径や端部の調整、立ち上がり具合、ケズリ具合を総合的に判断すると、その型式差は必ずしも一致しない。ただ、蓋・身共に前者は明らかに尾張4型式・(+ )窯期に属するものであり、それぞれの後者の中には明らかに尾張5型式・東山44号窯期前半のものを含んではいる。

ここでは玄室床面出土の坏類を、東山61号窯期後半と(+ )窯期、東山44号窯期前半の、少なくとも3時期に亘るものとして考えておきたい。尚、1と2以外のセット関係については言及しないが、その胎土や色調には3~4種が見受けられる。

##### ・高坏

図示できた3点はいずれもほぼ完形品である。26は3方透かしの小型品で、長脚2段化する前の時期、尾張3型式併行・東山61号窯期後半に属するものとみられる。閉塞石中出土の脚部片もこの時期に該当しよう。27は長脚2段3方透かしで、口径17.5cmの大型の坏部を乗せる。自然釉がべつとりかかり、この一部分は閉塞石中から出土している。尾張5型式併行・東山44号窯期前半に属するものと考えられる。28は長脚から短脚化する過渡期のもので、無段無透かしである。墳丘出土の脚部片とも合わせ、尾張7型式併行・東山50号窯期前半に属するものであろう。いずれも無蓋である。

##### ・短頸壺

29は肩部にトビカソナによる列点文と2条の凹線を施し、外面底部にヘラ記号を刻む。30も同様に、2条の凹線文とヘラ記号を有する。尾張5型式併行・東山44号窯期前半に属

するものと考えられる。31は埴と言ったほうが良からうか。扁平な胴部に頸部が直立する。尾張6型式併行・東山44号窯期後半に属するものと考えている。

#### ・須恵器類のまとめ

このように5号墳出土の須恵器類は、天井石が外され攪乱や持ち出しが予想はされるものの、玄門袖部の片付けによる一括遺物はそのままの状態であり、良好な資料である。

須恵器からみる古墳の築造時期は、東山61号窯期後半（およそ6世紀第2四半期）で、細かくみれば、（十）窯期と東山44号窯期前半、東山44号窯期後半、東山50号窯期前半（およそ7世紀第2四半期）の5時期に須恵器の所属時期を求めることができる。これをそのまま埋葬に当てはめれば追葬4回となり、最後の追葬に伴う副葬遺物の片付けもみられることから、初葬の後5回の追葬が推定できるが、型式の細分には問題が残る。

#### （2）鉄器類（37～57）

全て玄室内の礎床面から出土しており、そのほとんどが奥壁の左隅にまとまって出土した。これを原位置の反映として捉えれば、棺外遺物とみてとれよう。鉄鍔が7個体以上と刀子3個体以上、止金具7個体以上、責金具1個体、鋌1個体がある。

鉄鍔37～44には、刃部が細身のもの（37）と広身のもの（38）があり、共に柳葉形を呈する。両刃のものばかりであるが、44は刃の横断面が半月形を、他は凸レンズ形を呈している。軸と柄部の境は段をなし、42と44のみ刃と軸部の境に閃を有する。

刀子45～48は、小型のもの（48）とやや大きめのもの（46,47）があり、46の柄部には木質痕が残る。48は完形品で長さ8.5cmを測る。

49はおそらく刀類の責金具、50は鋌である。51～57は、長方形の鉄板に鋌の付いた止金具とみられ、2列に鋌が並ぶ広身のもの（51）と1列の細身のもの（52）がある。田中新史氏報告の諸例からみても、矢を挿入する胡弓や鞆に伴うものと考えるのが妥当である。

#### （3）その他の遺物（32～36）

玄室内の埋土中からは、山茶碗の碗が4個体と小皿が1個体、ほぼ完形の状態で出土している。碗は全て白土原1号窯期に、小皿は白土原1号窯期から明和1号窯期にかけてのものである。時期もまとまっておりほぼ一括出土であることから、鎌倉時代の中～後半にかけての時期に、埋もれた玄室に墓穴を掘って（天井石は既に取り去られていた）埋葬行為が行われたのではないかと推定できる。

また、すぐ眼下に移されていた稲荷様は、昔はこの墳頂にあったようで、発掘前には天井石などを利用した石組の痕跡がみられ、近代の御神酒壺や盃、小皿、碗などの供献に伴う磁器類の他、キツネを形どった磁器片も散在していた。更に、発掘区全体においては、縄文時代の石鍔3個（177～179）と石匙（176）、割片12個も採取している。石材は、チャートのみでなく、下呂石やサヌカイトとみられるものもあり、生活の痕跡を示す。



## 第4章 大森新田6号墳

### 第1節 墳丘(図7・8・11、図版9)

6号墳は、発掘調査前にすでに石室の一部が地上に露出しており、主体部の位置をおおよそ確認することができた。また全景についても円丘状の小山であったことから、円墳であることが予想された。

伐採作業終了時に墳頂部に露出していた幾つかの石を基に石室を想定し、東西の方位で主軸(M列)の設定を行った。

続いて表土剥ぎを行い、墳丘全体を検出した結果、直径約1.6mの円墳であることが確認された。また墳丘表面及び墳端には葺石は検出されず、埋め殺しと思われる石材もトレンチ内で一部確認されたのみであった。

墳丘の盛土を調べるために主軸に直交する形で、南北方向にそれぞれ1本ずつと主軸の延長線上の東側に1本の計3本のトレンチを幅1mで設定し、墳丘を断り割った。

まず3本のトレンチに共通する点として、地山・旧地表のカット面が検出された。これは5号墳でも述べたとおり、主体部を築造する際に地山・旧地表を掘り込み、その土壌の中に石室を造り、周辺を盛土で固めるという築造方法を行っている為である。

墳丘の盛り方としては、石室から半径3m位の範囲は厚くしっかりと盛土を盛っているのに対して、石室の外側4～5mの地点では旧地表面をカットし、そこから墳端までの間は地山の上に盛土を薄くならかに何層か重ねて仕上げている。

墳丘の盛り方についても、他の古墳と共通した方法をとっている。

盛土は東トレンチで17層、南北のトレンチで20～21層に分層可能である。墳丘の表面には若干攪乱の層(①や②)が残っているが、おおむね赤褐色の層と暗褐色(暗赤褐色)の層を交互に積み重ねて、強く固めている。トレンチ断面から測って、盛土の最も残りのよい部分の高さは、約80cmである。

また盛土の土質や土の中に細石が多く含まれている点などから、周辺の旧地表及び地山を削り取って盛ったものと思われる。

東トレンチでは墳端部分に大きな攪乱の層が溝状にあり、この攪乱が南トレンチの方向へ墳丘をなぞるように続いていた。

そのためこの攪乱部分の全体を検出した結果、周溝として意図的に造られた溝ではなく、南斜面と墳丘の間の自然な地形からなる帯状の窪みであることがわかった。

南トレンチ内では、側壁の外側3mの位置の旧地表上に50cm程の方形の石が2つ並べられていた。この石列は埋め殺しの礎で、盛土の中に続いていた。なお埋め殺しの石が確認されたのは墳丘全体でもここだけである。

墳丘周辺に関しては、周溝と思われる遺構は確認できなかった。

### 第2節 埋葬施設(図9・10・12、図版9～12)

#### (1) 石室の概要

主体部である石室は墳丘のほぼ中央に位置し、西に開口している。

形状は単室構造両袖式の横穴式石室で、玄室奥壁から前庭部の端までの石室の全長は約

9 mを測る。

石室の残存状況は、まず天井石は全て残っておらず、墳丘の上部が削平を受けた為に石室の側壁の一部が外部に露出していた。また玄室内に幾つかの石が落ち込んでいたが、これは、崩落した天井石か側壁の一部と考えられる。

石室は玄室・羨道・前庭部の3つに分けることができる。羨道・前庭部はそれぞれ側壁の残りがよく、閉塞部分も石積みがきれいに残っていた。

玄室の側壁は、北側は上まで良く残っているが、南側の奥壁近くの一部は大きく崩れた箇所があり、その周辺も石積みが安定していなかった。また奥壁に関しては、横が60～80 cm、高さ1 m前後の板状の礫が基底石として3枚残っていた。

なお玄室の床面からは、床面全体を覆う礫床が検出された。

使用されている石材は、古墳群周辺に存在するチャートの岩盤から採取されたもので、礫床と閉塞石以外は全て角礫である。礫床・閉塞に使用されているのは土岐砂礫層に含まれる円礫で、古墳の周辺より採取されたと思われる。

石室の平面形は、玄門から羨道にかけては東西の方向に直線的に伸びており、玄門から2.7 m付近より前庭部の側壁となり、左右に外反しながら墳端部分につながるハの字を描く。

玄室については、玄門から奥壁まで主軸を中心にほぼ直線的な線を描くが、形状は両側壁の中央部分で最大幅を持つ胴張りの長方形プランである。

立面形は、羨道が床面より垂直に立ち上がり、前庭部は上に行くほど外へ開いていく。玄室は北側の壁は床面から垂直に立ち上がっているのに対して、南側は玄門に近い部分ほど側壁の中段あたりから内側に迫り出してくる。天井石につながる持ち送りの構造と思われる。

仮に設定したM列の主軸方位は、S-72.5° - Eである。

## (2) 玄室

玄室内は当初、攪乱土と崩落した石で埋まっていた。墳丘も上部が削平を受けているようで、玄室内の側壁が露出していた。天井石も取り去られており、残っていなかった。

玄室の平面形は、両側壁中央部分がやや膨れる胴張りの長方形プランを呈する。その最大幅は1.7 mを測り、奥壁から玄門までの玄室長は約3.5 mである。両側壁は、玄門内側より約20 cm外へ張り出して設置されており、これが両袖式の玄門部を作り出している。奥壁の幅は1.4 mである。

玄室内の側壁は、北側の壁が残りがよく、最もよく残っている部分で5段を数え、床面からの高さは約1.4 mを測る。しかし奥壁側に向かうにしたがって、残っている段数が少なくなる。

南側壁も同様で、玄門付近では石積みの残りがよいが、側壁中央付近から奥壁の手前にかけての部分が大きく崩落しており、基底石しか残っていない部分もある。この周辺は残っている石積みも安定が悪く、検出する際に崩れてしまわないよう気をつかった。

側壁の石の積み方は、横40～70 cmの大きさの角礫を主軸方向に横長に配して基底石とし、その上に基底石と同じサイズの角礫を積んでいる。また大きな礫の間には小さく打ち割った礫を詰め込んである。

南側の側壁の大きな特徴は、北側の側壁が基底石からほぼ垂直に立ち上がっているのに

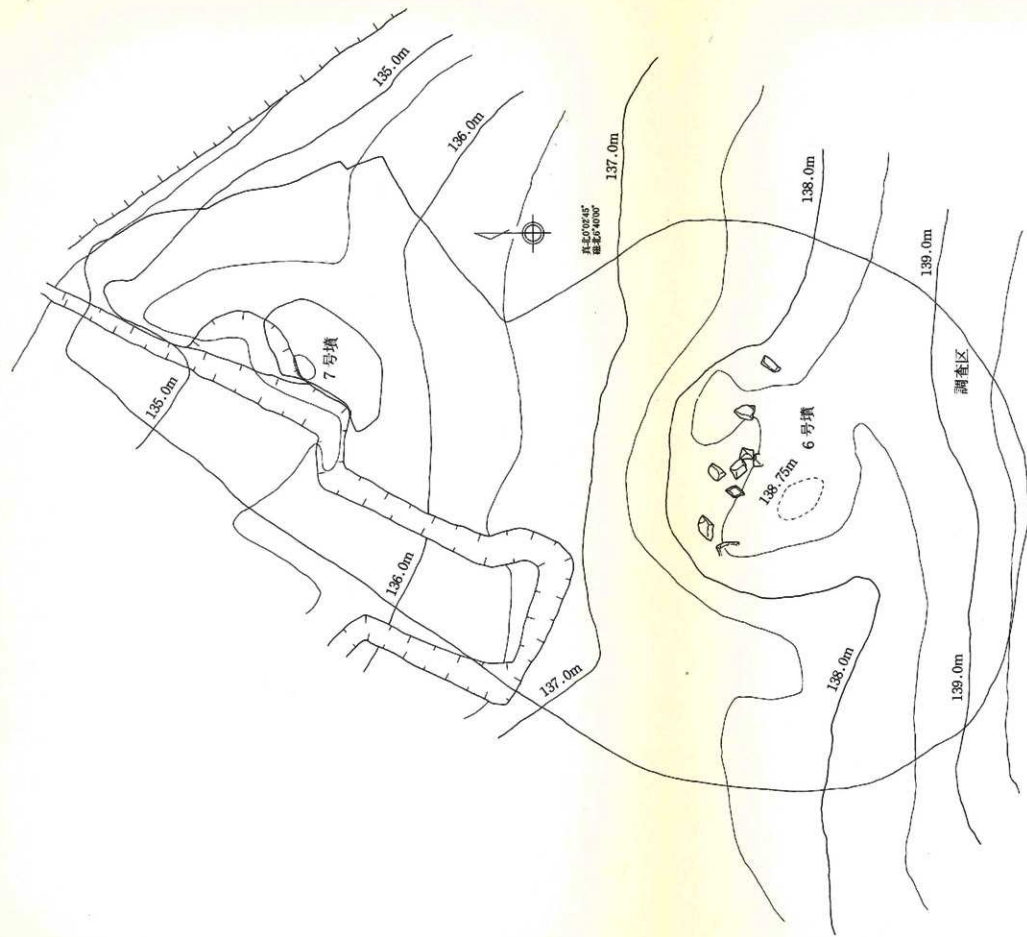


図7 6・7号墳の現況





対して、玄門付近でより顕著になるのだが、積み上げられた石が上に行くほど内側へ傾斜している点である。断面図C-C'及びD-D'（図10）を見ると明らかなように南側の側壁は持ち送りの構造になっている。

玄室内床面からは、礫床が検出された。地山を平坦に10cmほど掘り込んで、その上に敷土を敷き、直径10～30cmの円礫が敷きつめてあった。礫床は玄室内全体に残存していたが、奥壁の中央手前的一部分だけが割れていた。

床面はほぼ水平で、側壁の基底石は奥壁に近い所では地山直上より積み上げられているが、玄門に近い部分では地山直上ではなく、敷土で高さを調整して積み上げられている。これは石室の壁面の水平を保つための工夫であったと思われる。

また礫床面の図面作成及び閉塞石の取り外し作業終了後、羨道・前庭部も含めて北半面を地山レベルまで掘り下げて、断ち割った。

その結果、玄室から前庭部にかけて全体に敷土が敷かれていたことがわかった。断ち割った断面は地山を含めて5層に分層可能であった。

玄室内については、奥壁の下を除いて全体が非常に固くたたきめられた層で覆われており、この層は閉塞部の中央辺りまで続いている。

なお玄室内の礫床面からは棺もしくは棺台と思われる石材は確認されなかった。

### (3) 羨道

羨道から前庭部も攪乱土で覆われていたが、玄室のように側壁が外部へは露出していなかった。墳丘の検出に合わせて側壁を出す作業を行っていったが、やはり両側壁とも石積みの上の部分の崩落しており、完全な形での残存ではなかった。

玄室と羨道を分ける玄門は、南側が厚さ20cm・高さ1mの板状の石を垂直に立て配置し、北側についても厚さ20cm・高さ70cmの石を縦長に用いることで両袖式の玄門を造り出している。玄門の幅は1.3mである。

この玄門部には大きさ20～40cmの円礫が閉塞石として乱積みされており、高さ70～80cm程残っている。閉塞石は羨道内を約1.7mの距離で積み上げられており、玄門では垂直に立ち上がるのに対して、羨道内部では西側に緩やかな傾斜を描いている。閉塞石は全部で約170個を数えた。

羨道の平面形は、玄門から西へ直線的に伸びており、その全長は玄門から約2m、最大幅は1.1mである。

立面形は、北側はほぼ垂直、南側は基底石から数段は垂直に立ち上がるが、一番上に置かれた大きな礫だけが内側へ傾く。これが玄室の南側壁のような意図的な持ち送りの構造かどうかは判然としない。

側壁の残存状況は玄室同様に良好で、最も良く残っている南側の壁では4段を数え、高さは基底石から1.3mを測る。使用されている礫も玄室で見られたものと大きさに同じものが多く、積み方もほとんど同じと言える。

また羨道についても天井石は残っておらず、側壁とのつながりについて確認する事はできなかった。

床面については、玄室で述べたとおり閉塞部の中央付近までは玄室の敷土②が覆っており、そこから西の部分は前庭部と共通する③が覆っている。共によくしまった固い床面で、その上に現在の閉塞石が乗っている。



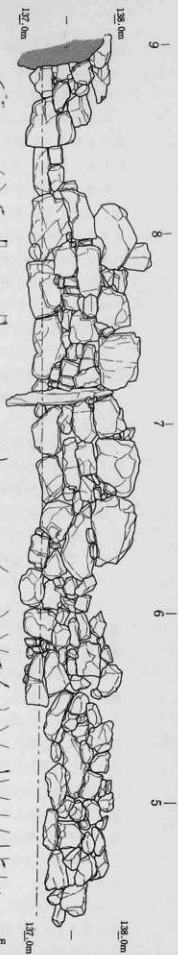
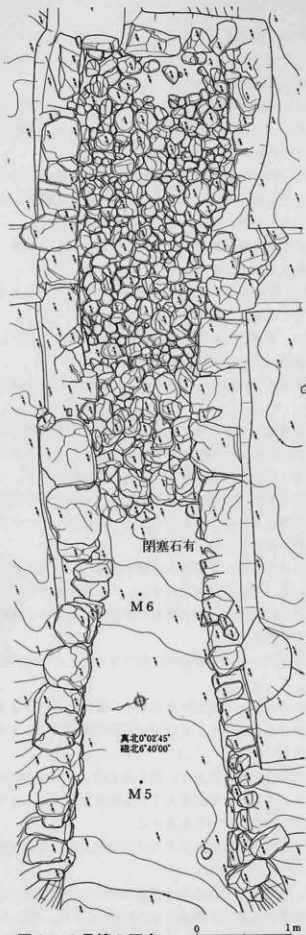
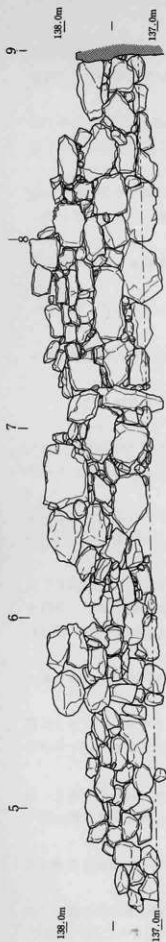


図9 6号墳の石室

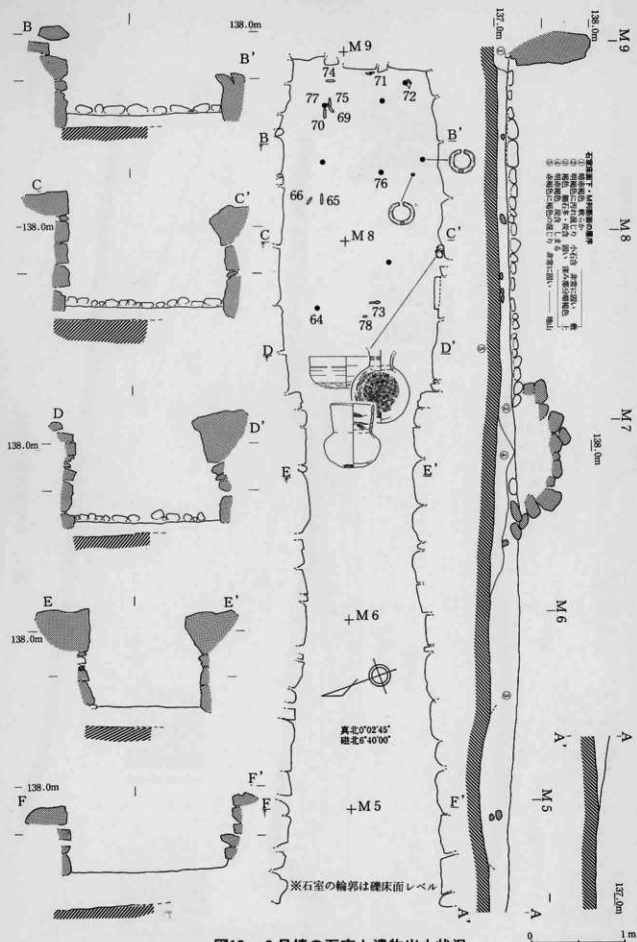


図10 6号墳の石室と遺物出土状況





この2層に挟まれるようにしてさらに下の部分に明赤褐色の層④が存在するが、これは土質が玄室内の③と近い上に、現在の閉塞石が③の層の上に完全に乘っている事から見て、層序的により古い床面の残りであると考えられ、何度目かの追葬の際に③の層を新たに敷き直したのではないかと思われる。(図10・M列断面図参照)

#### (4) 前庭部

羨道に続く形で墳丘の裾へ向かって側壁が造られているが、玄門から西へ約3mほどの地点で石の積み方に若干の変化が観られる。

それまでは玄室と同じサイズの石を同じ方向で積み上げていたが、上記に地点付近から石のサイズが小さくなる。大きなものでも40cm程度の角礫となり、今までと同じように横長に積んであるのだが、見た目の印象が変わる。

また平面形もそれまでが直線だったのに対して、入口部分に向かってハの字に左右に開く形の変わり、立面形も垂直な立ち上がりから、裾に近づくほど上段が外側に傾斜していくようになる。以上のような点から上記の部分の前庭部として羨道と区別する。

側壁の積み方に関しては、前にも述べたとおり小さな石を積み上げているのだが、これは入口部から裾への開きのラインを旨く表現するためと考えられる。また側壁の段数は墳丘の傾斜に沿う形で裾に向かって少なくなっていく。

床面は厚く固い敷土③で覆われており、礎床はない。側壁はこの床面の直上より始まっており、地山面から30cm近く高い。

6号墳のある場所は、東から西に傾斜している為に、石室全体を水平に造るには西側部分の床を高くする必要があったと思われる。

### 第3節 遺物の出土状態(図10、図版10)

大森新田古墳群の発掘では、5号墳の一括の遺物を除いて全般的に土器の出土数が少ない。6号墳も他と同様に土器の数が少なく、さらに玄室内の副葬品として確認されたものは大型碗・提瓶・土師器の直口壺の3点のみであった。

この3点は玄室中央の南側の側壁に沿って出土した。レベル的には礎床面なので、副葬品と見て間違いないと思われるが、出土した時の状況から埋葬時の位置にある可能性と追葬を行った際に片付けられた土器の一部である可能性とが考えられる。

その他にも杯蓋・杯身・短頸壺・釵・細頸瓶等の細片が出土しているが、いずれも前庭部ないしは墳丘の西北部裾の周辺から出土しており、盗掘等の持ち出しの残骸と思われる。

土器以外では、玄室内で多くの鉄器が出土している。玄室中央部分と奥壁の手前の2ヶ所に集中しており、奥壁の手前は出土数が多い。

玄室の中央からは刀子3点・鉄鎌2点出土し、奥壁手前からは鉄鎌8点が出土している。いずれの地点も鉄器が出土しているのは礎床面で、埋葬時の副葬品とみて間違いない。

鉄器以外では、玄室の中央付近の南側から耳環2点が出土している。この耳環は直径約2.5cmで、銅芯に銀箔を施したものである。

礎床面からの出土なので副葬品であることは間違いないが、埋葬時の位置にある遺物とは考えにくい。

また玄室内の礎床土10cmの土については後で篩かけを行ったが、土中より玉類等は出土しなかった。

#### 第4節 出土遺物 (図39・40、図版12~13)

出土遺物の個体数は次の通りである。詳細は出土遺物観察表に譲る。

出土位置	古墳後期 / 須恵器										土師器			金属器		その他	
	坏蓋	坏身	大型碗	短頸壺	ハソウ	長頸瓶	提瓶	細頸瓶	直口壺	鉄羅	刀子	耳環	筒形器	山茶碗			
玄室・羨道			1			1	1		1	9↑	3	2					
前庭部	4↑	1↑		2	1			1									
墳丘・周溝	1↑	3↑						1					1				
調査九全域														1			
合計	5↑	4↑	1	2	1	1	1	2	1	9↑	3	2	1	1			

##### (1) 須恵器・土師器・金属器類 (58~78)

坏蓋が5個体以上と坏身が4個体以上、大型碗1個体、短頸壺2個体、壺1個体、長頸瓶1個体、細頸瓶2個体、提瓶1個体が出土しているが、図示した大型碗と提瓶、細片の長頸瓶のみが玄室床面の出土で、あとは前庭部前面から墳丘の北西裾にかけて出土した細片である。図示できるものは極少なかった。かなりの攪乱と持ち出しが窺える。

##### ・玄室内の遺物

玄室中央の右側壁に密着した礎床面から、61~63の須恵器と土師器が一括出土している。61は無把手の提瓶で、片側の胴部中央にヘラ記号が刻まれ、口縁部を欠する。62は大型の碗。外面底部がしっかりとヘラケズリされる。63は須恵器の直口壺を模したと考えられる土師器で、市内では初見である。須恵器類は、尾張6型式・東山44号窯期後半に属すると考えられ、土師器直口壺もこの時期とみて差し支えないであろう。

図示した鉄器類の全てと耳環も玄室の礎床面から出土している。耳環(67・68)は、玄室の中央やや奥の右側壁に沿って近くから出土しており、同時副葬によるセット品と思われる。いずれも外径は2.7cmを測り、中実の銅芯に銀の箔を張りつけた細身のものともみられる。型に当てて曲げたらしい屈折点もかすかに観察できる。

鉄器類には刀子と鉄鎌がある。刀子(64~66)は、完形もしくはは完形に近く、小型の2品には部分的に木質痕が観察できる。64は大型のもので全長24.2cm、身の柄に近い部分で最大幅をとり、1.9cmを測る。鉄鎌(69~78)は9個体以上で、78はどれかと同一個体の可能性がある。軸と柄の長いものは刃部が柳葉形とみられ、刃と軸部の境に閃を有するもの(73)と持たないもの(70・71)がある。軸部の短いもの(74・75)は、やや広身のもの(74)と細身のもの(75)があり、いずれも閃を有する。73と78は意図的に曲げられた可能性が高く、76も少し振じれている。

##### ・石室外の遺物

前庭部の前面から墳丘の北西裾にかけて出土した、須恵器類の細片の内、図示できたものは58~60の坏類である。尾張7型式・東山50号窯期前半に属するものと考えられる。その他の細片の中には、玄室出土の須恵器と同様の型式・窯期を示すものもあり、その多くを持ち出しと考えれば、2度以上の埋葬を推定できよう。尚、坏類の底(天井)部片の1点には、ヘラ記号が認められる。

##### (2) 須恵器類のまとめ

須恵器からみる古墳の築造時期は、東山44号窯期後半(およそ7世紀第1四半期)を下

ることはなく、東山50号窯期前半（およそ7世紀第2四半期）を含め、2時期に須恵器の所属時期を求めることができる。礫床の保存状態に比べ副葬品の攪乱は著しく、かなり早い時期に乱掘がおこなわれたものとみる。

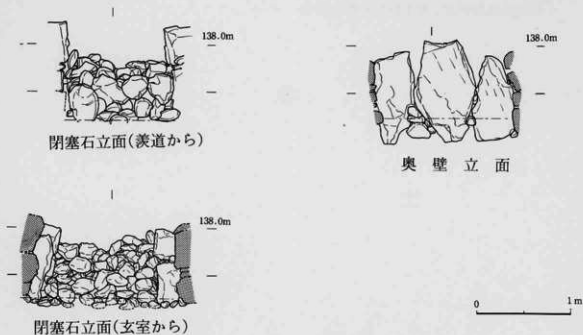


図12 6号墳の石室

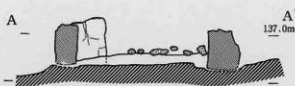
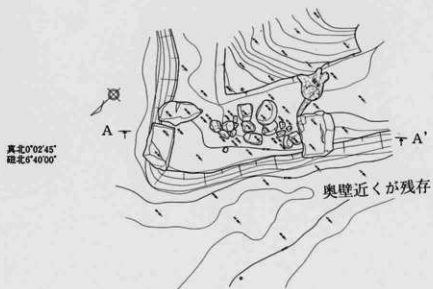


図13 7号墳の石室

0 1m

## 第5章 大森新田7号墳

### 第1節 墳丘と埋葬施設(図7・8・13～15、図版9・13・14)

#### (1) 墳丘

6号墳から北北東の方向に2.5 mほど行った所に7号墳が存在する。

大森新田古墳群のなかで7号墳のみが全体的に破壊を受けており、現存するのは、墳丘の東側1/3程度と石室の一部だけである。後世の時代の溝が墳丘を大きく削り取っており、周辺部には石室のものと思われる石材も確認されなかった。

墳丘の検出を行った結果、残存する墳丘の盛土も流出が激しく、非常に残りが悪いことが分かった。そのため全体像を把握するのは困難であったが、他の古墳と比較した上でおよそ直径が1.3 m程度の円墳であったと推測した。

通常は石室の中心に主軸を設定した後、墳丘上に2 m間隔の杭を打つのだが、7号墳に関しては、この方法を行うことが困難なので、残存する側壁の基底石の中間点と奥壁のラインが直交するように主軸(M列)を設定し、その延長線上の南東側に幅1 mのトレンチを設定し、墳丘を断ち割った。

墳丘の盛土の状況については、トレンチ断面と溝による削平面を分層した結果、良く残っている部分でも2層しかなく、厚さは40 cm程度であった。

分層を行うのに際して、後世の溝による削平を受けている墳丘の面をならしたところ、平面上にP2・P3が検出された。これは中世墓の穴と見られ、P2からは古瀬戸の四耳壺が出土している。また残存する東側の墳丘全体では計6つのピットが確認され、いずれもが後世の埋葬施設であったと考えられる。ピット内からはその年代を表す遺物が出土している。

分層した段面を分析すると、他の古墳同様に主体部周辺では旧地表・地山を崩り込んでいることや墳丘の中央付近で旧地表を削って地山の上に盛土を積んでいる等の共通点が見られ、7号墳自体は他の古墳と同じ工法で造られていると考えられる。

使用されている石材も残された部分から見ると、他の古墳と同じと思われる。

#### (2) 埋葬施設

7号墳の石室は、後世の削平によってそのほとんどが残っていない。石室として現在確認できるのは、奥壁と側壁の基底石がコの字状に残っている部分だけである。

南北の側壁は基底石と思われる40 cm四方の角礫がそれぞれ1個ずつ残っており、基底石の間隔から、玄室の幅は約1.4 m位と推測され、全長に関しては不明である。

奥壁部分は40 cm四方の角礫が北側に1枚のみ残存しており、形状から見て同様の角礫があと2～3個はあったと推測される。奥壁の幅は約1.3 mである。

床面には礫床の残骸があり、築造当時は礫床を持つ石室であったことが窺われる。

また石室の構築方法は、地山を崩り込んで石室のための土壌を造り、そこから基底石を積んでいる。さらに地山の上に10 cm程の敷土を敷き、円礫による礫床が敷かれていたと思われる。これは他の古墳とほとんど同じ工法である。

仮に設定したM列の主軸方位は、S-49.0°-Eである。



## 第2節 後世の埋葬と出土遺物 (図40、図版15)

### 1号土墳墓 (P-1)

7号墳の墳丘南裾近くで検出された。検出面での墓壇直径は76cm×66cmを測るほぼ円形プランで、底面直径46×47cm、深さ37cmを測る。底面中央から白釉の小碗が正位で出土している。埋土はやわらかく赤褐色、座棺に伴う墓壇と考えている。棺の痕跡はない。

白釉の小碗(83)は、田口編年・美濃連房式登窯(以下「連房」と略す)Ⅲ期cに属し、江戸時代後期(18世紀中頃)と考えられる。

### 2号土墳墓 (P-2)

1号土墳墓の北、墳丘上で検出された。検出面での墓壇長径は1.2mを測る不整楕円形プランで、底面直径63×54cm、深さ115cmを測る。埋土上面には古墳の石室石材とみられる大・中の岩が、埋土中と底面にも20-30cm程度の礫が混じっていた。少なくとも、上面の岩は意図的配置とみている。埋土はやわらかく赤褐色で、埋土下方から古瀬戸の四耳壺片が2個体出土している。中世の墓壇と考えている。

これとは別に、本土墳墓の上面東側(7号墳残丘頂部の攪乱層)からは、81の鉄軸鉢と82の白釉小碗、灰釉徳利片、寛永通宝5枚が出土した。本土墳には直接関係しないが、寛永通宝5枚は六道銭の一部と考えられ、別の浅い近世土墳墓があった可能性が高い。これらの近世美濃陶器類は、連房Ⅲ期cに属するものと考えられ、江戸時代後期(18世紀中頃)のものとして推定している。82の底部には、意図的穿孔が認められる。

### 3号土墳墓 (P-3)

2号土墳墓の北、墳丘断面の延長上で検出した。底面の直径は48×35cmの楕円形プランをなす。別の浅い土壇が重複しているかも知れない。埋土は同様にやわらかく赤褐色、出土遺物はない。

### 4号土墳墓 (P-4)

7号墳の墳丘南南東裾近くで検出された。検出面での直径82×70cmを測る不整楕円形プランで、底面へはゆるやかに移行する。深さ残存68cmを測る。埋土はやわらかく赤褐色、土壇底面から伏位の状態で山茶碗の小皿(79)が出土した。口縁端部が尖っているが、直径と厚さなどから、美濃山茶碗編年の丸石3号窯期(鎌倉時代初期)に属するものと考えられる。中世墓の可能性を考えている。

### 5号土墳墓 (P-5)

古墳の石室(奥壁へのトレンチ)において検出された。埋土は赤褐色でやわらかくバサバサ、検出面での長径106cm、深さ90cmを測る。底面に近い位置から、灰釉小瓶(80)が出土した。小瓶は近世美濃陶で、連房Ⅳ期aに属するものと考えられ、江戸時代後期(18世紀末頃)のものとして推定している。

### その他の遺構

P-6・7は現代のもの、P-8は古墳の乱掘りによる近現代のものである。尚、7号墳の削られた部分は、畑として近現代に開墾されており、これに伴う区画溝が検出されている。

出土位置	編文	中世陶器		近代陶器・古銭	
	割片	四耳壺	小皿	美濃陶	寛永通
墓 廣		2	1	2	
墳 丘				5	5
調査区全域	1			1	
合 計	1	2	1	8	5

遺物の詳細は出土遺物観察表に譲る。古墳に関係する遺物は皆無であった。



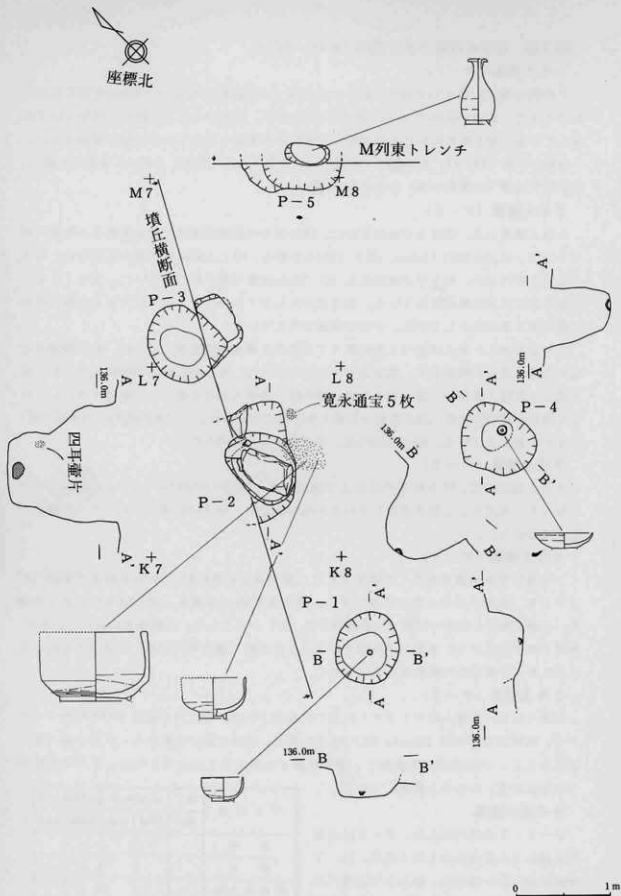


図15 7号墳上の土壌墓群

## 第6章 大森新田8号墳（立石2号墳）

### 第1節 墳丘（図16・17・20～23、図版15～20）

8号墳は伐採作業が終わった状態では、石室の礎が墳丘の外へ露出していなかった。しかし他の古墳と同じように天井石はすでになく、墳頂部に石室を思わせる大きな凹みが見受けられることから、後世の破壊を受けていることは想像できた。

また墳丘上にも石室のものと思われる石が2個ほど転がっていた。

墳頂部より表土剥ぎを行った結果、墳丘の中央より石室が検出された。この石室を基に南東から北西の方向に主軸（M列）を設定した。その後墳丘全体の検出を行い、直径が約16.5mの円墳であることが確認された。

8号墳の特徴は、他の古墳の墳丘が全て1段築成なのに対して、墳丘が2段築成だという点である。

墳丘の東側を観察すると、平坦な墳頂部に続いて傾斜のついた盛土の面があり、続いて平坦な面が1mほどあってから、なだらかに墳端部に続いていく。これを観ると墳丘が少なくとも2段で作られているのが分かる。

また墳丘の前面では、中段にもう1段葺かれ、3段築成の感を呈する。

上記のことに関係して、墳丘の幾つかの場所で、埋め殺しの敷石や石列が多数出土している。

先程例として挙げた墳丘東側では、盛土の立ち上がりに合わせて礎を積み上げた部分が出土しており、トレンチを挟んで6mくらいの範囲で見つかっている。使用されている礎は大きさ30cmくらいのものが多く、角礎と円礎を組み合わせて積み上げている。

このように出土した礎群は、主に墳丘の表面を覆うためのものではなく、盛土の積み上げの際に補強材としてその内部に埋め込まれたものと思われる。

また石室の前面では、3段築成の段の表面を葺石が覆っている部分が出土しており、ここでも30cmくらいの角礎と円礎が組み合わされて、盛土の表面を覆うように加工している。

石室の前面の裾部分には、葺石が配されていた。礎の大きさは30～40cmくらいで、裾の円周をなぞるように置かれている。特に前庭部から続く墳丘の北西部分では、裾の円周上にきれいに並べられた葺石が出土している。これと同様の葺石の列が、墳丘西側2ヶ所からも出土している。

墳丘の盛土の状況を調べるために、主軸に直交する形で東西方向（実際の方位は北東～南西）に1本づつと、主軸の延長線上の南東側に1本の計3本のトレンチを幅1mで設定し、墳丘を断ち割った。

トレンチの断面を観察して、3本に共通する点として挙げられるのは、石室の裏込め近くで旧地表と地山をカットした面が検出された点である。これは主体部を築造する際に旧地表と地山を廻り込み石室用の土壌を造る手法を用いているからで、他の古墳の石室と共通している。

盛土の盛り方としては、石室周辺に関しては厚く短い層を造るように旧地表から上に盛土を盛っている。そして石室から3.2m程外へ行くと旧地表が削り取られ、地山の上から

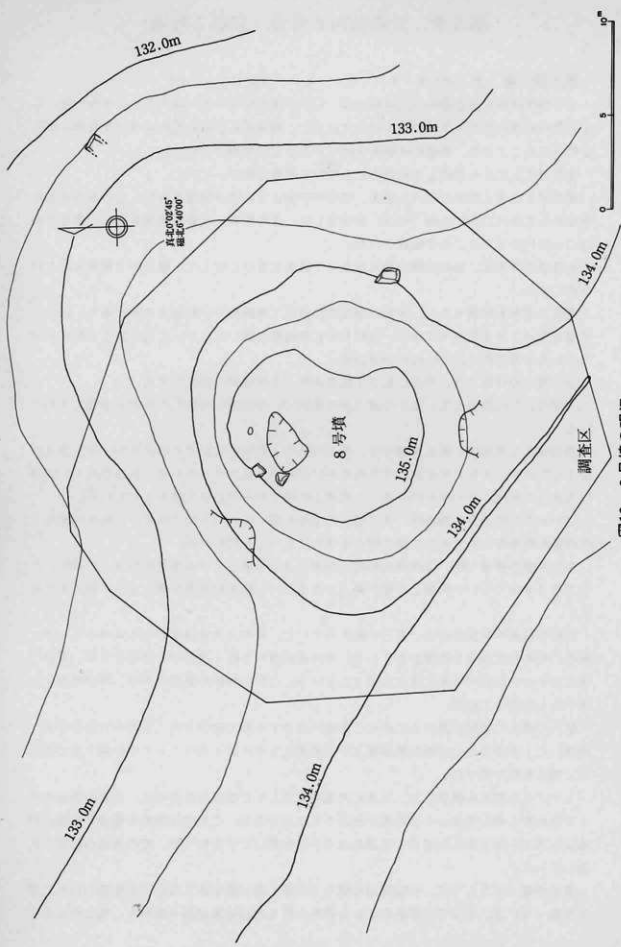


図16 8号墳の現況



真北0°02'45"  
磁北6°40'00"

図17 8号墳の全体図

薄くならかな層の盛土を裾に至るように積んである。

また盛土内に埋め殺しの礫が多数埋められており、西トレンチの断面を観察すると、墳頂からの平坦面の終わり（傾斜の始まる面）付近に数個に礫が埋められており、これが段状に墳丘を盛る際の盛土の補強として使われていると思われる。同様の処理として東のトレンチでも、墳丘の中央あたりの盛土内部に礫を積んだ部分がある。

西トレンチの外側の旧地表カット面に続いて、4つの礫が地山上に埋め込まれている。この部分はそれまでに盛った盛土の裾にあたり、ここで一旦盛土の積み方を変えるために地山面に礫を葺石のように置く処理を行っている。

この部分から先は、地山直上に礫を置く墳丘の作り方が、裾の葺石まで続いている。

なお墳丘の南東部分では盛土の積み方は基本的に同じだが、トレンチ内にも裾部分にも葺石がない。また東トレンチの旧地表面は墳丘の裾近くまで削られることなく存在するなど、部分的に若干の違いが見られた。

盛土は南東のトレンチで旧地表・地山を含めて16層、東トレンチで27層、西トレンチで33層に分層可能である。基本的に赤褐色と暗褐色のブロックが交互に重なり合っているが、そこに黄褐色のブロックが混じるパターンがある。

他の古墳も同じような作り方をしているが、複数の段成からなる墳丘であるために、墳丘の盛土のはっきりと2つのブロックに分かれている。

なお墳丘の周辺部はすぐに地山面となり、周辺を囲むように造られた周溝のような遺構は確認されなかった。

## 第2節 埋葬施設（図18～21、図版16～19）

### （1）石室の概要

主体部である石室は墳丘のほぼ中央に位置し、北西に開口している。

形状は単室構造両袖式の横穴式石室で、玄室奥壁から前庭部の端（石室入口）までの石室の全長は約10mを測る。

石室の残存状況は、まず天井石はすべて残っていない。他の古墳と違い、墳丘の外側に石室は露出していなかったが、玄室部分の側壁の状態が悪く、攪乱土の中に多くの礫が落ち込んでいた。

石室は玄室・羨道・前庭部の3つに分けることができる。羨道・前庭部はそれぞれ側壁の残りがよく、閉塞部の石積みもきれいに残っていた。玄室は東西共に側壁の残りが悪く、全体的に2段程度しか残っていない。

また奥壁の石積みはほとんど残っておらず、床面上に数個の小さな礫の埋め込みがあるだけである。これは盗掘が南東部分から行われたため、その際に奥壁の大半が取り除かれてしまったと考えられる。

なお玄室の床面からは礫床が検出されたが、これも非常に残りが悪かった。

石室に使用されている石材は、古墳群周辺に存在するチャートの岩盤から採取されたもので、礫床と閉塞石以外は全て角礫である。礫床・閉塞に使用されているのは大半が土岐砂礫層に含まれる円礫で、一部角礫が混ざっている。円礫は古墳の周辺、盛土の掘削に伴って採取されたと思われる。

石室の平面形は、玄門から羨道にかけては北西に直線的に伸び、玄門から2.6m付近か

ら前庭部の側壁となり、左右に外反しながらそのまま墳端部分につながるハの字を描く。

玄室の形状は両側壁中央部分で最大幅を持つ胴張りの長方形プランであるが、玄室全体の配置が奥壁に向かって東寄りに曲線を描くように曲がっている。

立面形は、羨道・前庭部は床面よりほぼ垂直に立ち上がっているが、羨道西側の側壁の上部は微妙に内側に迫り出している。玄室は東西ともに残りが悪いので分かりにくい、残っている分に関しては床面からほぼ垂直の状態である。

なお天井石の積み方とそれにつながる側壁の配置については、現状では不明である。

仮に設定したM列の主軸方位は、 $S-42.5^{\circ}-E$ である。

## (2) 玄室

発掘当初、玄室内は攪乱土と崩落した石で埋まっていた。天井石は全て残っておらず、側壁についても残りはよくなかった。

玄室の平面形は、両側壁中央部分がやや膨れる胴張りの長方形プランを呈する。その最大幅は1.9 mを測り、奥壁から玄門までの玄室長は3.4 mである。両側壁は、玄門の内側より約30 cm外に張り出して設置されており、これが両袖式の玄門部を作り出している。奥壁の幅は1.2 mである。

玄室内の側壁は東西共に残りが悪く、西側が玄門近くで3段残っているのが最大で、あとは基底石を含めて2段の部分ほとんどである。ちなみに最もよく残っている部分の高さは床面から1.2 mである。

側壁の石の積み方は、横60 cm程度の長方形の角礫を主軸方向に横長に配して基底石とし、その上に60 cm前後の正方形の角礫を積んである。また大きな礫の間には小さく打ち割った礫を詰めてある。奥壁に近い部分は、基底石以外大きな礫はほとんど残っていない。

側壁の立ち上がりは、玄室内ではほとんど垂直の状態であるが、西側の壁の一番上の玄門の手前部分に積んである礫だけが、玄室の内部に突き出している。

上記の礫以外に、この高さまで積まれた礫が存在しないので比較できないが、側壁の上部の礫がこれと同じように積まれていたとすると、天井石に対して側壁が持ち送りの構造を持っていたことになる。

玄室の床面からは礫床が検出されたが、今回発掘した古墳のなかで一番状態が悪く、一応玄室内の全域に礫は残っているが、部分的なものでしかなく、下の敷土が出ている部分の方が多かった。

これは盗掘による持ち出しの際に、床面まで大きく荒らされた結果と思われる。

礫床の礫の大きさは10～20 cm程度の円礫で、敷土の上に乗った状態である。床面はほぼ水平で、側壁の基底石は地山直上より積み上げられている。

礫床面の図面作成と閉塞石の取り除き作業終了後、羨道・前庭部を含めて、石室内の東半面を地山レベルまで掘り下げて、断ち割った。

その結果、玄室から前庭部の中央付近まで非常に固くたたきしめられた厚さ8～10 cmの敷土の層が一層あることが分かった。

なお玄室内の礫床面に、棺もしくは棺台と思われる石材は確認されなかった。

## (3) 羨道

羨道から前庭部も攪乱土で覆われていたが、玄室同様に側壁が外部に露出していなかったため、墳丘の検出に合わせて側壁を出す作業を行った。

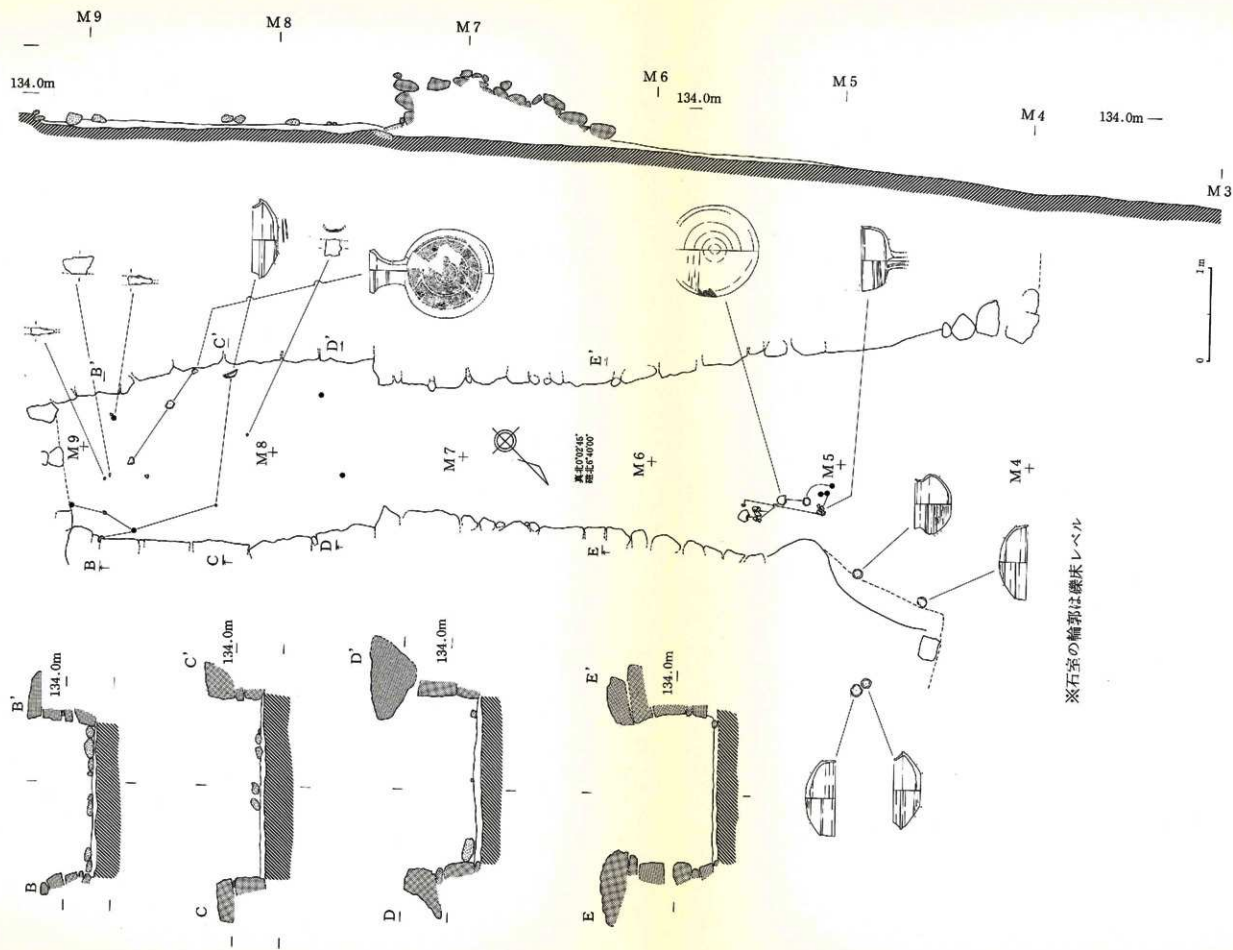


図19 8号墳の石室と遺物出土状況

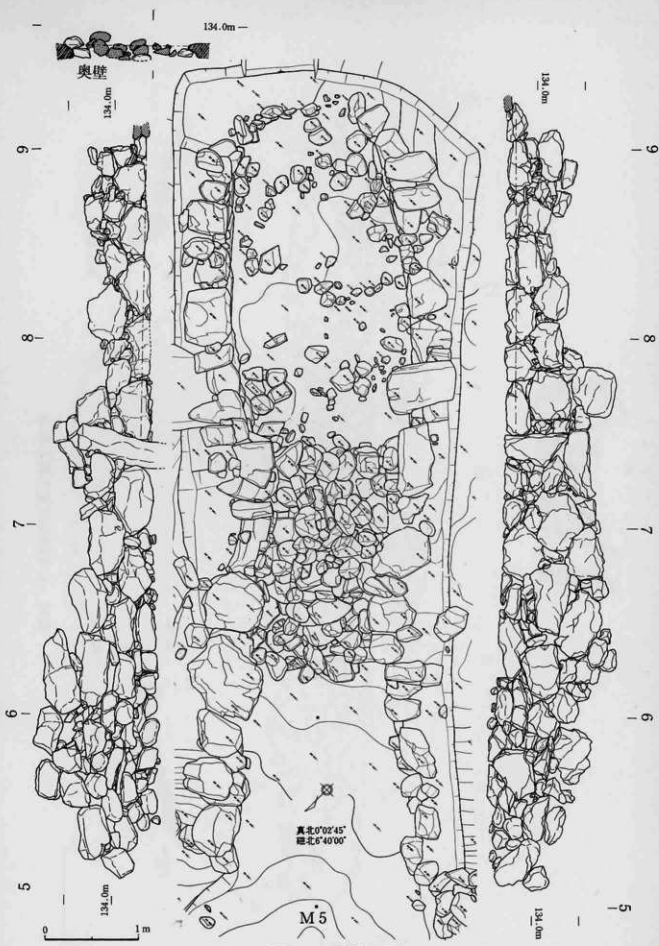


図18 8号墳の石室



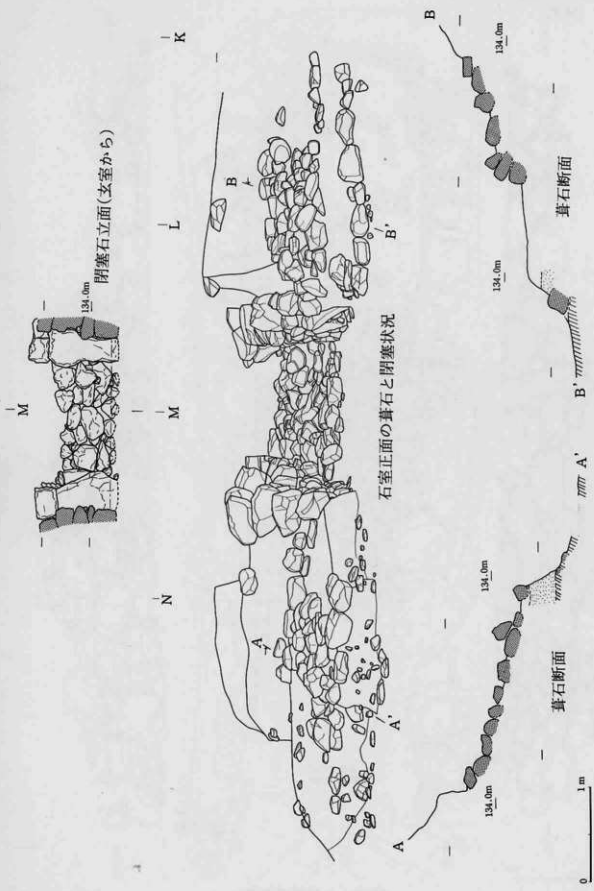
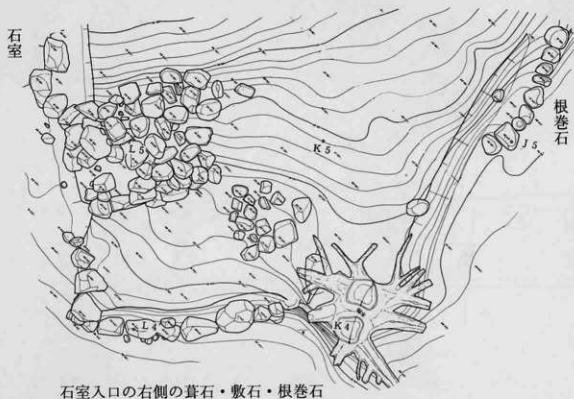
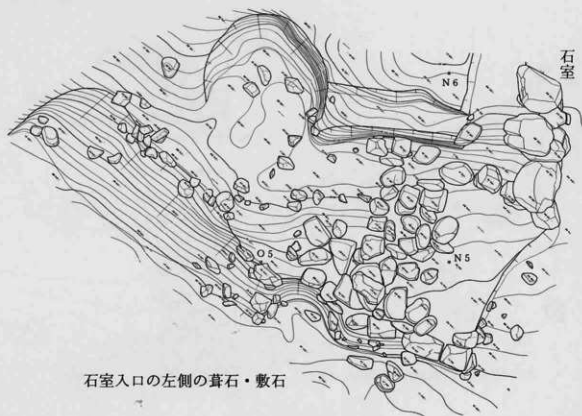


図20 8号墳の石室立面と葺石



石室入口の右側の葺石・敷石・根巻石



石室入口の左側の葺石・敷石

図21 8号墳の葺石

0 1m

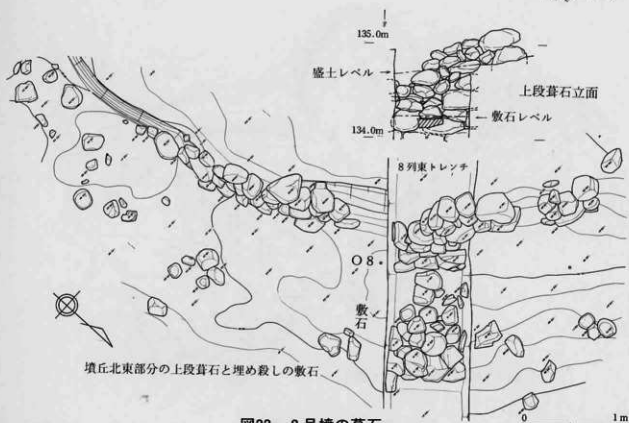
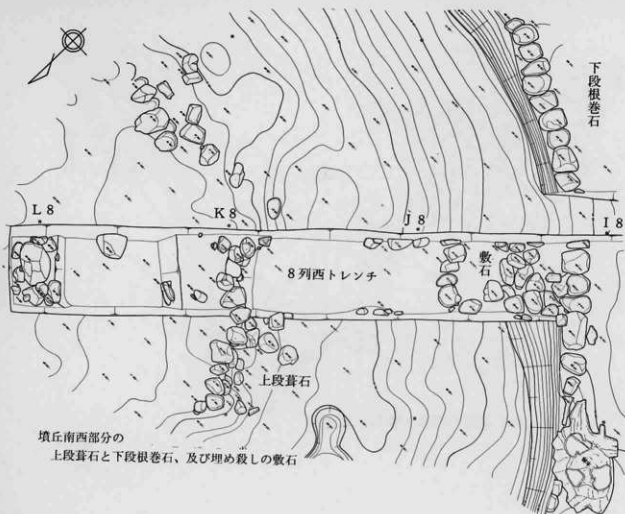


図22 8号墳の葺石



羨道・前庭部に関しては、一部崩れている部分もあったが両側壁とも比較的良好に残っており、玄室よりも築造当時の状況を観ることができる。

まず玄室と羨道を分ける玄門は、東側が厚さ30cm・高さ1mの板状の礎を垂直に立ててあり、西側についても厚さ30cm・高さ70cmの礎を縦長に用いることで両袖式の玄門を作り出している。玄門の幅は1.3mである。

この玄門部には、大きさ30～50cmの角礎と円礎が閉塞石として乱積みされており、高さ約70cm程残っている。長さは約2.3mほどの距離になる。

積み上げられた礎は、玄門では垂直に立ち上がるのに対して、入口へ向かって緩やかな傾斜を描いている。

羨道の平面形は、玄門から北西へ直線的に伸びており、その全長は玄門から約2.5m、最大幅は1.5mである。

立面形は、東西共に側壁の中段部分が外側に膨らみ、上に行くにしたがって、緩やかに内側に迫り出してきている持ち送りの構造である。

側壁の残存状況は玄室と違って良好で、前庭部との堺の辺りが両側壁ともよく残っており、最大4段を数え、高さは基底石から約1.3mを測る。ただし羨道全体としてみた場合は、西側は全体的に残っているが、東側は玄門に近い部分が2段しか残っていなかった。

使用されている石材はもちろん角礎であるが、玄室内の物より大ぶりな礎が多く、70cm前後の長方形のものが主である。積み方に関しては玄室とほぼ同じと考えられる。

なお羨道部についても天井石は残っていなかった。

床面については玄室で述べたとおり、10cm程度の固い敷土が全面に敷かれている。羨道内に礎床はなかった。

#### (4) 前庭部

羨道に続く形で石室の入口へ向かって壁が造られている。ここから墳丘の裾までの間は前庭部として区別されるため、これまでの側壁の造りと比べて若干の変化が観られる。

まず羨道との境の部分から使用されている礎が変わる。全体的に石のサイズが小さくなり、大きなものでも高さ40cm程度の角礎となる。形もそれまでの長方形ではなく正方形の礎が多くなる。

また平面形もそれまでが直線だったのに対して、墳丘裾に向かってハの字に左右に開いていく形となり、立面形も垂直な立ち上がりが変わる。

側壁の積み方に関しては、墳丘の傾斜に合わせて裾に向かうほど段数が少なくなっていく、最終的には葺石に合流する。

また床面は玄室・羨道と同じ敷土が敷かれているが、敷土による床面は前庭部中央付近で終わっており、そこから先は緩やかに下り、地山のみとなる。

### 第3節 遺物の出土状態(図19、図版16)

8号墳からの出土遺物は、数的には決して少ないわけではない。しかし玄室内より出土し、副葬品として確認されたものは10点に満たず、多くが石室の外ないしは攪乱土内から出土したものである。

その上破片として出土するものが大半で、完形の遺物は少数であった。

玄室内より出土した土器は、坏身1点と細頸瓶1点。共に完形での出土ではなく、破片

が玄室内の床面に散乱しており、整理事業の時点で接合・復元を行った結果、ほぼ完形の状態となった。もともと副葬品として収められていたものと思われるが、玄室内の盗掘の際に破壊されたと考えられる。

その他に玄室より出土したのは鉄器類で、鉄鎌2点・刀子1点・直刀の鏝1点が検出された。鉄器類は奥壁の近くの床面で出土しているが、8号墳は礎床面を含めて玄室内の荒らされた方が酷いので、これらの遺物が原位置を保っているかは疑問である。

玄室内からはあまり土器が出土していないが、前庭部や墳丘裾からは何種類かの須恵器が出土している。

坏蓋・坏身・短頸壺・提瓶・高坏・甕などが挙げられ、総数（個体数）は20数点に及ぶ。なかでも坏の大半は、墳丘の北東から北西かけての裾部分の攪乱土内より出土しており、前庭部の床面上からは、高坏・提瓶がそれぞれ破片の状態で出土している。

これらは全て8号墳内部より持ち出された遺物と考えられ、またいずれも破片の状態で出土していることから、盗掘の際に破壊された土器の残骸であると思われる。

なお完形で出土している須恵器も存在し、前庭部東側面より短頸壺1点・坏蓋1点が出土し、墳丘北側の盛土上（葺石と同じレベル）で坏身1点・坏蓋1点が出土している。（位置の詳細は図19を参照）。

これらの遺物が、他の遺物同様に持ち出しの際の残骸であるのか、意図的に置かれた物であるのかについては不明であるものの、下段の平坦面に密着した状態は、後者の可能性が大であることを示唆している。

また礎床面の土については、主軸とそれに直交する線を玄室中央に引くことによって、玄室内を4つのブロックに分け、礎床の上10cm程度の土については後で簡かけを行った。その結果、土中より玉類等が出土した。

玄室内の北側からは土製丸玉6点、南側からはガラス製小玉5点がそれぞれ出土した。いずれについてもバラバラに出土している上に数も少ないので、副葬当時の状態は不明である。

#### 第4節 出土遺物 (図41・42・44、図版20～22)

出土遺物の個体数は次の通りである。詳細は出土遺物観察表に譲る。

出土位置	縄文		古墳後期 / 須恵器							金属器			玉類			
	石	土	蓋	身	高	短頸壺	細頸瓶	ハソウ	提	横	鉄	鎌	刀子	貴金具	ガラス	土
玄室・羨道				1	1	1	1					3	1	1	5	6
前庭部			1		1	1			1							
墳丘・周囲			9	7	10			2	1	1		1				
調査区全域	1	32														
合計	1	32	10	8	12	2	1	2	2	1	3	2	1	5	6	

##### (1) 須恵器・鉄器・玉類 (84～120)

杯蓋が10個体と杯身が8個体、高杯12個体、短頸壺2個体、細頸瓶1個体、甕2個体、提瓶2個体、横瓶1個体の須恵器類と、鉄鎌や刀子、貴金具の鉄器類、ガラス小玉や土製丸玉の玉類が出土している。但し、奥壁を壊して侵入した乱掘者により、玄室礎床面の保存状態はかなり打撃を受けており、玄室内に残る遺物の割合は低かった。

前庭部や墳丘裾からも、破片と化した須恵器がかなりの個体数出土しているが、その多くは持ち出しによるものと推定している。

##### ・玄室内の遺物

玄室内出土の須恵器も破損、散在著しく、辛うじて2点が復元、図化できた。93は尾張7型式・東山50号窯期前半の杯身。114は3条の同心横線文内の2帯に、刺突文を施す細頸瓶。尾張6型式併行・東山44号窯期後半とみられる。その他の細片は、時期の同定には無理がある。

鉄鎌(115～117・120)は僅かな細片。120は刃部が広身のものである。119の貴金具は、直刀に伴うものか。

土製丸玉(103～107 図化は5個)6個とガラス製小玉5個(108～112)は、全てフルイにかけた玄室床近くの土から採取した。土製丸玉は、玄室の西部分から3個、北部分から1個、不明2個であり、玄室中央よりも玄門に近い側が原位置と考えられる。これに比べガラス製小玉は、玄室の南部分の土から4個と東部分の土から1個が見つかっており、玄室中央よりも奥壁に近い側が原位置と考えられる。一連のものではなかったようだ。

土製丸玉は、全て還元焼成された黒色を呈する。表面はよく磨かれている。直径0.5cm程度で、長さは0.4cm程度を測る。ガラス製小玉は緑色が4個と紺色が1個で、管状の原体を切断して作っている。切断部位はよく研磨されている。直径0.3～0.45cm、長さ0.2～0.25cmを測るが、紺色のもの(111)がやや大きい。

##### ・前庭部の遺物

杯蓋(86)は逆位で、前庭部左角(石室入口部分)に接して出土している。98の短頸壺も左壁に沿った位置であるが、レベルが高く、共に墳丘下段の平坦面から転がり落ちたものとみている。86の杯蓋と85の同品が、一見して同時焼成とわかる程度似していることも状況証拠となろう。共に尾張7型式・東山50号窯期前半に属するものと考えられる。

100は長脚2段の高杯で、尾張6型式併行・東山44号窯期後半に、113は無把手の提瓶で、同期～東山50号窯期前半に属するものと考えられる。

## ・石室外の遺物

墳丘の南側を除く裾部分と、石室入口の左側（墳丘下段平坦面）を中心に、その多くが破片の状態で出土した。接合状態からみて、持ち出されたり供献されたりして、その場で砕けたものが多いようだ。

図化できた坏蓋（84・85・87～90）の内、84はその口径や端部の調整から尾張6型式・東山44号窯期後半に、後は尾張7型式・東山50号窯期前半に属するものと考えられる。坏身（91～97）は、91と92が尾張6型式・東山44号窯期後半に、後は尾張7型式・東山50号窯期前半とみられる。

84と91、92の一群、85、86と97の一群、88と96の一群は同じ焼き上がりを示す。85と94は、石室入口の左側（墳丘下段平坦面）から寄り添って出土したが、坏蓋85は逆位であった。86の坏蓋、98の短頸壺と共に、同所に供献配置された可能性もある。

99の高坏と102の提瓶は東山44号窯期後半に、101の甕は東山50号窯期前半に属するものと考えている。

尚、118の大型の刀子は、墳丘東側の攪乱層出土で、明らかに持ち出されたものである。

また、その他の細片にもこの両時期を外れるものは見当たらない。調査区の全域からは、縄文時代の石鏃1点(180)と剝片32個が採取できた。石鏃は凹基で、チャート製である。土器片は見当たらなかった。

### （2）須恵器類のまとめ

須恵器からみる古墳の築造時期は、東山44号窯期後半（およそ7世紀第1四半期）を下ることはなく、東山50号窯期前半（およそ7世紀第2四半期）を含め、2時期に須恵器の所属時期を求めることができた。追葬は明瞭であるが、1回以上とするに留める。



## 第7章 大森新田9号墳(立石1号墳)

### 第1節 墳丘(図24・25・28～30、図版22・24・25)

9号墳は、大森新田古墳群の中で最初に発掘調査を行った古墳である。伐採時の外観から見て、丘の上の平坦面に半球形の小山があることから、円墳であると予想された。

伐採作業終了後、墳頂部に露出していた石をもとに石室を想定し、北西から南東への方位で主軸(M列)の設定を行った。

その後墳頂部より表土剥ぎの作業を行った結果、墳丘中央より石室が出土した。また墳丘全体の検出を続けたところ、直径が約17mの円墳であることが確認された。

ある程度主体部全体を検出できたところで、一つ特徴的な点が判明した。

通常、古墳の開口部は墳丘の南側に在る場合が多い。そのため当初は、南東側が開口部であろうと想定し発掘を進めたが、石室の検出を行っていく過程で、開口部が南側ではなく北側であることが判明した。南以外の方向に開口部があるという点は、今回調査した古墳6基の内、5号墳を除いた5基に共通している。

墳丘の盛土の状況を調べるために、主軸に直交する形で東西方向(実際の方位は北東-南西)にそれぞれ1本づつと、主軸の延長線上の南東側に1本の計3本のトレンチを幅1mで設定し、墳丘を断ち割った。

他の古墳で述べたのと同様、まず共通する点として挙げられるのは、石室の周囲で旧地表・地山のカット面が検出されたことである。これは旧地表・地山を掘り込んで主体部を造るという工法を使用している為である。

ただし南東のトレンチに関しては、盗掘によってトレンチ内が荒らされているために断面上は確認できないが、盗掘坑の平面図(図29)に石室の掘方として観察される。(東西のトレンチについても平面図上に石室の掘方が観察されている。)

また石室から外側へ4mほどの地点で旧地表が削り取られ、地山上に盛土が積まれるという点も他と共通しており、盛土の積み上げ方についても、古墳群内でほぼ同様の手法が使われていたことを物語っている。

葺石については、墳丘の北側及び西側の裾付近から検出され、特に西側の裾部分は、石室の側壁から続く円周上に、礫がきれいに並んでいる状態で出土している。

古墳の前方(開口部の左右の墳丘)を除いて、他の墳丘部分からは葺石は検出されなかった。

トレンチ内については、石室の掘方から1～2mの範囲に大きさ20～30cm礫が列として埋められている。高さは盛土の中で、地山からは少し上にあたる。埋め殺しの葺石であることは間違いないが、8号墳のように盛土を補強するという明確な目的を持った物かどうかは不明である。

墳丘の盛土は旧地表・地山を含めて、南のトレンチで16層、東トレンチ25層、西トレンチで27層に分層可能である。基本的に褐色と赤褐色のブロックが交互に重なり合っているが、それに暗褐色(黒褐色)と黄褐色の層が部分的に混じっている。周辺の地山と旧地表面を利用して、盛土が積み上げられたと考えられる。

その他に9号墳の墳丘上と周辺部からは、2つの遺構が検出された。

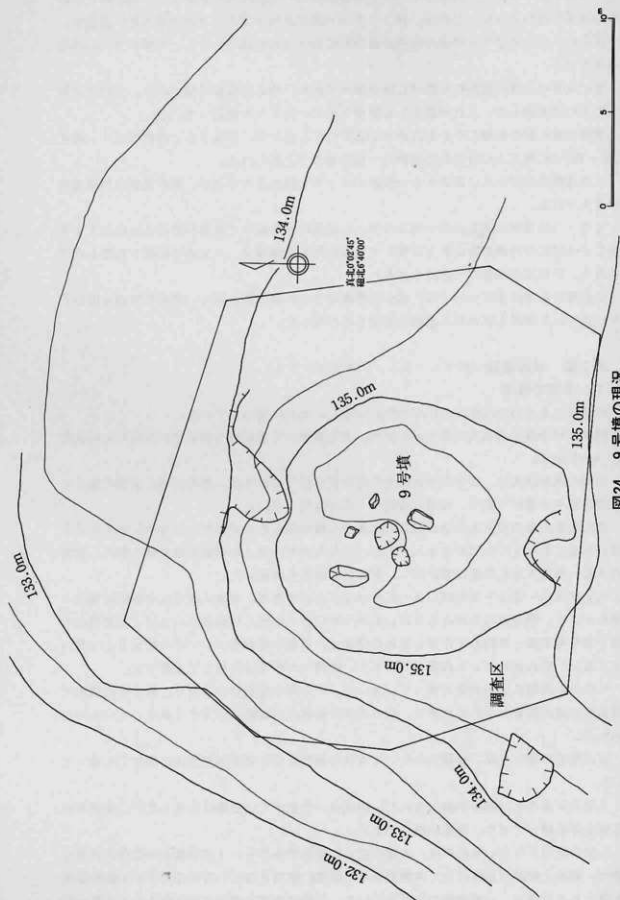


図24 9号墳の現況

一つは南側の墳丘上、南東のトレンチの断面のすぐ左側に当たる部分で、竈の跡と思われる遺構が検出された。これは、横120cm・縦60cm・深さ60cmの長方形の遺構で、中央部分に大きさ20cmほどの角礫が縦方向に並べられた段が存在し、内部が2つに仕切られている。

また遺構の内部の壁面には焼けた跡が残っており、特に左壁面の壁土には、全面的に焼けた土の面が観られ、これが竈として使用されていたことを物語っている。

遺構の墳丘側の貼壁の中から瓦が出土していることから、さほど古い遺構でなく、後世(近・現代)に墳丘上に作られた施設の一部であろうと思われる。

この遺構の周辺からは直径40cm前後のピットも検出されており、竈の遺構との関連性が考えられる。

もう一つは南側の調査区の一画からで、L字型に礫を組んだ遺構が検出された。大きさが20cm程度の角礫を地山直上に置いて造られたこの遺構は、人工的に配置されたものではなく、小石室の残骸の可能性もある。

なお墳丘の周辺部については、裾から外側はすぐに地山面となり、墳丘の周辺を囲むように造られた周溝と思われる遺構は確認されなかった。

## 第2節 埋葬施設(図26~31、図版23~25)

### (1) 石室の概要

主体部である石室は墳丘のほぼ中央に位置し、北西に開口している。

形状は単室構造両袖式の横穴式石室で、玄室奥壁から前庭部の端までの石室の全長は約10.4mを測る。

石室の残存状況は、まず天井石は全て原位置を保っておらず、他の古墳と同様に墳丘の上部が削平を受けており、石室の側壁の一部が露出していた。

また玄室内部の攪乱土の中に崩落した多くの礫が落ち込んでおり、その中には天井石と思われる大きな4つの岩が含まれていた。これらの岩は表土を重機で取り除く際に、攪乱の土と一緒に玄室に外部に運び出し、記録用に図面を作成した。

石室は玄室・羨道・前庭部の3つに分けることができる。玄室・羨道は全体的に側壁の残りがよく、閉塞石の石積みもきれいに残っていた。ただし前庭部については、当初現在の開口部を奥壁側と解釈して作業を進めた関係で、東側の壁面をトレンチの断面として掘ってしまい、残れされていた石積みの大半を、重機での作業時に外してしまった。

そのため西側にしか側壁が残っていないが、その部分を観察する限り、緩やかな傾斜で葺石状に礫が積み重ねられている状態で、他の古墳の前庭部の側壁とは大きく異なっているのがわかる。

また奥壁の関しては、盗掘坑のせいで板状の奥壁石材1個が南東方向に倒れてしまっていた。

玄室の床面からは礫床が検出された。礫床は一部剥げている箇所もあったが、玄室内の床面全体を覆っており、非常に残りがよい。

石室に使用されている石材は、古墳の近くに存在するチャートの岩盤から採取されたもので、礫床と閉塞石以外は全て角礫である。閉塞に使用されているのは大半が土岐砂礫層に含まれる円礫で、一部角礫が混ざっている。円礫は古墳の周辺より採取されたと思われる



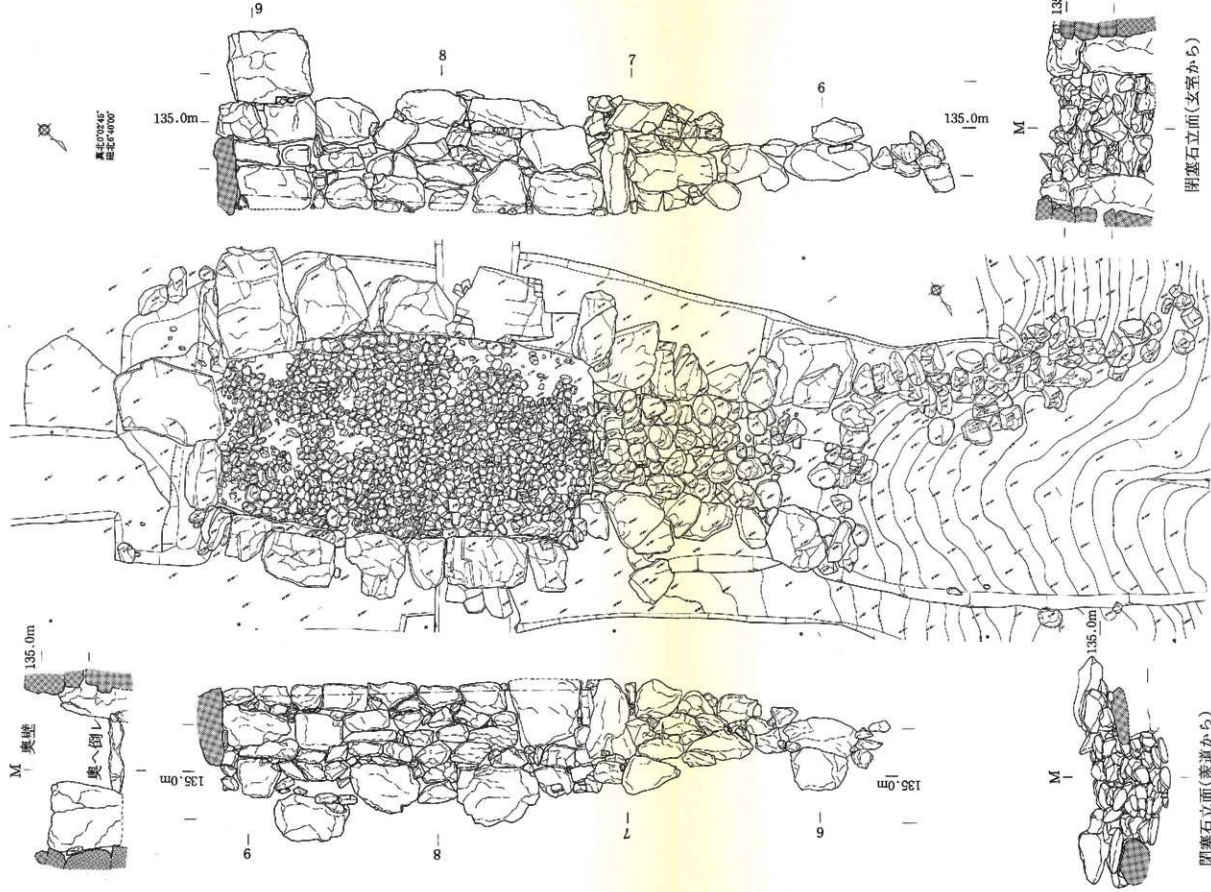


図26 9号墳の石室





る。また9号墳の礎床は拳大の川原石を使用しており、他の古墳と異なっている。

石室の平面形は、玄門から羨道にかけては北西に直線的に伸び、玄門から3.7 m付近から前底部の側壁となり、外側にゆるやかなカーブを描きながら、そのまま墳端部分につながる。

玄室の平面形は両側壁中央部分で最大幅を持つ胴張りの長方形プランであり、東西の側壁が平行に並んでいる。

立面形は、玄室・羨道共に床面よりほぼ垂直に立ち上がっている。ただし開口部に近い羨道の側壁の上部は、微妙に内側に迫り出している。なお天井石の積み方とそれにつながる側壁の配置については、現状では不明である。

仮に設定したM列の主軸方位は、S-58.5°-Eである。

## (2) 玄室

発掘当初、玄室内は攪乱土と崩落した石で埋まっていた。天井石は原位置を保たず、その内の幾つかは玄室内に落ち込んでいた。

側壁については、削平された墳丘の上部から外に露出していたので、それを基に主軸を設定し、攪乱土と崩落した岩を取り除き、玄室を検出した。

玄室の平面形は、両側壁中央部分がやや膨れる胴張りの長方形プランを呈する。その最大幅は2.2 mを測り、奥壁から玄門までの玄室長は3.9 mである。両側壁は、玄門内側より約40~50 cm外に張り出して設置されており、これが両袖式の玄門部を作り出している。奥壁の幅は1.7 mである。

玄室内の側壁は東西共に残りがよく、西側の壁の奥壁手前部分が最もよい状態で4段を数え、高さは床面から1.9 mを測る。その他の部分の側壁についても、基底石を含めて3~4段の石積みが残されていた。

側壁の石の積み方は、横60 cm程度の長方形の角礫を主軸方向に横長に配して基底石とし、その上に一回り小さめの長方形の角礫を積んである。また大きな礫の間には小さく打ち割った礫が詰めてある。

西と東の壁を比較すると、東の壁のほうが小さい礫が使われている。また東の側壁の玄門の手前の礫は、例外的に一边70 cmの正方形の礫が使われている。

側壁の立ち上がりは、玄室内ではほとんど垂直の状態である。一番高い位置に積んである礫まで垂直な立ち上がりをするので、この礫が天井石の下にあったと考えれば、9号墳の玄室については、持ち送りの構造になっていなかったと思われる。

奥壁部分に関しては、当初からその西側部分に盗掘坑が開いていた。検出された状況としては、東側に一边80 cmの正方形の1枚岩が立てられており、東側壁と組み合わせられている。西側壁にも同じ高さの岩が組まれており、主軸から西へ80 cmの空間がポッカーリと何もない状態で空いていた。

奥壁の裏側にあった盗掘坑が攪乱土で埋まっている状態だったので、南東のトレンチで墳丘を断ち割る際に、その中の土を全て取り除いた。すると、盗掘坑の一番下の面から奥壁であったと思われる石材が出土した。

この石材は南東方向に倒されており、盗掘坑を開けた際に、この奥壁を外側に倒して入口を確保したとも考えられる。

なお発掘時に残っていた奥壁の石材は基底石と考えられ、側壁の高さから見て、現在よ





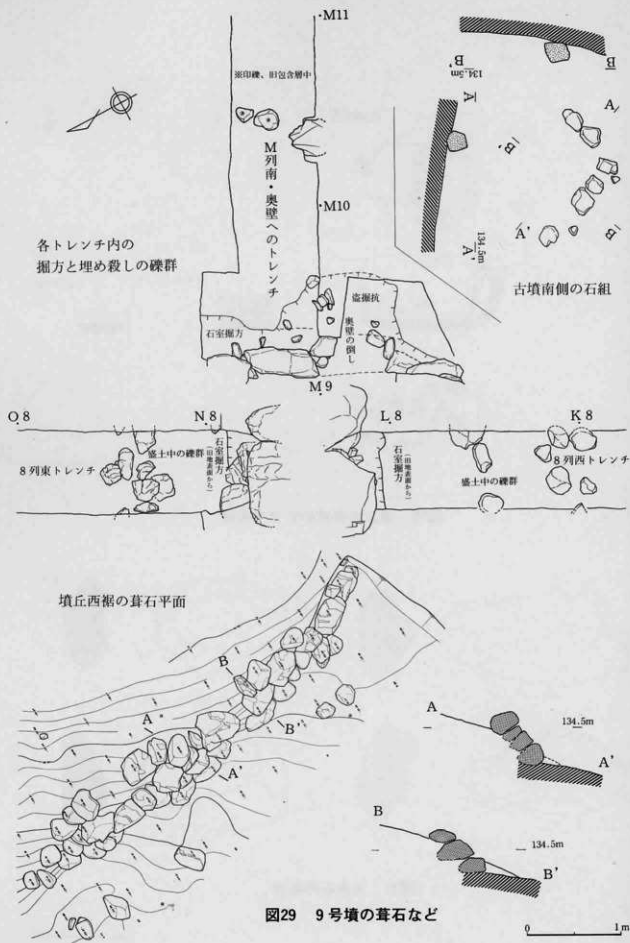
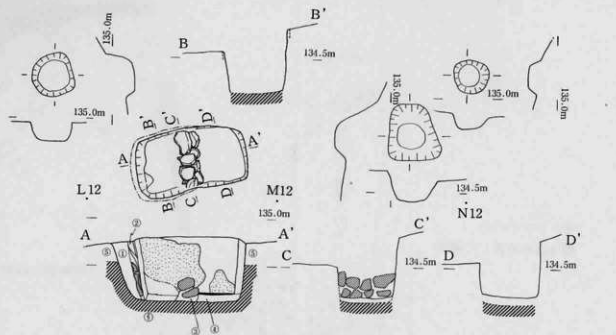


図29 9号墳の葺石など



- カマド断面図の番号
- |                        |     |
|------------------------|-----|
| ① 赤褐色 軟らか              | 面瓦上 |
| ② 上からオレンジ色・暗褐色・黒色・褐色・黄 | 焼土  |
| ③ 赤褐色 軟らか              | 敷土  |
| ④ 赤褐色 固い               | 古焼土 |
| ⑤ 赤褐色 しまる〜固い           | 地 山 |

0 1 m

図30 墳丘の南東のカマド遺構

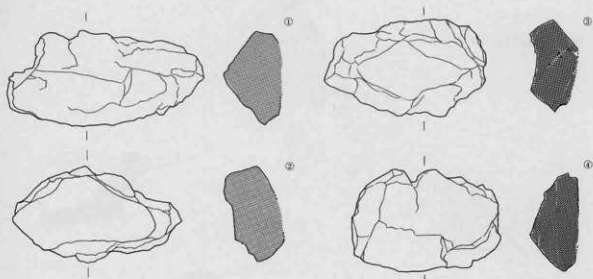


図31 天井石の石材

0 1 m

り数段高い位置まで奥壁が積まれていたと思われる。

玄室の床面からは礎床が検出された。玄室内の全体に拳大の礎が敷かれており、部分的に剥げて敷土が出ているところもあるが、非常に残りがよい。

床面はほぼ水平で、側壁の基底石は地山直上より積み上げられている。

礎床面の図面作成と閉塞石の取り除き作業終了後、羨道・前庭部を含めて、石室内の東半面を地山レベルまで掘り下げて、断ち割った。

その結果、奥壁から玄門までの間の床面は、厚さ6cmの敷土で覆われているのが分かった。羨道内については、玄門から外側1.6mの地点まで、初期の閉塞石の段が地山直上に1段残されており、そこから外側は前庭部との堺まで2層の厚い敷土が敷き固められている。前庭部は地山と旧地表そのまま床面となり、敷土は敷かれていなかった。

なお玄室内の礎床面に、棺もしくは棺台と思われる石材は確認されなかった。

### (3) 羨道

羨道から前庭部も攪乱土で覆われていたが、側壁・閉塞石等は外部へ出ておらず、墳丘の検出に合わせて、攪乱土を取り除く作業を行った。

羨道に関しては、一部崩れている部分もあったが両側壁とも比較的よく残っており、閉塞石もしっかりした状態で出土した。

玄室と羨道を分ける玄門は、西側が厚さ30cm・高さ90cmの板状の礎を垂直に立ててあり、東側については厚さ40cm・高さ80cmの礎を縦長に用いることで両袖式の玄門を作り出している。玄門の幅は約1.1mである。

この玄門部には、大きさ20～30cmの角礎と円礎が閉塞石として乱積みされており、高さ1.1m程残っていた。長さは約2mほどになり、積み上げられた礎は、玄門では垂直に立ち上がるのに対して、入口へ向かって緩やかな傾斜を描いている。

羨道の平面形は、玄門から北西へ直線的に伸びており、その全長は玄門から約3.6m、最大幅は1.3mである。

立面形は、東西共に地山直上からほぼ垂直に立ち上がっており、東側の側壁の上部の礎で内側に迫り出してきているものが数個あるが、これらは明確な持ち送りの構造を成すものではない。

側壁の残存状況も玄室と同じく良好で、西側の前庭部の堺には羨門と思われる礎が配されていた。玄門から1mくらいの範囲は、玄室同様に長方形の礎を組み合わせ4段程度の壁を造っているが、前庭部に近いほうでは両側壁とも1～2段しかない。

これは、側壁の上の部分については墳丘の傾斜の合わせるために積み上げる段数を少なくし、下については前庭部に向けて麓り上がってくる地山のラインと敷土の厚みに合わせるように段数を減らしていった結果である。

使用されている礎はもちろん角礎であるが、玄室のものより小ぶりな礎が多い。しかし1段しか側壁が無い部分では、70cm前後の長方形の礎が使われている。

積み方に関しては基本的に玄室と同じと考えられる。また羨道についても天井石は残っていないかった。

床面については玄室の部分でも触れたが、おおむね2つのブロックに分かれる。

玄門から1.6mの地点までは、初期の閉塞石の残りがそのまま積み上げられている。内部には敷土の層があり、その敷土の中から須恵器が出土している。

上記のことから、この閉塞石の段は2回目以降の追葬時に造られたものと考えられる。最初の埋葬の際に造った閉塞石の壁を全て外した上で追葬を行い、その時点で玄門部から羨道にかけて、敷土と角礫で段(床面)を造った。その段(床面)の上に現在の閉塞石が積まれている。

その敷土の層の中には、何か意味があるのか、完形の短頸壺1点と坏の破片が何点か埋まっていた。

また前庭部にかけての残りの部分には、厚さ20cmの敷土の層がある。その敷土の上には幾つかの角礫が置かれており、礫床のように加工されている。

この層は、古い閉塞石の段の下側へ入り込んでいるが、ここからは土器の破片等は出土していない。このことから、少なくとも3回目以降の追葬時に、閉塞部分と前庭部への床面を平らにするために付け加えられたものと考えられる。

なお羨道内の地山面は、玄室の床面に向かって掘り込まれており、緩やかに傾斜している。

#### (4) 前庭部

9号墳の前庭部は、西側については羨道に続く形で石室の入口へ向かって側壁が残っているが、東側については、作業時にその大半を外してしまった為、元々の状況がわからなくなってしまった。

しかし残っている西側を観察するだけでも特徴的な面が出ているのがわかる。

まず羨道との境に大きめの長方形の角礫が段状に積まれて、羨門を造っている。この部分から外側が前庭部であり、側壁の作り方が変わる。それまでの石室の立面形は垂直に立ち上がっていたが、開口部の壁面が上に向かって外側に開く形になり、そこにできた斜面の表面上に礫が積まれている。

使用されている礫も大きさ20～30cmほどの小ぶりのものになり、礫自体を積み上げると言うよりも、斜面を覆うために葺いたようになる。

これはそれまでの石室の作り方と大きく異なり、どちらかと言えば墳丘上に葺石を敷く時のやり方に近い方法と思われる。

また平面形も羨道までが直線だったのに対して、墳丘裾に向かってハの字に左右に開いていく。側壁の石積みはそのまま墳丘入口部の裾のラインに合流し、西側の墳丘に関しては裾の円周上をなぞるように出土している葺石に続いていく。

この葺石のラインはおおよそ5mにも及び、盛土の上に3～4段の角礫が積まれている。東側の墳丘からも似たような礫の集まりが出ているが、西側ほど形状のはっきりしていない。しかし、これらも西側と同様の葺石の列であると考えられる。

前庭部の床面は、ほとんどが旧地表と地山の剥き出しになった面で、敷土は敷かれていない。羨道から墳丘の裾にかけて、徐々に地山の面が高くなっていく。

### 第3節 遺物の出土状態(図27)

9号墳も、出土した遺物の数が少ないわけではない。しかし個体数では5号・8号墳に及ばず、出土した須恵器の大半が破片で、整理作業段階で復元できるものは多かったが、完形で出土したものは1点しかなかった。

また8号墳などでは石室の外から出土した遺物が多数みられたが、9号墳はおおむね玄

室内の攪乱土か床面上もしくは羨道部より出土しており、墳丘周りや外部から出土したものは少数であった。

玄室内の攪乱土中からは、須恵器が多数出土している。坏の破片が多く、接合すればある程度形になるものから小さな破片まで多岐に渡っている。坏以外に壺蓋なども出土している。

床面上に残された遺物が集中しているのは、玄門の手前1mくらいの範囲内(図27参照)で、須恵器片の大半がここから出土し、鉄器も混じていた。

坏蓋4点・提瓶1点が整理作業時に接合できたが、発掘時にはバラバラの破片の状態出土している。これらの遺物は、もともとこの位置に置かれていた須恵器が盗掘の際などに破壊され、破片が床面上に残っていたと考えられる。その他にこの位置からは、鉄付きの鉄片が出土している。

他に玄室内からは鉄器が出土しているが、これらは主に玄室の中央より奥で見つまっている。玄室の中央付近からは刀子2点、奥壁の手前からは刀子1点と鉄鏃2点が出土している。

また奥壁の後方にあたる盗掘坑の攪乱の中からは、直刀の鐔が出土した。これは盗掘の持ち出しの際に残されたものと考えられる。

なお玄室の中央西よりの辺りから、中実の銅芯に銀箔を施した耳環1点が出土している。組となるもう1点に関しては発見されなかった。

石室内でもう一ヶ所遺物が出ているのは羨道である。遺物が出土したのは羨道内に積み重ねられていた閉塞石の段の内部で、閉塞石を取り除いた中に敷かれていた敷土の中から、ほぼ完形の短頸壺と破片状の坏蓋と坏身が出土した。また羨道の攪乱からは横瓶の口縁部の破片が出ている。

短頸壺は磔の下から出土した。敷土の層の中央に穴を掘り、壺の口が上に向くように置かれていた。短頸壺の中には土が詰まっており、壺の中に何かを入れたような痕跡は無かった。この短頸壺については、何らかの意図を持って埋めたものと考えられる。

坏に関しては、敷土の内部から破片としてバラバラに出土している。敷土内に破片が混じっただけかと思われたが、坏蓋は接合するとほぼ完形となり、組となる坏身の破片も出土している。しかしこの坏蓋が意図的に置かれたものかどうかは不明である。

また磔床面については、主軸とそれに直交する線を玄室中央に引いて、玄室内を4つのブロックに分け、磔床面と磔床の上10cm程度の攪乱土については後で簡かけを行った。その結果、土中より玉類等が出土した。

出土した玉はガラス製の小玉で、玄室内の4つのブロックのほぼ全域から数点づつ出ており、計16個である。出土位置が拡散しているのは、盗掘で内部が荒らされた際に床面などに散らばった為と思われる。

大きさ・形状・色など様々で、幾つかのグループに分けることが可能であるが、出土位置が大まかである上に元の状態を推測するには発見された数が少ないことなどから、もともと一つの個体を成すものがバラバラになったのか、或いは複数の個体であったのかについては不明である。

また攪乱土中からは、簡をかけた時点で何点かの鉄鏃の破片が出土している。これらも盗掘の際の残りと考えられる。

#### 第4節 出土遺物 (図42・43、図版25・26)

出土遺物の個体数は次の通りである。詳細は出土遺物観察表に譲る。

出土位置	古墳後期 / 須恵器 金 属 器 玉 類													
	坏蓋	坏身	高坏	壺蓋	短頸壺	細頸瓶	提瓶	横瓶	鉄鍔	刀子	鐙	止金具	耳環	ガラス
支室・羨道	10	5		2	1	1		1	4↑	3	1	1	1	16
前庭部														
墳丘・周溝	1	1	2↑				1							
合 計	11	6	2↑	2	1	1	1	1	4↑	3	1	1	1	16

##### (1) 須恵器類(121~134)

坏蓋が11個体と坏身が6個体、高坏2個体以上、壺蓋2個体、短頸壺1個体、細頸瓶1個体、提瓶1個体、横瓶1個体が出土している。一部を除き、その殆どが支室及び羨道からの出土である。支室は、奥壁をなぎ倒しての乱掘にみるように、かなり荒らされており、破片の状態が多い。原位置の推定は難しいが、支門に近い部分に集中しており、片付けを暗示するものなのかも知れない。121の坏蓋、128の坏身、132の短頸壺は、閉塞石を完全に除去した後の敷土中から出土しており、羨道の床面にはこの遺物後の改変を認める所以である。

##### ・坏類

坏類は悉く尾張系のもつとみられ、4型式に細分類できる。127の坏身は、推定の口径が13.0cmであり、凹線化した口縁端部の調整からも尾張3型式・東山61号窯期後半(TK10併行)に属するものと考えられる。これとセットとなろう蓋の破片も支室内から出土している。

121 坏蓋と128 坏身は、後の追葬時に移動しており、セットの可能性が高い。灰色から濃灰色を呈する軟質な焼成で、東山61号窯期末～尾張4型式・(+)窯期の所屬とみる。122・123も同様の焼きを認め、同期に所屬するものであろう。坏蓋は、2cm程度の立ち上がりと口径12.4~13.2cmを測る。

124~126の坏蓋は支室出土のものであるが、口径推定12cm台を測るものの、立ち上がりは1.7~1.8cmに止まり、端部の調整も上記より新しい。尾張4型式・(+)窯期の終わり～尾張5型式・東山44号窯期前半に位置づけておく。

図示はできなかったが、墳丘の北東側からは、これより下る尾張7型式・東山50号窯期前半の坏身片も出土している。副葬品かどうかは定かでない。

##### ・高坏など

2個体以上が墳丘の北東側から破片で出土している。辛うじて図示できたのは131の脚部で、東山50号窯期の併行とみる。他は長脚2段3透かして、東山44号窯期前半のものとみられる。

129は、片方の胴部がやや扁平となる無把手の提瓶、130は短頸壺の蓋で、何れも東山44号窯期に併行しよう。132は外面底部にへら記号を刻む短頸壺、134は壺の蓋である。その他、石室正面の墳丘裾近くと羨道部から出土した破片の接合品(133)は、マンボウ形の横瓶であり、東山44号窯期末～東山50号窯期前半のものとみてとれよう。

##### ・須恵器類のまとめ

このように9号墳出土の須恵器類は、天井石が外され攪乱や持ち出しが予想はされるものの、坏類からみて4（型式）時期に、その他の器種もほぼこれに合致する。

須恵器類からみる本墳の築造時期は、東山61号窯期後半（およそ6世紀第2四半期）に位置づけられ、東山61号窯期末～（+）窯期と（+）窯期末～東山44号窯期前半、東山44号窯期末～東山50号窯期前半の、初葬後、少なくとも3度の追葬を推定することができよう。但し、危険を承知で細かくみれば、更に追葬の回数が増えることもあり得る。

## （2）鉄器類(135～146)

直刀の鐔は礎床面から離れた状態、その他の鉄器はほぼ礎床面からの出土であり、その位置は、奥壁近くと玄室中央付近である。鉄鍔4個体以上、刀子3個体、鐔1個体、止金具1個体が全てであるが、鐔の出土にみるように、直刀等、持ち出されたものもあろう。

鉄鍔 135～141 は破片ばかりであるが、135 と 141にみるように、刃部が細身で柳葉形、刃と軸部の境に閃を有するものがある。136 と 137は、軸と柄部の境に段をみせる。

刀子 142～144 は、小型のものらしく、ほぼ完形の 142は長さ10.8cm、刃部長 8.5cm、刃幅 1.6cmを測る。次に述べる鐔の対にならう、直刀片と思われる鉄片も少量ある。

145 は鐔で、倒された奥壁の攪乱層から出土し、4個の長方形の透かしを残す。象嵌は肉眼では見当たらない。146 は長楕円形の鉄板に鋸の付いた止金具とみられる。

## （3）装身具類(147～161)

ガラス製小玉は、玄室礎床面近くの土をフルイにかける作業の中で16個みつかり、破損のない14点を図示した。玄室内におけるその土の部位別の個数は、西 1/4区から4個、北 1/4区から2個、北東 1/2区から3個、東 1/4区から1個、南東 1/2区から2個、南 1/4区から3個、不明1個であり、全般の土から採取された。想像すれば、原位置は玄室の中央付近とみることできる。

色は、半透明で薄緑が13個、同じく半透明で青が2個、不透明で黄緑が1個である。玉の直径は 0.2～0.4cm、孔径は 0.2～3cmと細かい。管状のガラスを切断し、角を研磨して仕上げられている。

耳環(161) は、玄室中央付近の右側壁に近い部分から1個のみ出土。外径 2.7cm、内径1.9cm を測り、型に当てて曲げた痕跡が観察できる。中実の銅芯に銀箔を張り、金のメッキを施している。細身の作りである。

## （4）その他の遺物

墳丘の北東側からは、呉須・銅版転写による松竹梅の絵柄の磁器製御神酒が2個出土している。5号墳同様、近代においてこの古墳が信仰の対象とされ、お参りの際に御神酒が供献されたのであろう。

また、墳丘の南東において検出されたカマドは、当所における生活の痕跡であるが、その北西壁の中から、近代とみられる瓦片が出土した。カマド構築の時期の上限を示す。

## 第8章 大森新田10号墳

### 第1節 墳丘(図32・33・36、図版27・31)

10号墳は、大森新田古墳群の発掘調査を計画した時点ではまだその存在が確認されていなかった。9号墳発掘中、現場周辺を散策している際に8号墳の南側の雑木林の中に墳丘と思われる小山を発見した。

その小山の上部には大きな岩の配置が露出しており、古墳である可能性が高いと判断し、周辺部を含めて伐採範囲を広げたところ、8・9号墳同様に平坦な土地の上に人工的に造られて墳丘が確認され、その上部には天井石の残骸を持つ石室の一部が存在していた。

そこで、計画時には5基であった調査対象に1基を追加し、発見されたこの古墳を10号墳として設定した。

先にも述べたとおり、伐採作業が終わり墳丘の全景が確認できた段階で、10号墳の墳頂部には大きな穴が開いているのが分かった。それは玄室の内部が露出したもので、東西方向に並ぶ玄室の側壁が外から確認でき、墳頂の東側には崩落した天井石が1個残されていた。また墳丘の西側斜面には、側壁に使われている石材と同じ礫が数点転がっていた。

これらの石積みから、8・9号墳同様に10号墳も西側に開口部があると想定し、露出した側壁を基に主軸(M列)の設定を行った。

その後墳頂部より表土剥ぎの作業を行った結果、墳丘中央より石室が出土した。また墳丘全体の検出を続けたところ、直径が約17.5mの円墳であることが確認でき、墳丘の南側の一部から周溝と思われる溝が見つかった。

墳丘の盛土の状況を調べるために、主軸に直交する形で南北方向にそれぞれ1本づつと、主軸の延長線上の東側に1本の計3本のトレンチを幅1mで設定し、墳丘を断り割った。

トレンチ断面から見て、3つのトレンチの共通するのは、石室の裏込めの近くから旧地表と地山の掘方が検出されたということである。これは石室の築造方法が他と共通の方法で行われていることを指している。

また石室から外へ数mの地点から旧地表を削って、地山上になだらかな層の盛土を積む墳丘の作り方に関しても、他の古墳と同様の方法が取られている。ただし若干の差異が有るとすれば、他の古墳に比べて墳丘の裾近くまで旧地表が残されている点である。

葺石については、墳丘の表面及びその内部についても全く見られなかった。

墳丘の盛土は旧地表・地山を含めて、東のトレンチで30層、南トレンチ40層、北トレンチで38層に分層可能である。基本的に赤褐色・黒褐色・暗褐色の3つのブロックが交互に重なり合っているが、それに黄褐色の層が部分的に混じっている。全体的に小石・小礫を含む層が多い。このことから周辺の地山と旧地表面を利用して、盛土が積み上げられていると考えられる。

また10号墳では、今回調査を行った古墳のなかで唯一はっきりと周溝であると思われる遺構が墳丘の南側から出ている。南トレンチの断面から観ると、墳丘の裾部分で一旦地山を掘り下げて、一段低い面を約4mほど作り、地山が山側へ傾斜して上がっていくのを利用して溝状の遺構をなしている。

この周溝は、南トレンチの断面から東方向に墳丘の円周をなぞるように確認されている。



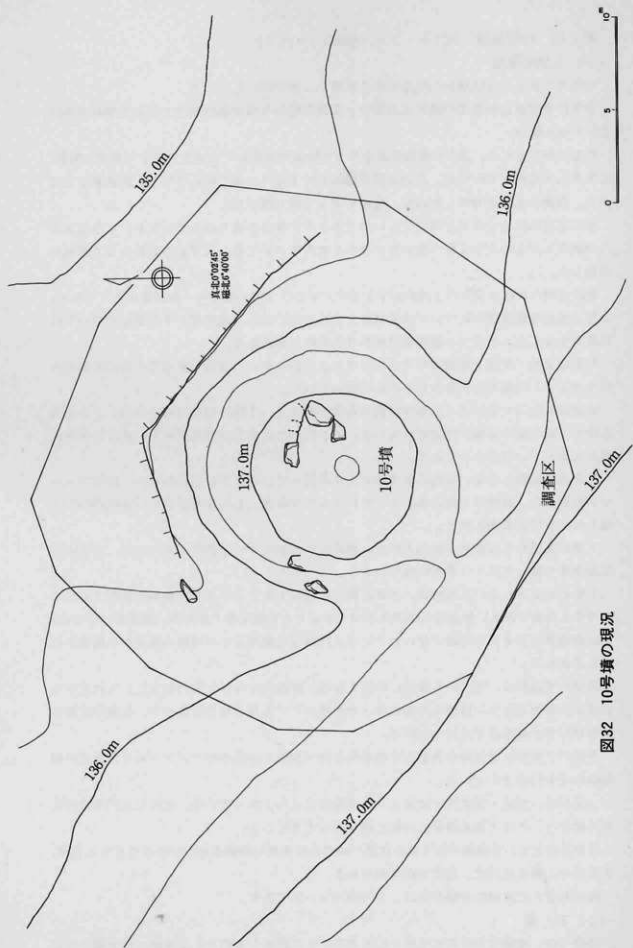


図32 10号墳の現況

## 第2節 埋葬施設 (図34・35、図版27～31)

### (1) 石室の概要

主体部である石室は墳丘のほぼ中央に位置し、西に開口している。

形状は単室構造両袖式の横穴式石室で、玄室奥壁から前庭部の端までの主体部の全長は約9.9 mを測る。

石室の残存状況は、墳丘の検出作業を行った時点で奥壁の上当たる部分(墳丘の東側)に天井石が残存していたが、石の北側が崩落して玄室内に落ち込んでおり、原位置からはズレ、危険であると判断したので、重機によって取り除いた。

また石室内にもこの石と同じくらいの大きさの1枚岩が落ち込んでいたが、これも天井石が崩落したものとして取り除いた。なおこれらについては、天井石の石材として図面に記録した。

他の古墳と同様に墳丘の上部が削平を受けており、玄室の側壁の一部が露出していたが、玄室・羨道の側壁部分については非常によく残っていた。一部奥壁の手前部分については段数が少なくなっており、盗掘等で礫が外されたと思われる。

石室は玄室・羨道・前庭部の3つに分けることができる。玄室・羨道は全体的に側壁の残りがよく、閉塞石の石積みもきれいに残っていた。

前庭部から入口にかけての部分は他の古墳の場合1～2段の側壁があったが、10号墳に関しては石室の石積みが途切れている。その代わりに盛土の壁面があり、礫による壁を敷いて造っていないようである。

また奥壁に関しては、基底石を含めて大半が残っているように思われるが、側壁のレベルから観ると、奥壁の上側が無くなっているようである。これは奥壁側から盗掘用の穴が掘られた為だと推測される。

玄室の床面からは礫床が検出された。礫床は一部剥げている箇所もあったが、玄室内の床面全体を覆っており、非常に残りがよい。

石室に使用されている石材は、古墳群周辺に存在するチャートの岩盤から採取されたもので全て角礫である。閉塞石は側壁より少し小ぶりの角礫が多く使われ、礫床については、土岐砂礫層に含まれる円礫が使われている。円礫は丘陵端近くの同層の露頭から採取されたと思われる。

石室の平面形は、玄門から羨道にかけては西に直線的に伸び、玄門から2.2 m付近から前庭部の側壁となり、南側は外側にゆるやかなカーブを描きながら広がり、北側は直線的に伸びたまま墳端部分につながる。

玄室の平面形は両側壁中央部分で最大幅を持つ胴張りの長方形プランであり、南北の側壁はほぼ平行に並んでいる。

立面形は、玄室・羨道共に床面よりほぼ垂直に立ち上がっている。ただし玄門手前の玄室の側壁は、その上部が微妙に内側に迫り出している。

なお現存している側壁の最も高い位置の礫の上に天井石が積まれていたと考えられるが、天井石の正確な状況は、現状では不明である。

仮に設定したM列の主軸方位は、 $S-82.0^{\circ}-E$ である。

### (2) 玄室

発掘当初、奥壁の上当たる部分に天井石が1枚残存しており、玄室の一部を覆ってい

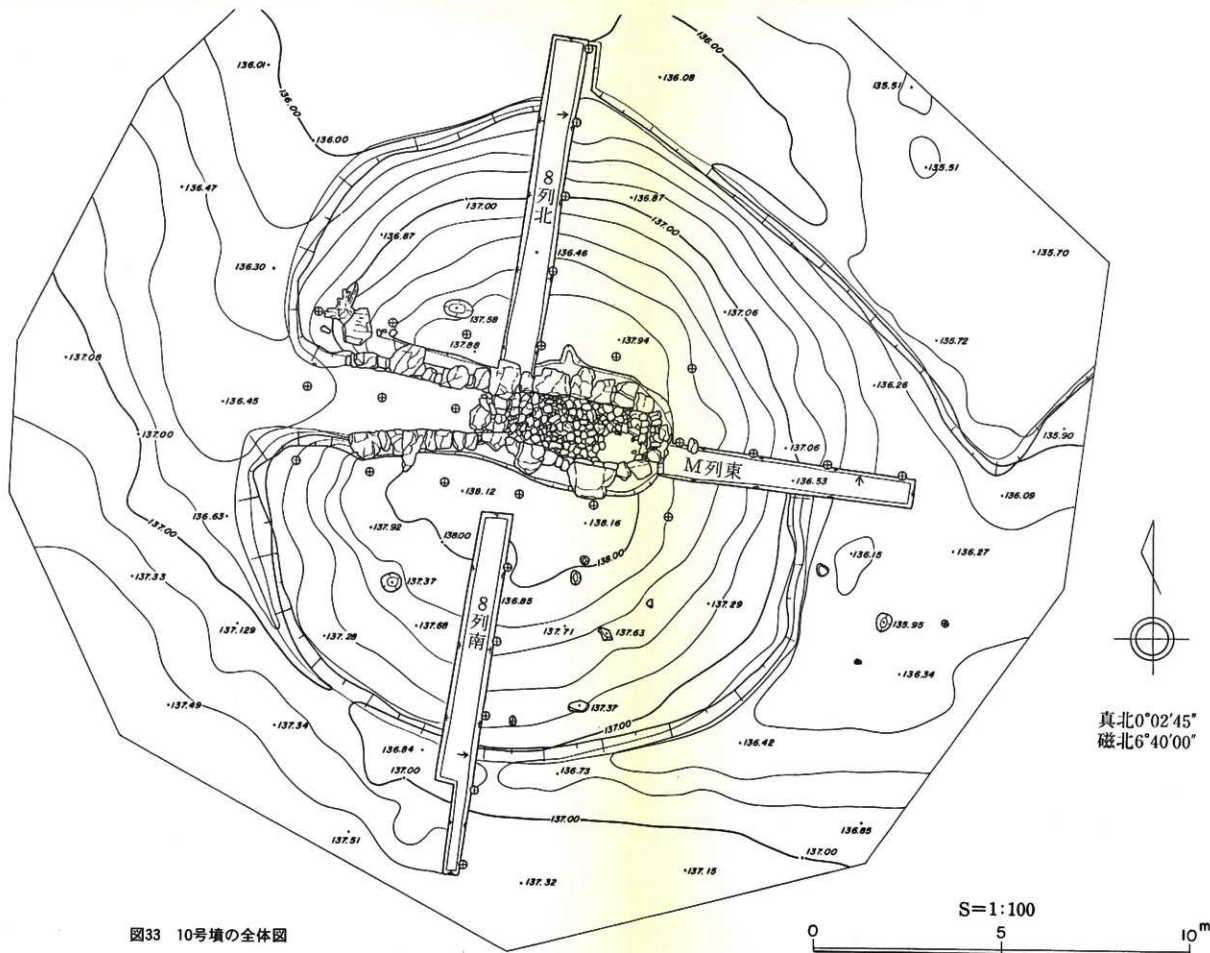


図33 10号墳の全体図

たが、その他の部分に天井石は無く、側壁の一部が外に露出していた。玄室内は流入した攪乱土と崩落した石で埋まっていた。

露出していた側壁を基に主軸を設定し、攪乱土と崩落した石を取り除き、玄室を検出した。玄室内に崩落していた石には、天井石と思われる石材も含まれていた。

玄室の平面形は、両側壁中央部分がやや膨れる胴張りの長方形プランを呈する。その最大幅は1.6 mを測り、奥壁から玄門までの玄室長は3.9 mである。両側壁は、玄門内側より約30～40 cm外に張り出して設置されており、これが両袖式の玄門部を作り出している。奥壁の幅は1.4 mである。

玄室内の側壁は南北共に残りがよく、特に中央部分では最大で6段を数え、高さは床面から1.8 mを測る。その他の部分についても、おおむね5段程度が残っている。ただし南側の側壁の奥壁手前部分1 mくらいの範囲については、他の3分の2程度しか残っておらず、高さも半分程度である。

側壁の礎の積み方は、横30～40 cm程度の長方形の角礎を主軸方向に横長に配して基底石とし、その上2段ぐらいを小さめの長方形の角礎で積み上げ、高い位置に行くほど大きな礎を使うようになる。また大きな礎の間には小さく打ち割った礎が詰めてある。

南側の側壁の一番高い位置の岩は、横1.2 m・高さ60 cmのもある大きな1枚岩を使用しており、この岩の上に天井石が乗せられていたと思われる。

側壁の立ち上がりは、玄室内ではほとんど垂直の状態である。一番高い位置に積んである礎まで垂直な立ち上がりをするので、この礎が天井石の下にあったとすれば、10号墳の玄室は持ち送りの構造になっていなかったと思われる。

奥壁部分は、中央に一辺80 cmの正方形の1枚岩が基底石として置いてあり、その両側を小ぶりの角礎で埋めてある。また、基底石の上には横20 cmくらいの板状の礎が何段か積んであるが、そこから上については盗掘の際に外されたのか残っていない。

側壁の高さから見て、現在の倍ぐらいの高さがあったのではないかと推測される。

玄室の床面からは礎床が検出された。玄室内の全体に直径20 cm前後の円礎が組み合わされて敷かれている。礎と礎との隙間には小さな円礎が詰め込まれ、床面全体をきれいに覆うように処理されている。

奥壁手前の一画に、完全に礎床が剥がされている部分があるが、全体としては非常に残りがよい。

床面はほぼ水平な状態で、側壁の基底石は地山直上から積み上げられている。

礎床面の図面作成と閉塞石の取り除き作業終了後、羨道・前庭部を含めて、石室内の南半面を地山レベルまで掘り下げて、断ち割った。

その結果、奥壁から前庭部までの床面は厚さ20 cmの敷土で覆われていた。地山の上に2層の敷土を敷き、玄室内については敷土の上の層に礎床を埋め込んである。閉塞石もこの層の上から積み上げられている。

羨道から前庭部にかけては礎床は無く、玄室内とは異なる土層の敷土が敷かれていた。石室の入口に近い部分の床面は地山のみである。

なお玄室内の礎床面に、棺もしくは棺台と思われる石材は確認されなかった。

### (3) 羨道

羨道から前庭部も攪乱土で覆われていたが、側壁・閉塞石等は外部へ出ておらず、墳丘

の検出に合わせて、攪乱土を取り除く作業を行った。

羨道に関しては、一部崩れている部分もあったが両側壁とも比較的よく残っており、閉塞石もしっかりした状態で出土した。

玄室と羨道を分ける玄門は、北側が厚さ30cm・高さ80cmの板状の礫を垂直に立ててあり、南側については厚さ40cm・高さ80cmの礫を縦長に用いることで両袖式の玄門を作り出している。玄門の幅は約1mである。

この玄門部には、大きさ30～40cmの角礫が閉塞石として積み上げられている。約1mほどの距離で、高さは60cm程度になる。積み上げられた礫は、玄門では垂直に立ち上がるのに対して、入口へ向かって緩やかな傾斜を描いている。また羨道側には一辺60cmの正方形の礫が立てかけるように置かれている。

羨道の平面形は、玄門から西へほぼ直線的に伸びているが、南側の壁は羨門に向かって緩やかに外へ傾斜している。その全長は玄門から約4.6m、最大幅は1.8mである。

立面形は、南北共に地山直上からはほぼ垂直に立ち上がっており、北側の側壁は基底石から気持ち内側に傾斜している。

側壁の残存状況も玄室と同じく良好で、南側の側壁には横80cm・高さ1.2mの一枚岩が羨門を明示するものとして立てられている。基底石は玄室と同じく20cm台の角礫で、それより上は60～80cmの長方形の礫が積み上げられている。

段数としては4段程度の壁を造っているが、北側の側壁は一部1～2段しかない残っていない所もある。

また羨道の側壁は、その上部が羨門に到るまではほぼ水平に積まれており、墳丘の傾斜に合わせて段数が減っていくような造りにはなっていない。

使用されている石材はもちろん角礫であり、玄室のものと同じである。

また羨道についても天井石は残っていなかった。

#### (4) 前庭部

10号墳の前庭部には、他の古墳と違って石積みによる側壁がない。南側の羨道の終わりの部分に横80cm・高さ1.2mの一枚岩が羨門として立てられており、それより外側は盛土の壁が入口まで続いている。

羨道が長い為に前庭部自体は短い、掘へ向かってハの字に左右に開いていく形をしており、石積みの壁はないものの形状としては通常の前庭部の平面形と同じである。

立面形としては、南北共に上に行くほど緩やかに外へ開いていく。

前庭部の床面は、羨道からの引き続きで2層の敷土に覆われているが、入口に近い所からは地山の層のみとなる。

奥壁から前庭部の端まではほぼ水平の状態が保たれ、入口付近で地山のレベルに合わせてために傾斜が付けられている。

### 第3節 遺物の出土状態 (図35、図版28)

10号墳は、遺物の出土数が6つの古墳の中で最も少ない。玄室内の床面上から出土したのは須恵器が4点、鉄器5点、耳環1点の計10点。その他に羨道内から耳環1点、墳丘南側の周溝内から須恵器が1点と全部で12点である。

まず玄室内から観てみると、須恵器については奥壁の手前南側より完形の短頸壺が出土

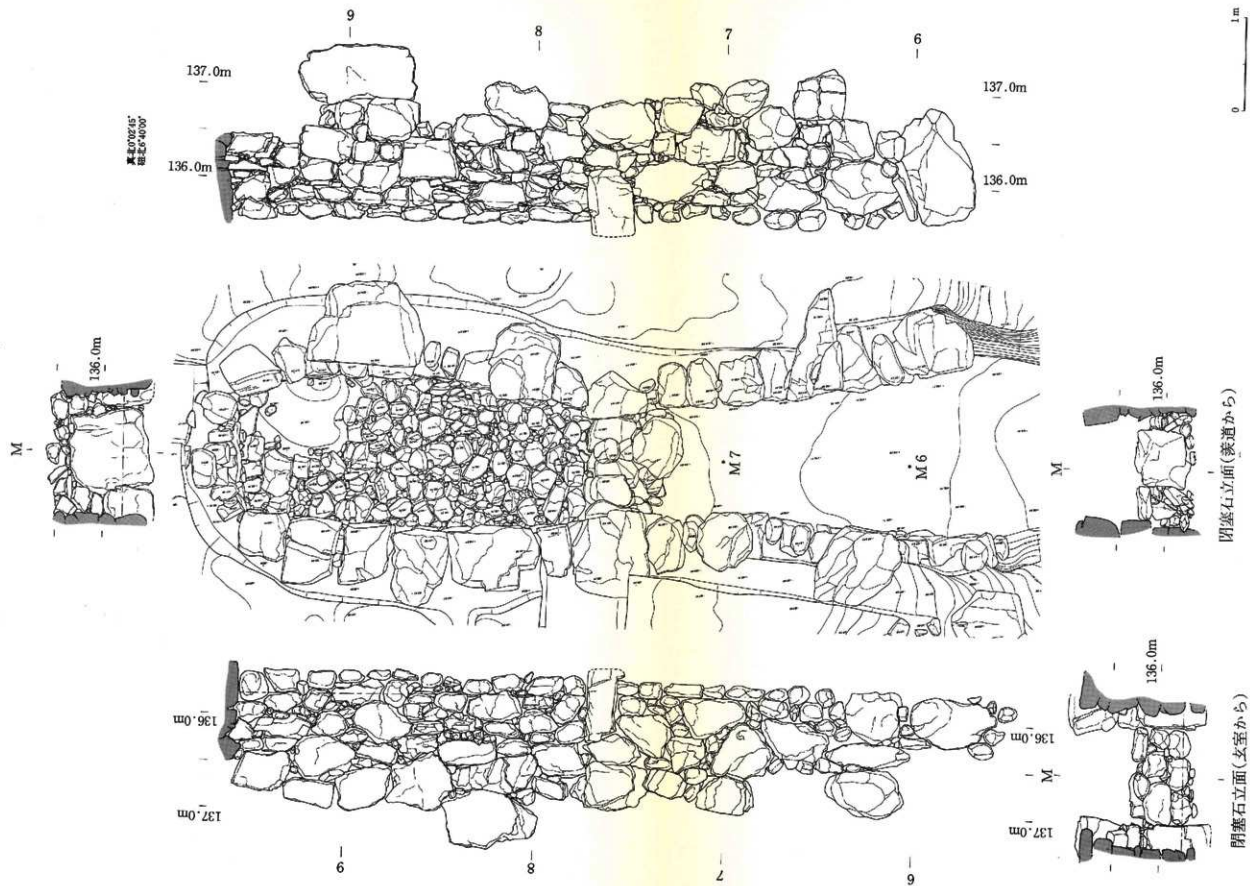
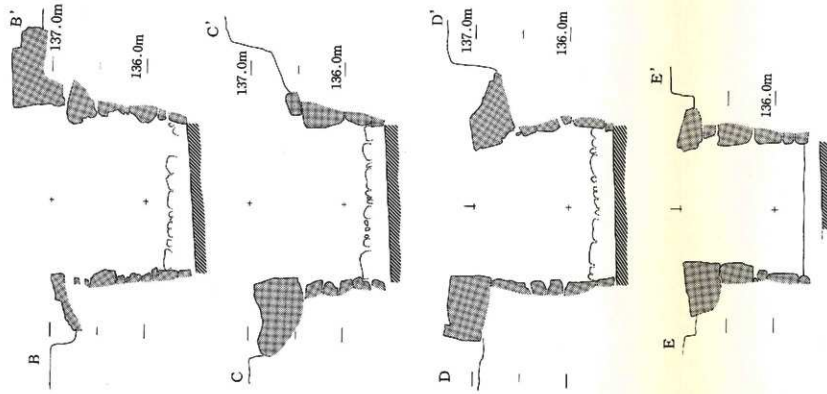
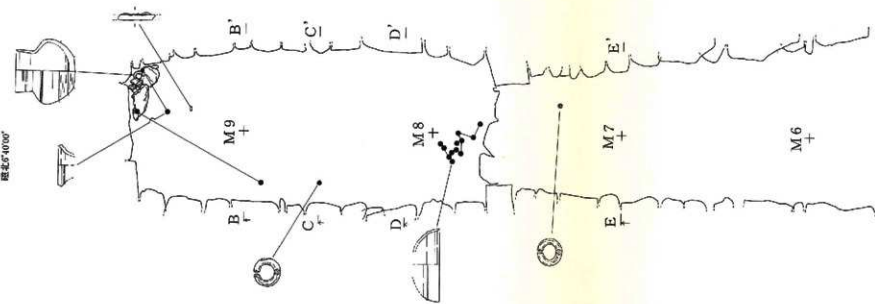
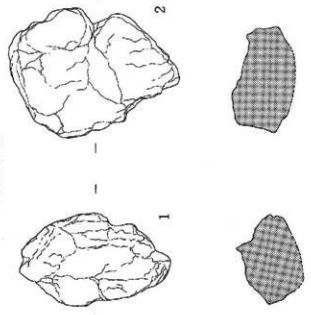


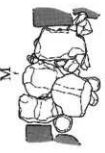
図34 10号墳の石室



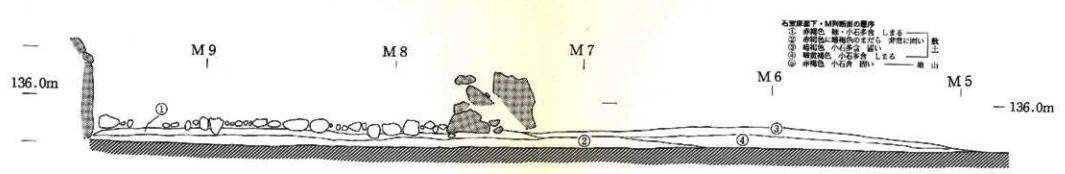
天井石石材



※石室の階面は露床レベル



附基礎底石平面図



石室壁下・M9附近の層序  
 ① 浮石層 ② 礫層 ③ 砂層 ④ 土層  
 ⑤ 浮石層 ⑥ 礫層 ⑦ 砂層 ⑧ 土層  
 ⑨ 浮石層 ⑩ 礫層 ⑪ 砂層 ⑫ 土層  
 ⑬ 浮石層 ⑭ 礫層 ⑮ 砂層 ⑯ 土層  
 ⑰ 浮石層 ⑱ 礫層 ⑲ 砂層 ⑳ 土層  
 ⑳ 浮石層 ㉑ 礫層 ㉒ 砂層 ㉓ 土層  
 ㉔ 浮石層 ㉕ 礫層 ㉖ 砂層 ㉗ 土層  
 ㉘ 浮石層 ㉙ 礫層 ㉚ 砂層 ㉛ 土層  
 ㉜ 浮石層 ㉝ 礫層 ㉞ 砂層 ㉟ 土層  
 ㊱ 浮石層 ㊲ 礫層 ㊳ 砂層 ㊴ 土層  
 ㊵ 浮石層 ㊶ 礫層 ㊷ 砂層 ㊸ 土層  
 ㊹ 浮石層 ㊺ 礫層 ㊻ 砂層 ㊼ 土層  
 ㊽ 浮石層 ㊾ 礫層 ㊿ 砂層 ㊿ 土層

図35 10号墳の石室と遺物出土状況



している。これは礎床に囲まれるように敷土上に置かれており、破損や移動した痕跡が無いことから副葬当時の原位置を保っていると思われる。

この短頸壺の近くからは細頸瓶の口縁部が破片として出土している。

また玄室内の玄門手前部分からは坏蓋の破片が多数出土した。これらは元々そこにあったものが何らかの理由で壊れたためか、1ヶ所に平面的にかたまわって出土しており、整理作業時点である程度まで復元することができた。

なおこの地点からは坏蓋以外の破片も何点か出土しているが、図化できるようなものはなかった。

鉄器については、鉄鎌の破片が5個体分程度出土している。出土位置は玄室内北西部分と南東部分からで、特に規則性はなく、原位置を保っていないと思われる。

玄室の北側壁の近くからは、中実の銅芯に銀箔を張った耳環が1個出土している。

また羨道内攪乱土からも中実の銅芯に銀箔を張った耳環が1個出土しており、こちらは金メッキらしい輝きが残っていた。

これらの耳環は、サイズや形状が非常によく似ていることから元は1組であったと考えられ、副葬時には1つの場所に納められていたものが、持ち出しによってバラバラになったと思われる。

墳丘南側の裾及び周溝からは、高坏の破片が出土している。出土した破片は、復元し図化することができるほどのものではなかったが、玄室内出土の須恵器と同じ年代のものであることから、持ち出しを受けた副葬品の一部と考えられる。

このように10号墳も玄室内は盗掘を受けており、ほとんどの副葬品が持ち去れた後であることが推定される。





#### 第4節 出土遺物（図44、図版31）

出土遺物の個体数は次の通りである。詳細は出土遺物観察表に譲る。

出土位置	縄文	古墳後期 /		須恵器		金属器		白瓷	山茶碗	近世陶
	剥片	杯蓋	高杯	短頸壺	細頸瓶	鉄鍔	耳環	碗		
玄室・羨道		1	1	1	1	5†	2			
墳丘・周回			1							
調査区全域	5							1	5†	1
合計	5	1	2	1	1	5†	2	1	5†	1

##### (1) 須恵器・金属器類(162~175)

杯蓋が1個体と高杯2個体、短頸壺1個体、細頸瓶1個体、鉄鍔5個体以上、耳環2個体が古墳に関する遺物の全てである。この内、墳丘の南側の周溝から出土した1個体の高杯以外は、全て玄室からの出土である。完形の短頸壺以外は細片で、かなりの攪乱、持ち出しが予想される。

162の杯蓋は、玄門に近い部分から踏みつけたような細片で出土した。口径11.8cm、口縁端部の調整とも合わせて、尾張6型式・東山44号窯期後半に位置づけられる。163の細頸瓶の口縁も同時期とみて差し支えない。奥壁右角部で、大型の礫に囲まれたようにして出土、唯一原位置を保つとみられる164の短頸壺は、肩部にロクロ押し引き、若しくはトピカンナによる文様があり、2条の沈線を施す。外面底部にはヘラ記号、自然釉がよくかかる。図化できなかった高杯2個体も含め、東山44号窯期の中で考えている。

鉄鍔（165~173）は、同一個体も予想されることから5個体以上とした。軸部と柄部の境の段が2種（167と168,169）認められ、173は柳葉形の刃部のようだ。

耳環（174・175）は、中実の銅芯に銀箔を張っている。175には金メッキらしい輝きが残っている。共に外径2.9cm、内径1.7cmを測り、セット品と考えられる。174は玄室中央付近の左側壁に近い部分から、175は羨道における攪乱土から出土している。

須恵器からみる古墳の築造時期は、東山44号窯期後半（およそ7世紀第1四半期）を下るものではないが、不自然な遺物量から、この時期に限ることはできない。

##### (2) その他の遺物

調査区全体から、縄文時代の剥片5個が採取できた。土器片は見当たらなかった。

また、少量の白瓷と山茶碗、近世陶器（徳利）破片が墳丘裾付近で出土した。

出土遺物実測図

出土遺物観察表

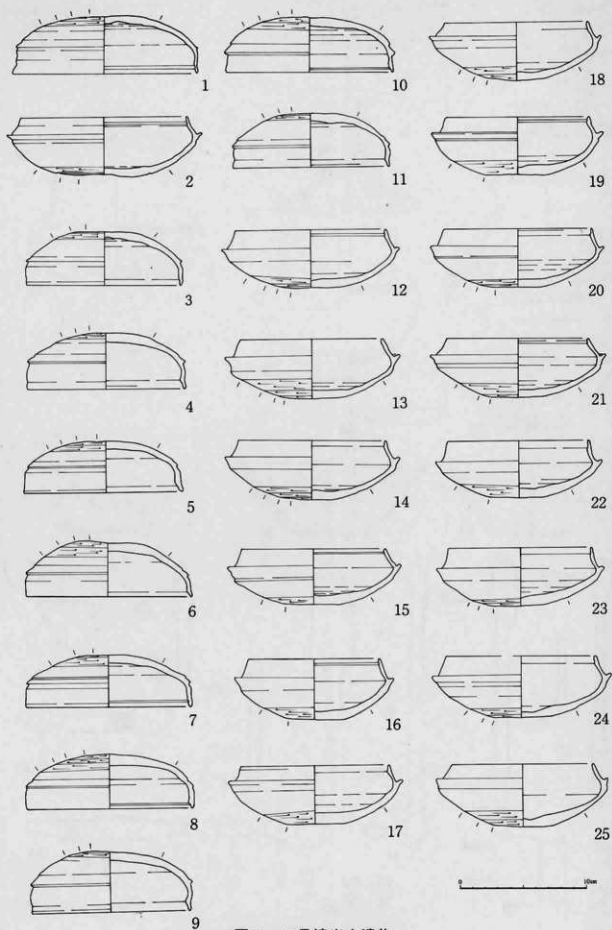


图37 5号墳出土遺物

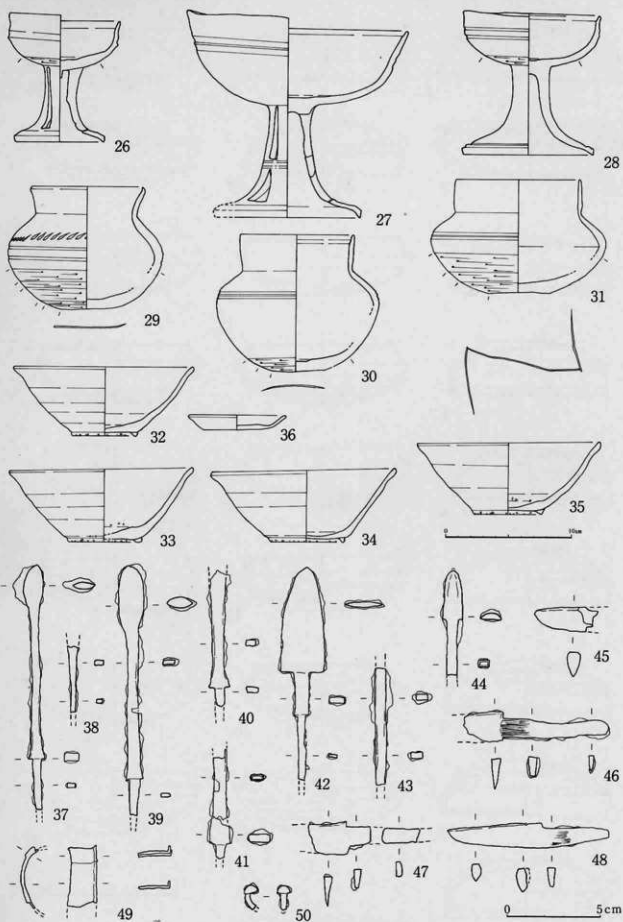
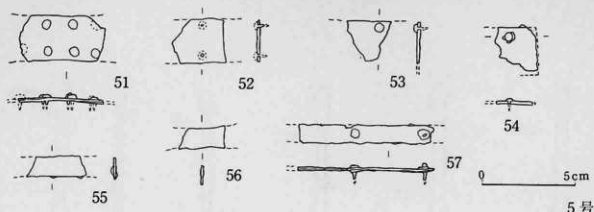


图38 5号填出土遗物



5号墳

6号墳

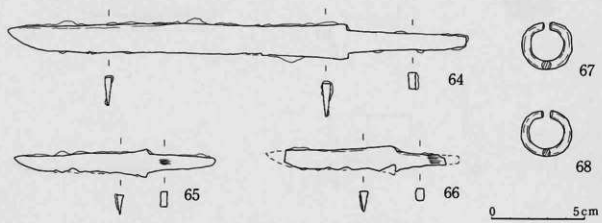
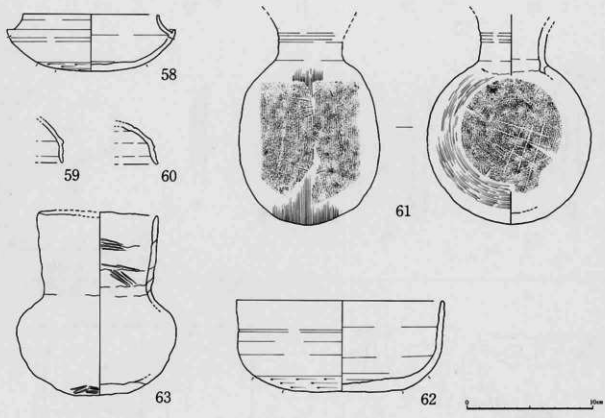


图39 5・6号墳出土遺物

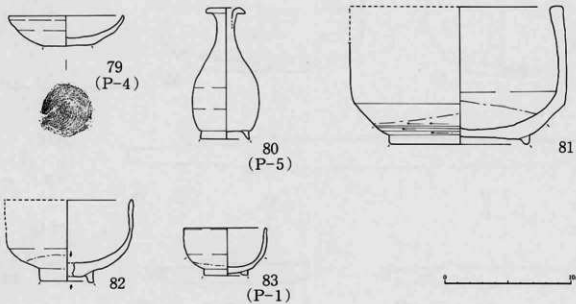
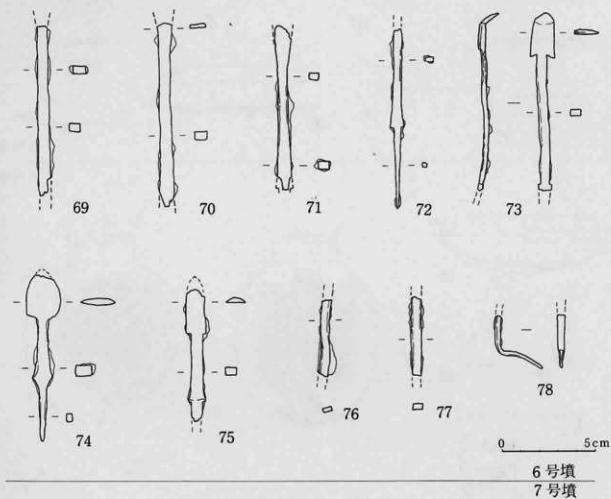
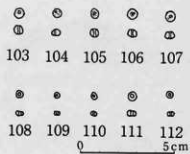
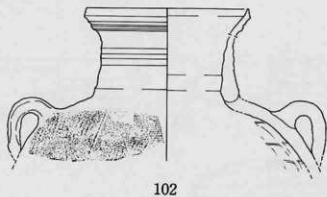
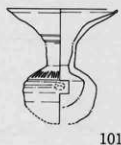
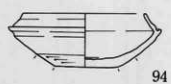
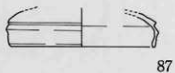
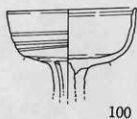
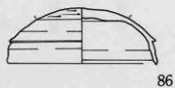
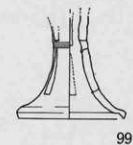
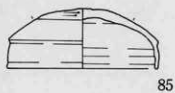
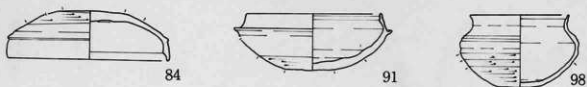


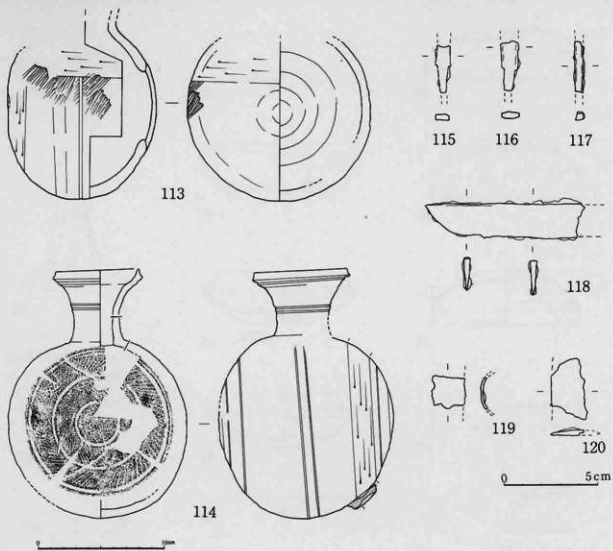
图40 6·7号墳出土遺物



0 10cm

图41 8号墳出土遺物





8号墳

9号墳

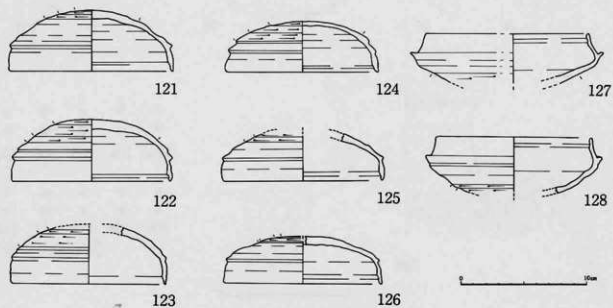


图42 8·9号墳出土遺物

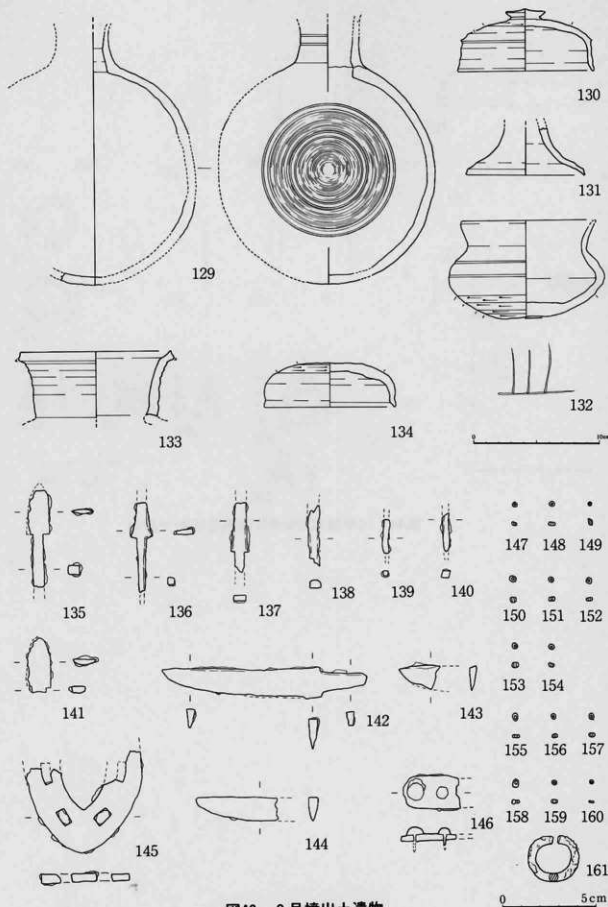


图43 9号填出土遗物

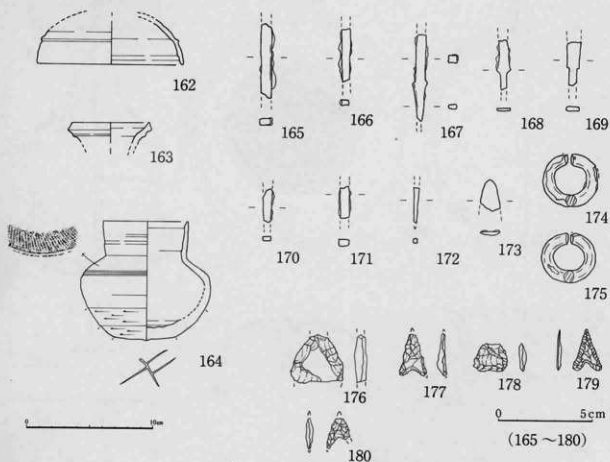


図44 10号墳及び5・8号墳調査区出土遺物

表1 出土遺物観察表(1)

単位cm、復原値含む、( )数値は現存値

遺物 番号	神国 番号	図版 番号	古墳名	出土位置	遺物名称	法 量			成・整形、調整	色 調	焼 成	図化部 残存率	特 記 事 項
						口 径	器 高	そ の 他					
1	37	4	5号墳	玄室床	須・坏蓋	14.7	4.5	立上り2.1	右回転ケズリ	灰	良	80	
2	〃	〃	〃	〃	〃・坏身	13.3	4.7	〃 1.3	〃	〃	〃	100	
3	〃	〃	〃	〃	〃・坏蓋	12.2	4.3	〃 1.9	〃	濃 灰	〃	〃	
4	〃	〃	〃	〃	〃・〃	12.5	4.5	〃 2.2	〃	灰	〃	〃	
5	〃	〃	〃	〃	〃・〃	12.5	4.1	〃 2.1	〃	濃 灰	〃	〃	
6	〃	〃	〃	〃	〃・〃	13.0	4.3	〃 1.9	〃	〃	〃	〃	
7	〃	5	〃	〃	〃・〃	13.0	4.1	〃 1.9	〃	〃	〃	〃	
8	〃	〃	〃	〃	〃・〃	13.0	4.3	〃 1.9	左右回転ケズリ	灰	〃	〃	
9	〃	〃	〃	〃	〃・〃	12.5	4.8	〃 2.3	右回転ケズリ	〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃	〃	〃・〃	13.2	4.3	〃 1.6	左右回転ケズリ	濃 灰	〃	〃	
11	〃	〃	〃	〃	〃・〃	12.3	4.3	〃 1.8	左回転ケズリ	灰	〃	〃	
12	〃	〃	〃	〃	〃・坏身	11.9	4.6	〃 1.5	左右回転ケズリ	〃	〃	〃	
13	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.3	4.7	〃 1.3	右回転ケズリ	〃	〃	〃	
14	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.7	4.7	〃 1.3	〃	黒 灰	〃	〃	
15	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.4	4.4	〃 1.3	〃	濃 灰	〃	〃	
16	〃	〃	〃	〃	〃・〃	10.4	4.8	〃 1.5	〃	〃	〃	〃	
17	〃	6	〃	〃	〃・〃	11.7	4.6	〃 1.1	左回転ケズリ	〃	〃	〃	
18	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.3	4.6	〃 1.1	右回転ケズリ	黒 灰	〃	〃	
19	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.3	4.5	〃 1.2	左回転ケズリ	灰	〃	〃	
20	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.7	4.7	〃 1.4	〃	濃 灰	〃	〃	
21	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.2	4.7	〃 1.3	右回転ケズリ	〃	〃	〃	
22	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.2	4.6	〃 1.6	〃	灰	〃	〃	
23	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.4	4.7	〃 1.6	〃	〃	〃	〃	
24	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.8	4.9	〃 1.5	〃	濃 灰	〃	〃	
25	〃	〃	〃	〃	〃・〃	11.2	5.0	〃 1.1	左回転ケズリ	灰	〃	〃	
26	38	〃	〃	〃	〃・高環	8.8	10.0	底径 6.9	右回転ケズリ	黒 灰	〃	95	1段3方透
27	〃	7	〃	〃	〃・〃	17.5	15.8	〃 11.5	回転ケズリ	灰	良	〃	自然蝕、2段3方透
28	〃	〃	〃	〃	〃・〃	10.8	11.2	〃 10.2	右回転ケズリ	黒 灰	良	100	無透
29	〃	〃	〃	〃	〃・短頸甕	8.8	9.7	〃 4.5	左回転ケズリ、凹縁2本	〃	良	良	トビカソノ篇文
30	〃	〃	〃	〃	〃・〃	9.0	10.8	〃 4.0	右回転ケズリ、〃	〃	〃	〃	へう記号
31	〃	〃	〃	〃	〃・〃	9.8	9.0	〃 4.7	〃	〃	〃	〃	〃、自然蝕
32	〃	〃	〃	玄室埋土	山・陶	14.2	5.5	高台径4.9	回転糸切底、内面ナデ	灰	良	95	
33	〃	8	〃	〃	〃・〃	14.5	5.8	〃 5.6	〃	乳 白	不良	80	
34	〃	〃	〃	〃	〃・〃	14.5	5.7	〃 5.7	〃	淡 黄	〃	〃	高台内面目状圧痕
35	〃	〃	〃	〃	〃・〃	14.4	5.7	〃 5.4	〃	〃	〃	95	
36	〃	〃	〃	〃	〃・小皿	7.6	1.2	底径 4.6	〃	乳 白	良	100	外面底面目状圧痕
37	〃	〃	〃	玄室床	鉄 線			長(12.9)、幅1.1	細身、柳葉形、両刃				刃部断面凸レンズ形
38	〃	〃	〃	〃	〃			〃(3.5)	〃				
39	〃	〃	〃	〃	〃			〃(13.3)、幅1.3	細身、柳葉形、両刃				刃部断面凸レンズ形
40	〃	〃	〃	〃	〃			〃(7.1)	〃				
41	〃	〃	〃	〃	〃			〃(5.7)	〃				
42	〃	〃	〃	〃	〃			〃(11.2)、幅2.3	広身、柳葉形、両刃				薄身、圓有
43	〃	〃	〃	〃	〃			〃(6.1)	〃				
44	〃	〃	〃	〃	〃			〃(5.5)、幅1.1	細身、柳葉形、両刃				刃部断面半月形、圓有
45	〃	〃	〃	〃	刀 子			〃(3.4)	〃				
46	〃	〃	〃	〃	〃			〃(7.7)	〃				柄に木質痕
47	〃	〃	〃	〃	〃			〃(5.2)、幅1.7	〃				
48	〃	〃	〃	〃	〃			〃(8.5)、1.3	小形				定形
49	〃	〃	〃	〃	貴 金 具			〃(3.2)	〃				直刀形品
50	〃	〃	〃	〃	新 状			〃(1.3)	〃				
51	39	〃	〃	〃	紙 付 板			〃(4.5)、幅2.4	広身				紙2列、縁か磨ろくの金具
52	〃	〃	〃	〃	〃			〃(2.9)、幅2.3	〃				〃
53	〃	〃	〃	〃	〃			〃(2.3)、〃(2.1)	〃				
54	〃	〃	〃	〃	〃			〃(2.2)、〃(2.3)	〃				
55	〃	〃	〃	〃	板 状			〃(3.2)、〃1.1	細身				
56	〃	〃	〃	〃	〃			〃(2.5)、〃1.2	〃				
57	〃	〃	〃	〃	紙 付 板			〃(7.2)、〃1.0	〃				紙1列
58	〃	〃	6号墳	石室前庭	須・坏身	10.8	4.4	立上り1.2	右回転ケズリ	灰 褐	良	15	反転
59	〃	〃	〃	〃	〃・坏蓋			〃 1.2	〃	黒 灰	〃	〃	
60	〃	〃	〃	〃	東 櫃			〃 1.4	〃	灰	〃	〃	

表2 出土遺物観察表(2)

単位cm、復原値含む、( ) 数値は現存値

遺物番号	坪面番号	図版番号	古墳名	出土位置	遺物名称	法 量			成・整形、調整	色 調	焼 成	図化部 或存部	特 記 事 項		
						口 径	器 高	そ の 他							
61	39	12	6号墳	玄室床	須・提 瓶			16.3	7.1	胴径13.1	口クロ円心カキメ	灰 良	95	ヘラ記号、把手なし	
62	〃	〃	〃	〃	〃・土 埴			16.3	7.1		右回転ケズリ	濃 灰 良	100	大形	
63	〃	〃	〃	〃	〃・直口壺			9.6	14.6	胴径12.7	部分的にハケメ、ナデ	黄 土 〃	95	粘土凝積上	
64	〃	13	〃	〃	刀 子					長24.2、幅1.9				兎形	
65	〃	〃	〃	〃	〃					〃10.6、〃1.5				柄に木質痕	
66	〃	〃	〃	〃	〃					〃(8.5)				〃	
67	〃	〃	〃	〃	耳 環					外径2.7、内径1.8	中実の銅芯に銀箔張				
68	〃	〃	〃	〃	〃					〃2.7、〃1.9	〃				
69	40	〃	〃	〃	鉄 鎌					長(8.9)	細身、柳葉形、圓なしか				
70	〃	〃	〃	〃	〃					〃(9.6)	〃				
71	〃	〃	〃	〃	〃					〃(8.6)	〃				
72	〃	〃	〃	〃	〃					〃(9.5)	〃				
73	〃	〃	〃	〃	〃					〃(9.4)、幅1.3	細身、柳葉形、圓有			意匠の曲げか	
74	〃	〃	〃	〃	〃					〃(8.7)、〃1.8	短頸、圓有			刃部断面凸レツク形	
75	〃	〃	〃	〃	〃					〃(6.9)、〃1.1	短頸、細身、柳葉形			圓有、刃部断面半月形	
76	〃	〃	〃	〃	〃					〃(4.1)	〃				
77	〃	〃	〃	〃	〃					〃(4.2)	〃				
78	〃	〃	〃	〃	〃					〃(3.7)	〃			意匠の曲げか	
79	〃	15	7号墳	P-4底	山・小 皿			9.2	2.4	底径4.0	回転糸切底	淡 黄 良	100		
80	〃	〃	〃	P-5	小 瓶			3.1	10.5	高台径3.8	灰物	灰 〃	〃		
81	〃	〃	〃	墳 丘	鉢			復16.7	11.0	〃 11.1	鉄胎	褐 〃	70		
82	〃	〃	〃	〃	〃			〃10.2	6.5	〃 4.2	白物	乳 白 〃	50	意匠の穿孔、一帯反転	
83	〃	〃	〃	P-1底	小 瓶			6.7	3.8	〃 3.4	〃	〃	〃	100	
84	41	20	8号墳	北 裾	須・坏 蓋			復12.8	3.8	立上り1.7	右回転ケズリ	濃 灰 甘	60	反転	
85	〃	〃	〃	入口左	〃・〃			11.8	4.7	〃 2.2	〃	灰 〃	100		
86	〃	〃	〃	前庭床	〃・〃			11.8	4.4	〃 1.8	〃	〃	〃	70	
87	〃	〃	〃	西 裾	〃・〃			復11.3		〃 1.9	〃	黒 灰 良	30	降灰、反転	
88	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃 1.6	右回転ケズリ	〃	〃	〃	
89	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃 1.6	〃	セピア	〃	〃	
90	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃 1.8	右回転ケズリ	濃 灰	〃	降灰	
91	〃	20	〃	北 裾	〃・坏 身			復10.8	4.5	〃 1.1	〃	〃	甘	60	一部反転
92	〃	21	〃	正面裾	〃・〃			〃11.3	4.7	〃 1.1	〃	〃	〃	〃	反転
93	〃	〃	〃	玄室床	〃・〃			10.1	4.0	〃 1.1	左回転ケズリ	灰 良	80	ヘラ記号	
94	〃	〃	〃	入口左	〃・〃			9.8	4.2	〃 1.1	右回転ケズリ	濃 灰 褐	〃	100	
95	〃	〃	〃	西 裾	〃・〃			復10.8		〃 1.0	〃	灰 〃	40	反転	
96	〃	〃	〃	南西裾	〃・〃			〃8.7	3.6	〃 0.9	右回転ケズリ	黒 灰 良	〃	〃	
97	〃	〃	〃	北 裾	〃・〃					〃 1.5	〃	灰 甘	〃	〃	
98	〃	21	〃	前庭部	〃・短頸壺			7.8	5.7	底径3.4	左回転ケズリ	黒 灰 良	100		
99	〃	〃	〃	西 裾	〃・高 坏			(8.1)	〃8.5	長脚2段3方透	灰 〃	〃	〃	自然蝕	
100	〃	〃	〃	前庭部	〃・〃			10.4	(7.5)	〃ケズリ	〃	良	80		
101	〃	21	〃	南西裾	〃・〃			復8.7	推9.0	胴径5.8	ヘラ描文	〃	〃	70	一部反転
102	〃	〃	〃	北東床	〃・提 瓶			推12.8			取耳把手、口クロカキメ	〃	〃	30	反転、片面扁平、自然蝕
103	〃	21	〃	玄室床	土・丸 玉					径5.0、長0.4	土製、ミガキ	黒 〃	100		
104	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.45、〃0.35	〃	〃	〃	〃	
105	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.5、〃0.4	〃	〃	〃	〃	
106	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.5、〃0.4	〃	〃	〃	〃	
107	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.5、〃0.35	〃	〃	〃	〃	
108	〃	〃	〃	〃	ガ・小 玉					〃0.35、〃0.25	ガラス製、ミガキ	緑 〃	〃	〃	管状を切断
109	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.3、〃0.2	〃	〃	〃	〃	
110	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.3、〃0.25	〃	〃	〃	〃	
111	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.45、〃0.25	〃	緑	〃	〃	
112	〃	〃	〃	〃	〃・〃					〃0.35、〃0.2	〃	緑	〃	〃	
113	42	〃	〃	前庭部	須・提 瓶					胴径14.5、厚11.8	合体前縁にケズリ、タタキ	灰 良	良	80	自然蝕、無把手
114	〃	21	〃	玄室床	〃・細頸瓶			6.5	19.7	〃14.0	3本の同心部線内に刺穴文	〃	良	90	〃
115	〃	22	〃	〃	鉄 鎌					長(2.5)	圓有				
116	〃	〃	〃	〃	〃					〃(2.6)	〃				
117	〃	〃	〃	〃	〃					〃(2.7)	〃				
118	〃	〃	〃	墳丘東	刀 子					〃(8.3)、幅1.9	〃				
119	〃	〃	〃	玄室床	貴 金 具					〃(1.8)	〃				
120	〃	〃	〃	〃	鉄 鎌					〃(3.2)	〃				

表3 出土遺物観察表(3)

単位cm、復原値含む、( ) 数値は現存値

遺物 番号	埋戻 番号	図版 番号	古墳名	出土位置	遺物名称	法 量			成・整形、調整	色 調	焼 成	復原 率	特 記 事 項
						口 径	器 高	そ の 他					
121	42	25	9号墳	羨道敷土	須・坏蓋	13.2	4.8	立上り2.0	左回転ケズリ	濃 灰	甘	80	
122	〃	〃	〃	玄室床	須・坏蓋	12.6	4.9	〃 1.9	右回転ケズリ	〃	〃	70	
123	〃	〃	〃	〃	須・坏蓋	復12.4	推4.8	〃 2.1	左回転ケズリ	灰	〃	40	反転
124	〃	26	〃	〃	須・坏蓋	〃	〃	〃 1.7	右回転ケズリ	〃	良良	70	
125	〃	〃	〃	〃	須・坏蓋	推12.9	〃	〃 1.8	左回転ケズリ	濃 灰	〃	20	反転
126	〃	〃	〃	玄室	須・坏蓋	〃	12.6	3.8	〃 1.8	〃	〃	30	〃
127	〃	〃	〃	〃	須・坏蓋	〃	〃	〃 1.5	〃	灰 褐	良	〃	〃
128	〃	〃	〃	羨道敷土	須・坏蓋	復12.3	〃	〃 1.6	〃	灰 甘	〃	20	〃
129	43	26	〃	玄室床	須・提瓶	(20.5)	網径復17.2		ロクロカキメ、タタキ	〃	良良	70	自然釉、無把手
130	〃	〃	〃	〃	須・密蓋	復10.7	4.9	立上り2.4	右回転ケズリ、ツマミ	濃 灰	〃	40	一部反転
131	〃	〃	〃	東 側	須・高坏	〃	〃	底径復9.5	〃	灰	良	30	反転
132	〃	26	〃	羨道敷土	須・短頸壺	復10.6	7.7	〃 4.0	右回転ケズリ	〃	良良	90	自然釉、へう記号
133	〃	〃	〃	羨道	須・横瓶	〃	〃	〃 12.4	〃	濃 灰	良	40	〃
134	〃	〃	〃	玄室	須・密蓋	〃	〃	〃 11.5	右回転ケズリ	灰	良良	50	反転
135	〃	26	〃	玄室床	鉄 線	〃	〃	長(5.1)	細身、柳葉形、開有	〃	〃	〃	万部断面凸レンズ形
136	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (4.8)	〃	〃	〃	〃	〃
137	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (3.2)	〃	〃	〃	〃	〃
138	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (3.2)	〃	〃	〃	〃	〃
139	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (1.8)	〃	〃	〃	〃	〃
140	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (2.1)	〃	〃	〃	〃	〃
141	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (2.9)	細身、柳葉形、開有	〃	〃	〃	万部断面半月形
142	〃	〃	〃	〃	刀 子	〃	〃	〃 10.8	〃	〃	〃	〃	ほぼ完形
143	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (2.2)	〃	〃	〃	〃	〃
144	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 (4.4)	〃	〃	〃	〃	〃
145	〃	〃	〃	玄室	刀 鉤	〃	〃	〃 (5.4)、厚0.5	長方形通し窓付	〃	〃	〃	〃
146	〃	〃	〃	玄室床	銅 付 板	〃	〃	〃 (3.0)	〃	〃	〃	〃	〃
147	〃	〃	〃	〃	ガ・小玉	〃	〃	径0.25、長0.2	ガラス製、ミガキ	薄 緑	〃	〃	管状を切断
148	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.3、〃 0.2	〃	〃	〃	〃	〃
149	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.2、〃 0.35	〃	〃	〃	〃	〃
150	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.3、〃 0.3	〃	〃	〃	〃	〃
151	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.25、〃 0.2	〃	〃	黄 緑	〃	〃
152	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.3、〃 0.2	〃	〃	薄 緑	〃	〃
153	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.3、〃 0.25	〃	〃	〃	〃	〃
154	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.3、〃 0.2	〃	〃	〃	〃	〃
155	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.4、〃 0.2	〃	〃	青	〃	〃
156	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.25、〃 0.2	〃	〃	薄 緑	〃	〃
157	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.3、〃 0.2	〃	〃	〃	〃	〃
158	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.4、〃 0.2	〃	〃	青	〃	〃
159	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.25、〃 0.2	〃	〃	薄 緑	〃	〃
160	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 0.2、〃 0.15	〃	〃	〃	〃	〃
161	〃	〃	〃	〃	耳 環	〃	〃	外径2.7、内径1.9	中実の銅芯に銀箔張	〃	〃	〃	銀箔張後金メッキ、薄身
162	44	10号墳	〃	須・坏蓋	〃	11.8	〃	立上り1.9	〃	黒 灰	甘	60	〃
163	〃	〃	〃	〃	須・短頸壺	6.2	〃	〃	〃	灰	良	50	黒灰
164	〃	31	〃	〃	須・短頸壺	6.8	9.3	底径4.5	右回転ケズリ	黒 灰	良良	100	ロクロ引かトビカンナ
165	〃	〃	〃	〃	鉄 線	〃	〃	長(3.9)	〃	〃	〃	〃	〃
166	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(2.8)	〃	〃	〃	〃	〃
167	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(4.5)	〃	〃	〃	〃	〃
168	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(2.6)	〃	〃	〃	〃	〃
169	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(2.3)	〃	〃	〃	〃	〃
170	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(1.8)	〃	〃	〃	〃	〃
171	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(1.7)	〃	〃	〃	〃	〃
172	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(1.8)	〃	〃	〃	〃	〃
173	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	長(1.7)	柳葉形	〃	〃	〃	〃
174	〃	〃	〃	〃	耳 環	〃	〃	外径2.3、内径1.7	中実の銅芯に銀箔張	〃	〃	〃	銀箔張後金メッキ
175	〃	〃	〃	羨道	石 匙	〃	〃	〃 2.3、〃 1.7	〃	〃	〃	〃	〃
176	〃	〃	5号墳区	調査区	石 匙	〃	〃	長(2.4)、幅(2.9)	〃	〃	青 灰	〃	チャート
177	〃	〃	〃	〃	石 線	〃	〃	〃 (2.2)、〃 (1.4)	凹基	〃	〃	〃	下呂石
178	〃	〃	〃	〃	石 線 ?	〃	〃	〃 1.5、〃 1.8	〃	〃	暗 黄 土	〃	チャート
179	〃	〃	〃	〃	石 線	〃	〃	〃 2.2、〃 1.5	凹基	〃	〃	〃	オスカイト
180	〃	〃	8号墳区	〃	〃	〃	〃	〃 (1.5)、〃 (1.3)	〃	〃	黒	〃	チャート

## 第9章 まとめと考察

### 第1節 築造の時期と追葬について (図45)

6基の古墳の調査を実施したが、出土した須恵器から得られた築造・初葬の時期と、追葬に関わる情報を、図45にまとめた。これによれば、5号墳は東山61号窯期後半に築造され、埋葬回数は5回程度、6号墳と8号墳は少なくとも東山44号窯期には築造され、埋葬回数は2回以上、9号墳は東山61号窯期後半に築造され、埋葬回数は4回程度、10号墳は少なくとも東山44号窯期には築造されていた。

5号墳の初葬時の副葬須恵器(坏類)と9号墳の同品を比較した場合、前者の方が古相を示す。築造順序は、5号墳→9号墳→6・8・10号墳の順であることが推定できよう。石室内の乱掘による持ち出しが予想以上であったため、全ての古墳の築造時期を確定することはできなかったが、その他の状況証拠と石室の型式的変化から、更に推定を深めることは可能である。

何れにしても、可見地域の他の地区(古墳群)と、ほぼ時を同じくして群集墳の造営が開始されていることが明白となった。

図45 大森新田古墳群の造営時期

○印は埋葬の可能性

渡辺編年	尾張2型式	尾張3型式	尾張4型式	尾張5型式	尾張6型式	尾張7型式	
斎藤編年	H-61		(+)	H-44		H-50	
暦年代の目安	600年						
大森新田5号墳	○		○	○	○	○	
" 6号墳				---	○	○	---
" 7号墳					○	○	---
" 8号墳				---	○	○	---
" 9号墳	○	○	○		○		---
" 10号墳				---	○		---

### 第2節 石室構造について (図46)

これまでに、ある程度まとまった数の古墳が調査されている古墳群を、可見地域内からピックアップし、その群内での石室の変遷案を図46にまとめた。可見地域における石室形態の変遷は、各地区(各古墳群)単位で特色があり、地域をひとまとめにしてたどっていくには無理があるため、大森新田古墳群との比較も兼ねてここに示した。

#### (1) 羽崎古墳群

羽崎古墳群は、円墳と横穴墓が混在した40基程度の古墳群である。丘陵の尾根から裾にかけて分布し、これまでに、後期の円墳7基と横穴墓5基が調査されている。横穴墓とともに、石棺製作工人集団の本拠地として考え得る地区である。

古墳群形成の始めに位置づけられるのが、羽崎大洞3号墳である。竪穴系横口式類似石室(以下、竪穴系類似石室と呼ぶ)を主体部とする。玄門部の閉塞石の下には、竪穴系に

伴う敷石が配されており、短い羨道と、玄室の側壁よりも一段上がる羨道の側壁の状況、旧表土層の掘り残し状況、胴張を持たない長方形プランからみても、大森新田5号墳と類似した状況を示す。玄室に向かって若干の左片袖式を採り、群中ただ一つ特異な方位（ほぼ真西に開口）を向く。玄室の左半分は、基底石を表している。

時期的にこれに続くと考えられるのが、羽崎寺洞2号墳と羽崎大洞1号墳である。寺洞2号墳は無袖式の石室を有し、大洞1号墳の石室は明瞭な右片袖式を採る。何れも胴張を有し、大洞3号墳にみる石室の形態とは、どちらも直接結びつくものではないが、竪穴系類似石室は、東山61号窯期の群集墳初現期にみられるのみである。

その後、大洞1号墳の片袖式形態は、羽崎大洞白山塚古墳へと継承される。羽崎寺洞2号墳の無袖形態は、東山50号窯期併行の羽崎大洞4号墳へ繋がる可能性と、大洞白山塚古墳の簡略化も合わせての推移とみる考え方の、2案が提起できよう。

## (2) 川合古墳群

川合古墳群は、木曾川の低位段丘面に展開した、30基以上で構成される後期古墳群である。木曾川中流域特有の、川原石積みの横穴式石室を特色とし、造墓職人集団の本拠とみなし得る地区でもある。これまでに、可見地域の首長墳・次郎兵衛塚1号墳を含む20基が発掘調査されている。東山61号窯期以前の古墳も4基が調査されているが、主体部は不明であるため、ここに掲げることはできない。

葺石も含め、川原石で構築された横穴式石室は、他の丘陵部の古墳群（地区）と様相を異にする。玄室が単室構造のものと複室構造のものが共存し、その採否には、墳丘規模と副葬品も合わせて、階層性が見い出されている。ここでは複室構造のものを示す。

東山44号窯期の川合稲荷塚1号墳は、胴張形態で楕円形の隅丸プランと樽形の立面形をなし、前室と後室の玄門はともに擬似両袖的である。複室を採るものは、玄室と羨道、前庭部の区別が明瞭で、前庭部は大きく開き、後室がやや長い。玄門部に掘石を置くものの、内外の床面はフラットであるが、次郎兵衛塚1号墳では、30cm程玄室床面が下る。

これに続く東山50号窯期の次郎兵衛塚5号墳では、石室の造りはそのまま継承されるが、後室重視が際立ち、前室に比べより長くなる。羨道と前庭部の形態は数種類あるが、次郎兵衛塚5号墳では、3室かと間違えようような形態を採っている。前時期から直接繋がるものであろう。

## (3) 大森新田古墳群

12基を数える本古墳群の横穴式石室は、各章でみてきたようにチャートを主体とする山石で構築されている。丘陵上に選地し、以下の変遷を推定する。

5号墳と9号墳は、ともに東山61号窯期後半の築造であったが、須恵器環類はやや前者が古相を示す。羽崎古墳群同様に、本群の古墳築造の初現は、5号墳の竪穴系類似石室をもつてみることができよう。閉塞石下の竪穴系に伴う敷石の状況や、短い羨道側壁の状況、羨道部の地山掘り残しの状況、胴張を持たない長方形プランの玄室は、羽崎大洞3号墳と同じであった。ただ5号墳では、片袖の方向が大洞3号墳とは逆で、奥壁に向かって右側に採っていた。濃尾地方の横穴式石室の初現・竪穴系類似石室では、この5号墳の形態が多いようである。

5号墳にみる竪穴系類似石室は、その後この群（地区）でも継承されないようで、この直後、9号墳の両袖式の採用をみる。9号墳は、今回調査された4基の両袖式の横穴式石



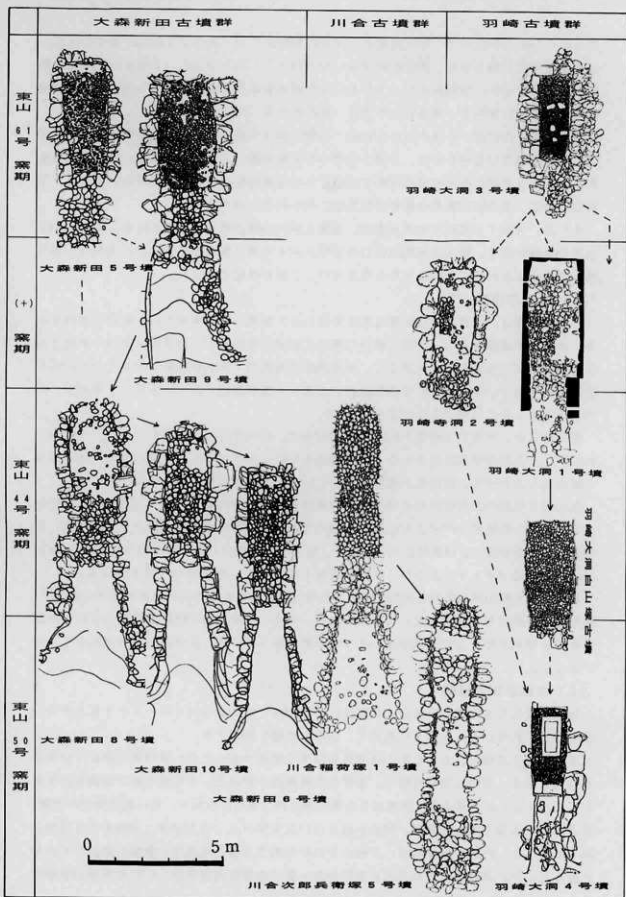


図46 横穴式石室の変遷

室墳の中では、明らかに他に先行するもので、胴張の玄室に羨道と前庭部を接続する。玄門は立柱石によって明示され、右35cm・左50cm張出している。前庭部の葺石風の側壁は、そのまま前面の葺石へと繋がっている。石室入口から奥壁までの、全長に占める玄室の長さの割合は、37.5%である。

9号墳の石室は、8号・10号・6号墳へと受け継がれる。3基共に東山44号窯期を下るものではない、とみたので、築造時期の大きな隔たりはないが、何れも胴張の玄室に、両袖を採る玄門立柱石を有する。以下、それぞれの要素を比較してみたい。

①8号墳は、右28cm・左22cm、10号墳は、右22cm・左18cm、6号墳は、右14cm・左12cm、それぞれ玄門部が張出している。②8号墳は、石室前面の3段の葺石へと連結しているが、10号墳と6号墳は葺石を持たず、共に前庭部の側壁が省略されたり、簡略化されたりしている。③石室入口から奥壁までの、全長に占める玄室の長さの割合は、8号墳32.1%、10号墳34.3%、6号墳33.7%である。

①の玄門部の要素は、例えば単独で6号墳をみた場合、両袖式と判断するには多少の戸惑いをみる程で、9号墳からの流れでみれば、石室の型式として9号→8号→10号→6号墳へと、両袖式の簡略化傾向がはっきりと見て取れる。②の葺石の要素は、5号墳からの流れでみれば、5号→9号→8号→10号・6号墳へとやはり葺石と前庭部の簡略化、省略化傾向が窺える。③の要素には、9号墳の割合と比較して、玄室の小型化が現れている。

このように見てきた時、須恵器以外の要素も含めると、東山44号窯期の中で8号→10号→6号墳の順で築造されていったことが推定できよう。

また、この順に当てはめてそれぞれの立地状況(図1)を観ると、本調査範囲では、5号墳の単独的立地は初現であることを意味し、その後、北西から南東へ向かって順に築かれていったことが理解できよう。

その他、本古墳群では、他の群(地区)とは違った主軸方位を示すことが特徴的であり、5号墳がほぼ南に開口する以外は、大きく西方向へ向けて開口するといった要素がある。また、玄室、羨道、前庭部の区別がみとれるなど、簡略化傾向の中においてもルールを守った構造が継承されている。市内において両袖式を採用するのは、本古墳群のみである。

### 第3節 墳丘構造について

本古墳群では、群集墳の初現である5号墳に、墳丘全体を覆う1段積みの葺石がみられた。その直後の9号墳では、石室(墳丘)正面部分にのみ葺石がみられ、8号に至ると、正面部分は3段の葺石を施すものの、これは見かけ倒しであった。即ち側面部分では、上段の葺石はかろうじて連続するものの、中段の葺石は姿を消し、下段の葺石は石列をなすだけの根巻石状態となる。裏側部分では、この根巻石をもなくなっている。正面3段、側面2段といった変則的な構造で、簡略化・手抜き感は否めず、以後の古墳では葺石は省かれることとなる。

川原石を使う川合古墳群ではどうか。川合古墳群の初現に位置付けられる川合宮之脇1号墳は、基底部の残存だけではあるが、方墳の全周を葺石が取り巻いていた。川合稲荷塚1号墳では、全周3段の見事な葺石がみられ、同2号墳では全周2段の葺石が見事であった。また、地域の首長墳次郎兵衛塚1号墳では、無論のこと堅固な2段の葺石をみた。

これら川合古墳群における評価は、次郎兵衛塚1号墳を地域の首長層に、稲荷塚1・2

号墳をその下位の川合地区の長に、それぞれ位置づけ、葺石は階層に係わる属性の一つであると推定した。その他の、有力家父長世帯層や一般家父長世帯層の墓と目される古墳には葺石は認められなかった。

当大森新田古墳群をみた場合、川合地区にみるような古墳の規模の優秀や、石室構造にみる明確な優劣は認められず、葺石の有無もこれらに同調する傾向にはない。同様の規模や石室構造、葺石の有無は、今までみてきたように、やはり時期差を内包するものとして考えたほうが自然であろう。

また、当8号墳の上段葺石にみられたような葺石下部の埋め殺しは、川合稲荷塚1・2号墳においても顕著にみられた構築技法であり、より堅固な墳丘とするためなのであろう。更に、同古墳の8列西トレンチ内で確認された、根巻石から続く下段の敷石と、8列東トレンチ内で確認された上段葺石から続く敷石は、盛土中に完全に埋め殺されている。まばらに混入させた礫群などとは違い、意図的な配石であることは疑問の余地もなく、盛土作業の手順に係わる土止めの役割や、盛土の崩れを防ぐ基礎的な役割を考えている。

#### 第4節 副葬品について

副葬品の配置で問題とするのは、10号墳出土の須恵器・短頸壺である。奥壁の右角に礫で意図的に囲い、配されていたもので、その位置は東山61号窯期の市内広見中川寺1号墳や(十)窯期の羽崎大洞1号墳に類例をみる。

濃尾平野とりわけ東濃地方では、東山61号窯期以降、奥壁の右または左の角に土師器の小型甕が配される例が多く目につく。市内川合稲荷塚1・2号墳は東山44号窯期の例、川合次郎兵衛塚5号墳や広見熊野古墳は東山50号窯期の例で、何れも奥壁の右角部分に配されていた。副葬品の器として供えられる須恵器群の中において、これらは土師器であることに意味があるようである。

前段の短頸壺は、同様の位置に配されてはいるが須恵器であり、その代用品もしくは真意の退化を示すものなのであろうか。

判別のつく須恵器の坯類をみる限り、東山50号窯期まではその悉くが尾張系のものであった。可見地域一円においては、畿内系の須恵器・坯類はほとんど見当たらず、尾張系一色であり、木曾川右岸とは状況を異にしている。川合古墳群においては、東山50号窯期中に初めて美濃須恵系の品が共伴し、その後割合を増していくようである。

当古墳群においては、6号墳と9号墳、10号墳に耳環（金張または銀張）の副葬がみられた。川合古墳群においては、複室構造の横穴式石室を有する古墳にはほぼ限ってこれがみられたが、大森新田古墳群では、古墳の規模や石室構造に大差がない以上、この事象のみをもって被葬者の階層性を語るのには無理があろう。ただ、玄室・羨道・前庭部と、ルールを守った石室構造は、川合古墳群では複室構造の要素と表裏一体であり、この被葬者像を地区の長（ムラ長世帯層）とみた。

また、玉類の副葬は8号墳と9号墳にみられた。前段同様、そのまま被葬者像と直結できるものではなからう。

#### 第5節 大森新田古墳群の造営集団について

当古墳群の立地条件は、小河川・大森川の上流域左岸の低丘陵上であり、眼下の沖積地

は狭小である。ここを、12基を数える古墳群被葬者の経営基盤とするには、あまりにも無理があろう。大森川は、可見川の支流・久々利川へ合流するまでに、直線距離で約5.5kmを流れる。その中・下流域は、その内約3kmであり、川の両岸に沿って幅300m程度の沖積地が存在する。

大森川の下流域、久々利川との合流点左岸には、大森血屋敷横穴墓群8基が現存するが、川村金之助氏の報文（『美濃可見部の横穴』『東京人類学雑誌』第180号1901、『美濃国可見部平牧村大森ノ横穴』『同』第189号1901）によれば、明治34年の時点で大森川水系に35基の横穴墓があったとされる。これらは中・下流域一帯に及び、一部誤認も含んではいるとしても、かなりの数となろう。中・下流域において現在確認できている高塚古墳は、大森吹ケ洞古墳（切石の横穴式石室を有する円墳）ただ1基のみで、ただただ横穴墓のみが目立っている。

可見地域における横穴墓被葬者の性格については、石棺製作の石工集団と絡めて考え、これまでに半農半工の性格を推定してきた。円墳と横穴墓が最小限墓域を分けつつも、背後の丘陵全体でみれば混在して立地する羽崎古墳群。ここでは、横穴式石室の石材に切石が見られたり、石室内に石棺を置く姿などから、この石工集団が既存の農耕民に受け入れられ、浸透し、共存共栄が図られた集落を推定してきた。

当大森川水系・大森地区においては、前述のように明確に両者の墓域が分けられている。ただ一つ中流域に選地する大森吹ケ洞古墳には、石棺石材同様の切石が用いられていることは、更に示唆的である。上流域の大森新田古墳群においては、石室の石材は全て現地調達山の山石であり、横穴墓の立地条件である平牧層（凝灰質砂岩）の露頭は河床のみであった。おそらく、大森新田古墳群を造営した人々は、盛土による古墳を築きにくい中・下流域を避け、自分たちの経営基盤・集落の近くを逃してでも、横穴式石室墳の造営に拘ったのであろう。

あくまで経営基盤と集落は、横穴墓造営集団と同じ中・下流域。墓域のみが結果として完全に画されることとなった、とみるのが妥当であると考えている。横穴墓造営集団の活躍の舞台が中・下流域の平牧層露頭地帯であり、半農半工の性格を持たせれば、同様に中・下流域を農業の経営基盤としていた大森新田古墳群の被葬者たちとは、排他的な関係ではなかったものと推定する。

当古墳群では、初現の5号墳以外は大きく西方向へ向けて開口するといった、可見地域では怪現象ともみてとれる主軸方位を示していた。これは、この丘陵の登り口方向（墓道）を示しているようで、裾からの傾斜がゆるやかな9号墳の前面がそれなのであろう。村から上流域のこの丘陵を目指し、遠回りせずに登れる所。その墓道の源は集落を示している。

#### 参考文献

- ・可見市教育委員会『羽崎古墳群』1985
- ・可見市教育委員会『川合遺跡群』1994
- ・可見市教育委員会『久々利西山横穴墓』1994
- ・可見市教育委員会『広見中川寺1号墳・中世墓群』1998
- ・可見市教育委員会『可見市市内遺跡発掘調査報告書（平成7～11年度）』2000
- ・拙稿「東濃地方の後期古墳文化の諸問題」『東海の古代』2001
- ・拙稿「東濃地方の横穴墓」『東海の横穴墓』静岡県考古学会シンポジウム2001

写 真 图 版

國 國 國

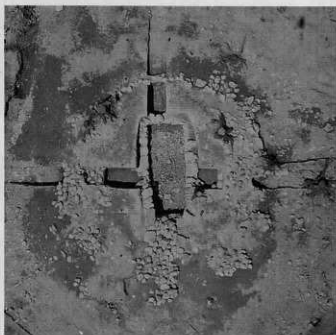
図版1 5号墳



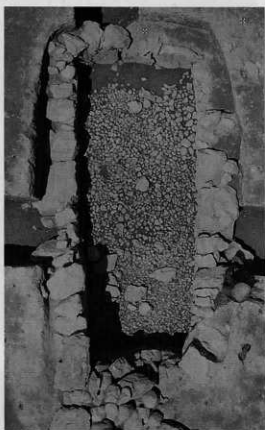
南東からの遠景



北西からの近景



全景 (空中写真)



石室全景 (空中写真)



墳丘東側の葺石



北レンヂ付近の葺石

図版2 5号墳



玄室（奥壁を望む）



玄室（閉塞部を望む）



玄室



玄室



玄室の礎床



図版3 5号墳



閉塞状況（入口から）



閉塞石除去後の羨道床（敷石）



閉塞石除去後の羨道床  
（玄門部から）



敷石除去後の羨道  
（掘り方・地山面）

図版4 5号墳



玄室袖部の副葬品片付け状況



同左



1. 坏蓋



2. 坏身



3. 坏蓋



4. 坏蓋



5. 坏蓋



6. 坏蓋

图版 5 5号墳



7. 杯蓋



8. 杯蓋



9. 杯蓋



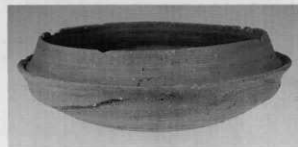
10. 杯蓋



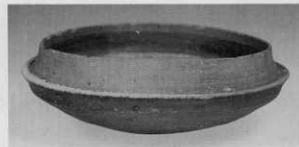
11. 杯蓋



12. 杯身



13. 杯身



14. 杯身

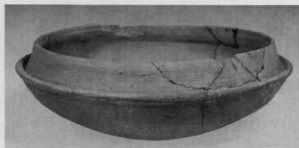


15. 杯身



16. 杯身

图版 6 5号墳



17. 杯身



18. 杯身



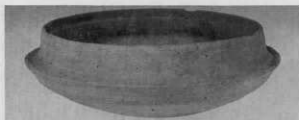
19. 杯身



20. 杯身



21. 杯身



22. 杯身



23. 杯身



24. 杯身



25. 杯身



26. 高杯

图版 7 5号墳



27. 高杯



28. 高杯



29. 短頸壺



30. 短頸壺



31. 短頸壺

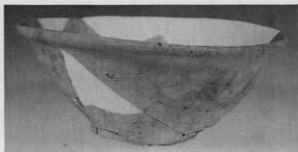


32. 山茶碗

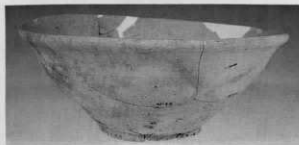
图版 8 5号墳



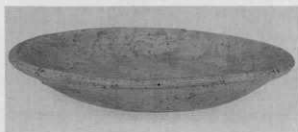
33. 山茶碗



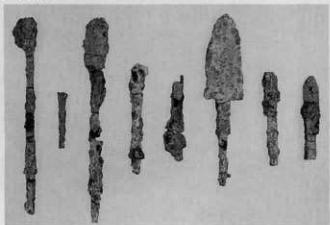
34. 山茶碗



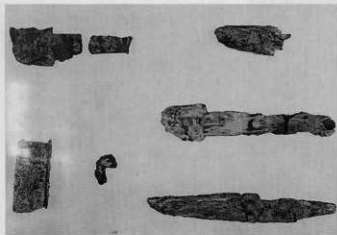
35. 山茶碗



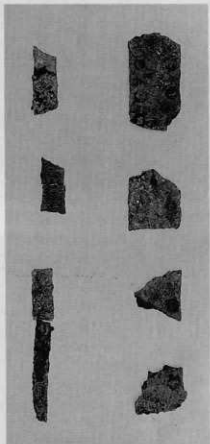
36. 山茶碗 (小皿)



37~44. 鉄鏝



45~50. 刀子他



51~57. 鉄付板・板状鉄器

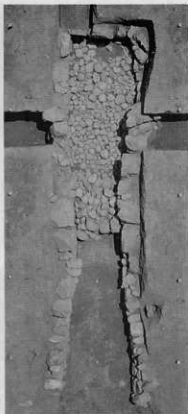
図版9 6号墳



西からの近景



石室正面（西から）



石室全景（空中写真）



空中写真（左7号墳、右6号墳）

図版10 6号墳



石室正面（近景）



閉塞状況（羨道から）



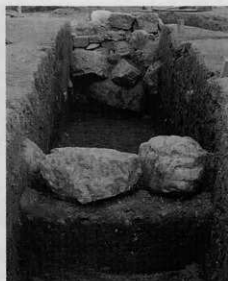
玄室（奥壁を望む）



玄室内副葬品出土状況



図版11 6号墳



南トレンチ内の埋殺しの石列  
玄室（閉塞石を望む）



閉塞状況（玄室から）



礎床アップ

图版12 6号墳



羨道右側壁

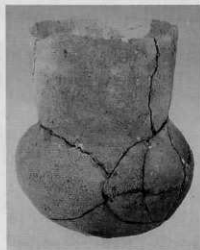


61. 無把手提瓶

玄室左側壁

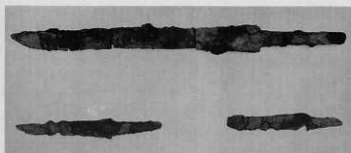


62. 埴



63. 土師器直口壺

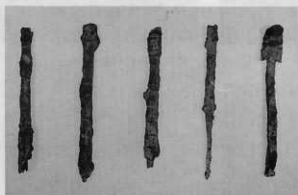
図版13 6号墳・7号墳



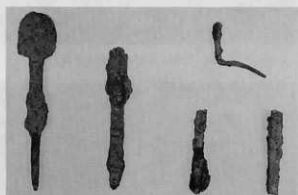
64～66. 刀子



67(左). 68(右)耳環



69～73. 鉄鏝



74～78. 鉄鏝



調査前  
南西からの近景



調査後  
南東からの近景

6号墳

7号墳

図版14 7号墳・土壙墓



石室の残存状況(左側が左側壁と奥壁の角)



墳丘上のP-4



石室の残存状況(手前の石材が右側壁)

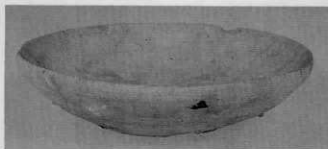


墳丘上のP-5



墳丘断面及びP-3(左)、P-2(右)

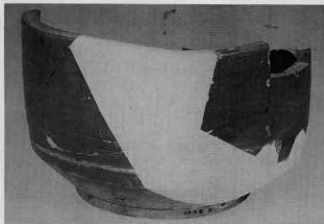
図版15 7号墳上の土墳墓・6～10号墳



79. 山茶碗・小皿(P-4底)



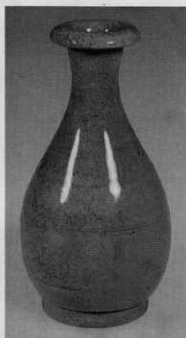
83. 白釉小碗(P-1底)



81. 鉄釉鉢(P-2付近)



82. 白釉碗(P-2付近)



80. 灰釉小瓶(P-5)

空中写真  
上左7号、上右6号、中左8号  
中右10号、下9号の各古墳

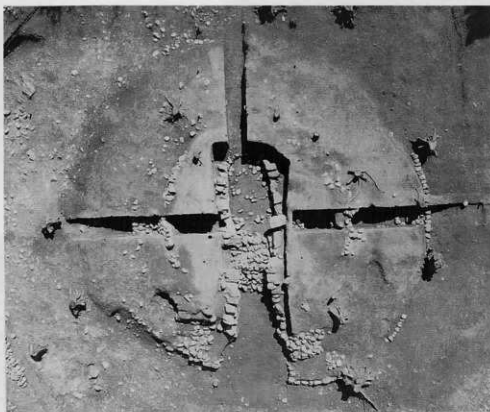
図版16 8号墳



北東からの近景



前庭部左側墳丘出土状況(85. 94)



全景(空中写真)



石室正面より(閉塞石除去前)

図版17 8号墳



玄室(閉塞石を望む)



閉塞状況 (玄室から)



閉塞石除去後の玄門



中軸、奥壁へのトレンチ断面

図版18 8号墳



玄室(右側壁)  
左が奥壁



玄室(左側壁)  
右が奥壁



羨道(右側壁)

8列北東トレンチ  
上段葺石、敷石の埋殺し





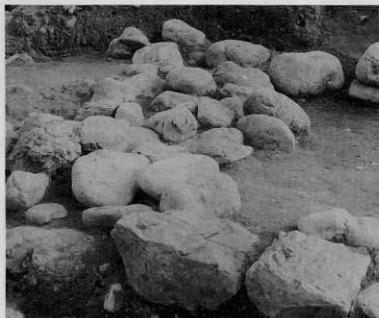
図版19 8号墳



下段葺石・敷石(石室正面左)



下・中段葺石(石室正面右)



下段敷石アップ



中段葺石アップ



羨道左側壁  
(閉塞石を望む)

図版20 8号墳



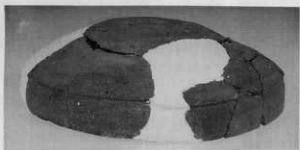
上段葺石(墳丘西)



下段葺石(根巻石)墳端南



下段葺石(根巻石)と埋殺し敷石(南西トレンチ)



84. 杯蓋



85. 杯蓋



86. 杯蓋



91. 杯身

図版21 8号墳



92. 杯身



93. 杯身



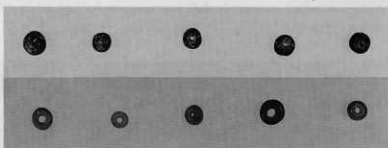
94. 杯身



98. 短頸壺



101. 甌



上103~107. 土製丸玉 下108~112. ガラス小玉

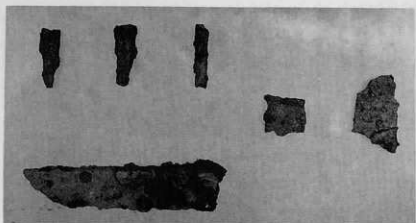


99. 高杯



114. 細頸瓶

図版22 8号墳・9号墳



115~120. 鉄鎌・刀子

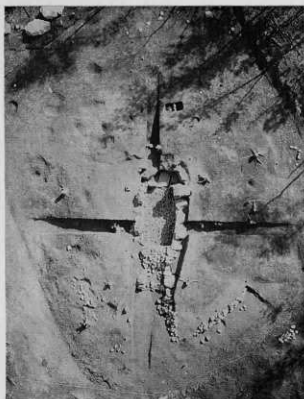
8号墳



石室 (空中写真)



南東からの近景



全景 (空中写真)



石室正面(閉塞石を望む)

9号墳

図版23 9号墳



支室  
(閉塞石を望む)



支室 (奥壁を望む)



閉塞状況(左が支室)



初葬閉塞石の残存面(下が支室)

図版24 9号墳



初葬時の閉塞石残存  
(狭道から奥壁を望む)



右側壁(左が奥壁)



左側壁(右が奥壁)



墳丘前面の葺石  
(左が前庭部へ続く)

図版25 9号墳



礎床(部分)



奥壁部の掘方と攪乱  
(下が女室、倒された  
奥壁の石材が埋まっ  
ている。)



墳丘上南東のカマド

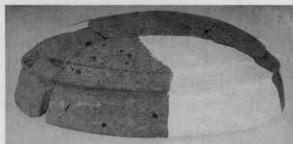


121. 杯蓋



122. 杯蓋

図版26 9号墳



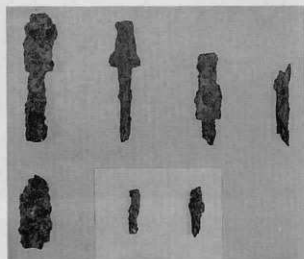
124. 杯蓋



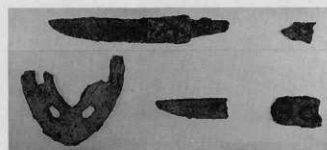
132. 短頸壺



129. 無把手提瓶



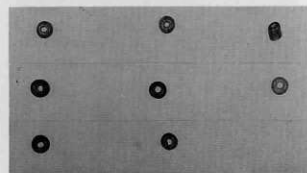
135~141. 鉄鏃



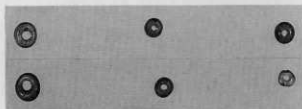
142~146  
刀子、鈎他



161. 耳環



147~154. ガラス小玉



155~160. ガラス小玉



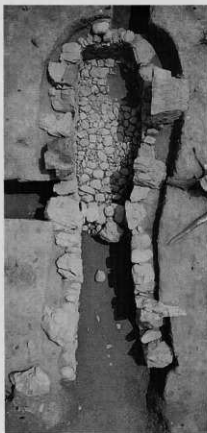
図版27 10号墳



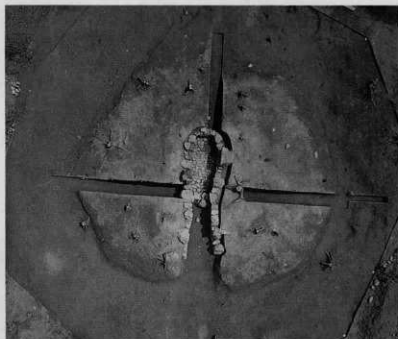
南西からの近景



崩れかけた天井石



石室全景 (空中写真)



全景 (空中写真)



墳丘全景  
(石室正面、西から)

図版28 10号墳



短頸壺出土状況(奥壁右角)  
石室正面(閉塞石を望む)



玄室(奥壁を望む)



閉塞状況(羨道から)



礎床(部分)

図版29 10号墳



玄室左側壁(右が奥壁)



礎床除去後の石室  
(閉塞石は基底石)



玄室右側壁(左が奥壁)



閉塞石の基底石  
(義道から)

图版30 10号墳



石室正面  
(閉塞石上部除去)



羨道左側壁



羨道右側壁

図版31 10号墳



奥壁(地山面傾斜)

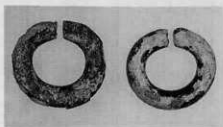
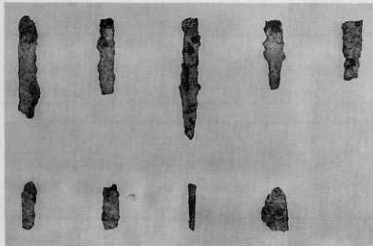


墳端の浅い周溝(北から)



164. 短頸壺

165~173. 鉄鏃



左174、右175、耳環

## 報 告 書 抄 録

フリガナ	オオモリシンデン コフングン
書名	大森新田古墳群
副書名	大森新田宅地造成事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	可見市埋文調査報告
シリーズ番号	33
編著者名	長瀬 治義 松本 茂生
編集機関	可見市教育委員会
所在地	〒509-0292 岐阜県可見市広見1丁目1番地
発行年月日	西暦 2001年3月30日

収録遺跡名	所在地 (カニシ オオモリ)	コ ー ド		北 緯	東 経	調査 期間	調査 面積	調査 原因	
		市町村	遺跡番号						
大森新田 5号墳	可見市 大森 1679-1	21214	09567	35度 22分 53秒	137度 05分 22秒	000105 }	290 m <sup>2</sup>	宅地 開発	
大森新田 6号墳	可見市 大森 1720-1	21214	09568	35度 22分 56秒	137度 05分 18秒		650 m <sup>2</sup>	宅地 開発	
大森新田 7号墳	可見市 大森 1719	21214	09569	35度 22分 56秒	137度 05分 17秒		320 m <sup>2</sup>	宅地 開発	
大森新田 8号墳	可見市 大森 1723-1	21214	04839	35度 22分 52秒	137度 05分 13秒		000630	530 m <sup>2</sup>	宅地 開発
大森新田 9号墳	可見市 大森 1723-1	21214	04838	35度 22分 52秒	137度 05分 11秒			480 m <sup>2</sup>	宅地 開発
大森新田 10号墳	可見市 大森 1723-1	21214	09570	35度 22分 52秒	137度 05分 12秒			580 m <sup>2</sup>	宅地 開発

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
大森新田 5~10 号墳	古墳	古墳時代 (後期)	横穴式石室 葺石	須恵器 鉄器類 玉類 他	堅穴系横口式類似石室1基 と、両袖式の横穴式石室5 基。5号墳の一括須恵器。

---

---

『大森新田古墳群』

発行 平成13年 3月30日

岐阜県可児市広見 1 - 1

可児市教育委員会

印刷 可児電子印刷

---

---